おおつかこふんぐん

大塚古墳群

（B区）

平成26年7月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮市の市街地から約３kmほど北西に位置する上戸祭付近は、釜川によって開けた低地と宇都宮丘陵の南端に位置する丘陵地帯からなり、近年、宅地化の進行や宇都宮北道路の完成等によって、その姿を大きく変えつつあります。

今回発行となった大塚古墳群は、県指定史跡の大塚古墳と隣接した西側に位置します。オフィス永瀬有限会社の宅地造成に先立ち、埋蔵文化財の取扱いについて、事業者と協議をいたしました。その結果、記録保存を目的とした発掘調査を実施しました。

本報告書は、発掘調査で得られた成果をまとめたものであり、多くの方々が多方面におかれまして、広く活用していただけますことを期待するものであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位、関係機関並びに終始ご協力いただきました地元関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成 26 年 7 月 31 日

宇都宮市教育委員会

教育長　水　越　久　夫

例　言

1．本書は、栃木県宇都宮市上戸祭町字大塚に所在する「大塚古墳群（Ｂ区）」の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、オフィス永瀬有限会社による宅地開発計画に伴うもので、同社の依頼により宇都宮市教育委員会を調査主体者とし、調査実務は株式会社日本窯業史研究所がこれにあたった。

3．調査は、平成25年９月10日～26年１月25日まで野外調査を実施し、その後同年７月31日まで整理・報告書作成作業を行った。

4．野外調査は水野順敏、柏﨑広伸があたり、整理・報告書作成作業は両名の他に新井　潔・鈴木智子の協力を得た。本書の執筆はⅠ－１を石川和弘、Ⅰ－２～４、Ⅱ－３～７、Ⅲ－１を水野、Ⅱ－１・２、Ⅲ－２・３を柏﨑、遺構・遺物の挿図及び遺物の実測・写真撮影、観察表作成は新井が担当し、編集作業は鈴木の協力を得た。写真図版の図版１～２は高橋　純氏（J・T空撮）、図版８・９は大門直樹氏（国士舘大学文学部技術職員）、図版３～７、10～20は水野、図版21～25は新井の撮影である。

5．調査組織

調査主体者・宇都宮市教育委員会

水越　久夫　教育長
赤石澤　亮　文化課長
富川　努　文化課文化財保護グループ係長（前任）
今平　利幸　文化課文化財保護グループ係長（後任）
石川　和弘　文化課文化財保護グループ

調査実務者・株式会社日本窯業史研究所

菅間裕二　代表取締役
水野順敏　調査担当者（日本考古学協会々員）
柏﨑広伸　調　査　員（栃木県考古学会々員）
新井　潔　整理担当者（日本考古学協会々員）

6．調査記録及び出土遺物は宇都宮市教育委員会が保管する。

7．野外調査から整理・報告書作成作業において下記の機関及び各位よりご助力とご指導を賜った。ご芳名を記して謝意を表する。

オフィス永瀬㈲、㈲鈴木倫宰総合コンサルタント事務所、栃木県教育委員会事務局文化財課、㈱塚田土建、樋山真司土地家屋調査士事務所、J・T空撮、㈱ダイショウ、秋元陽光、石川義夫、石川幸代、市橋一郎、上野とも子、内山敏行、大澤伸啓、賀来孝代、興野喜宣、小森牧人、須田浩太郎、大門直樹、高橋史朗、竹澤　謙、長井正欣、中島正雄、中村享史、南川欣幸、橋本澄朗、塙　静夫

（敬称略、順不同）

8．調査参加者

天羽國廣、石川義夫、入江春江、入江通子、郷間久男、篠原信子、塩沢寿男、諏訪白虎、鈴木一男、鈴木　博、菅野　繁、住谷　昭、長島　詮、長谷川健二、日高澄子、渡辺重夫

（敬称略、順不同）

凡　例

1．本遺跡名の略号は、Ｕ（宇都宮）－ＯＴＫ（大塚古墳群）で、各遺構の略号はSZ（古墳）、SK（壙穴・土坑）、SS（集石）、SX（不明遺構）で示す。

なお、１号墓は当初SZ－６としたが古墳では無いことが判明し変更した。

2．第２図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図『大谷』『宝積寺』『宇都宮西部』『宇都宮東部』を部分複製し加筆した。第３図は宇都宮市都市計画図２千５百分の１地形図『IX-HE　80－２』を部分複製し加筆した。第１表は宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第77集『八幡山古墳群１号墳・大塚古墳群』の第１表を転用加筆した。

3．遺構図面上の北の方位は、座標北を示す。土層図、断面図の水準線の数値は、海抜標高を示す。

4．挿図の遺物番号は本文中及び写真図版の番号と合致する。写真図版は○－□の前が挿図番号、後が遺物番号である。

目　　次

序

Ⅰ　はしがき

1．調査に至る経緯 …… 9

2．遺跡の位置と環境 …… 12

（1）地理的環境 …… 12

（2）歴史的環境 …… 12

3．調査概要と経過 …… 13

4．調査の方法と基本層序 …… 15

（1）調査の方法 …… 15

（2）基本層序 …… 16

Ⅱ　遺構と遺物

1．３号墳（位置・外部施設、土器集中区、埋葬主体部、出土遺物） …… 19

2．４号墳（位置・外部施設、埋葬主体部、出土遺物） …… 21

3．５号墳（位置・外部施設、埋葬主体部、出土遺物） …… 34

4．１号墓（位置・外部施設、付属施設、出土遺物） …… 41

5．壙穴 …… 46

6．その他の遺構 …… 54

7．その他の出土遺物 …… 60

Ⅲ　総括

1．土地利用の変遷 …… 63

2．古墳群・古墳について …… 64

3．１号墓及び壙穴群について …… 66

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表
第２表　３号墳出土遺物観察表
第３表　３号墳土器集中区出土遺物観察表
第４表　４号墳出土遺物観察表
第５表　５号墳出土遺物観察表
第６表　５号墳周溝内出土土器観察表
第７表　壙穴・１号墓出土遺物観察表
第８表　その他の出土土器（縄文）観察表
第９表　その他の出土遺物（石器）観察表
第10表　その他の出土遺物（土師器・須恵器・瓦）観察表

挿　図　目　次

第１図　試掘調査図
第２図　遺跡付近地形図
第３図　遺跡の位置と周辺遺跡
第４図　基本層序
第５図　調査区現況図
第６図　遺構配置図（１）古墳時代以降
第７図　３号墳現況図
第８図　３号墳墳丘図
第９図　３号墳墳丘・周溝土層図
第10図　３号墳土器集中区土器出土状態
第11図　３号墳出土遺物（１）墳丘・周溝
第12図　３号墳出土遺物（２）土器集中区－１
第13図　３号墳出土遺物（３）土器集中区－２
第14図　４号墳現況図
第15図　４号墳墳丘図
第16図　４号墳墳丘・周溝土層図
第17図　４号墳墳丘土器出土状態
第18図　４号墳石室図（１）
第19図　４号墳石室図（２）
第20図　４号墳石室天井石と旧地表面の掘り込み
第21図　４号墳出土遺物
第22図　５号墳現況図
第23図　５号墳墳丘図
第24図　５号墳墳丘土層図
第25図　５号墳周溝土層図
第26図　５号墳周溝南東部土器出土状態
第27図　５号墳石室図（１）
第28図　５号墳石室図（２）
第29図　５号墳出土遺物（１）墳丘・墓道
第30図　５号墳出土遺物（２）周溝南東部
第31図　１号墓・出土遺物
第32図　壙穴（１）SK-02・03、05～10
第33図　壙穴（２）SK-11～14、18～21
第34図　壙穴出土遺物
第35図　遺構配置図（２）古墳時代以前
第36図　その他の遺構（１）SK-04、15～17、22～24、SS-01
第37図　その他の遺構（２）SX-01・02
第38図　その他の遺物（１）縄文時代
第39図　その他の遺物（２）古墳時代以降

図 版 目 次

図版１　Ａ．調査区全景（北空中より）　Ｂ．調査区全景（真上空中より）

図版２　Ａ．３号墳全景（東空中より）　Ｂ．４号墳全景（南空中より）　Ｃ．５号墳全景（南空中より）
Ｄ．１号墓全景（西空中より）

図版３　Ａ．調査前遠景（南東より）　Ｂ．調査前全景（北東より）　Ｃ．調査区遠景（南東より）　Ｄ．調査区近景（南より）

図版４　Ａ．３号墳調査前全景（東より）　Ｂ．同前全景（北東より）　Ｃ．同前周溝南（北東より）
Ｄ．同前周溝北（東より）　Ｅ．同前北周溝西土層（東より）　Ｆ．同前周溝東土層（南より）
Ｇ．同前周溝内土器（北より）　Ｈ．同前近接（南より）

図版５　Ａ．３号墳封土東西土層（南より）　Ｂ．同前墳丘東封土中の土器群（東より）　Ｃ．同前（東より）
Ｄ．同前（北より）　Ｅ．同前土器群下層土層（東より）　Ｆ．同前旧地表面（東より）　Ｇ．同前縄文時代 確認面（西より）　Ｈ．同前墳丘下出土遺物（北より）

図版６　Ａ．４号墳調査前全景（南東より）　Ｂ．同前全景（南より）　Ｃ．同前周溝北土層（東より）
Ｄ．同前周溝東土層（南より）　Ｅ．同前周溝北東土層（北西より）　Ｆ．同前周溝南土層（東より）
Ｇ．同前周溝南 耳環出土状態（南より）　Ｈ．同前南側土器出土状態

図版７　Ａ．４号墳墓道南北土層（南西より）　Ｂ．同前石室外側の閉塞状況（南より）　Ｃ．同前内側の閉塞状況（南より）　Ｄ．同前（西より）　Ｅ．同前羨門東脇の刀子出土状態（南より）　Ｆ．同前（南西より）　Ｇ．同前墓道の耳環出土状態（南より）　Ｈ．同前墓道西上部の耳環出土状態

図版８　Ａ．４号墳石室近景（南東より）　Ｂ．同前石室北半部（南より）　Ｃ．同前西壁（南東より）
Ｄ．同前東壁(南西より)　Ｅ．同前石室南半部(北より)　Ｆ．同前(北東より)　Ｇ．同前(北より)
Ｈ．同前天井石（北下方より）

図版９　Ａ．４号墳石室羨門（南より）　Ｂ．同前石室北半部（南より）　Ｃ．同前奥壁（南より）　Ｄ．同前天井石（南下方より）　Ｅ．同前天井・奥壁（南下方より）　Ｆ．同前奥壁（南より）　Ｇ．同前南半部（北下方より）　Ｈ．同前天井石（北下方より）

図版10　Ａ．４号墳墳丘東西封土土層(南より)　Ｂ．同前中央部土層(南東より)　Ｃ．同前封土南北土層(南西より)　Ｄ．同前封土東西土層（南東より）　Ｅ．同前封土南北土層北半部（東より）　Ｆ．同前石室天井石と旧地表面の掘込（北より）　Ｇ．同前封土除去後の石室（南より）　Ｈ．同前（東より）

図版11　Ａ．４号墳石室羨道東壁（西より）　Ｂ．同前石室羨道西壁（東より）　Ｃ．同前玄門（南より）
Ｄ．同前玄門 横断面（南より）　Ｅ．同前石室根石（南より）　Ｆ．同前玄室横断面（南西より）
Ｇ．同前石室根石（北より）　Ｈ．同前玄室 横断面（南より）

図版12　Ａ．４号墳石室掘方（南より）　Ｂ．同前（北より）　Ｃ．同前東壁北半の抉込み（西より）
Ｄ．同前石室天井石上部の加工痕(西より)　Ｅ．同前天井石の加工痕(東より)　Ｆ．同前近接(東より)　Ｇ．同前石室上部の裏込め（東より）　Ｈ．同前（南より）

図版13　Ａ．５号墳調査前全景（南より）　Ｂ．同前全景（南より）　Ｃ．同前周溝南側土層（西より）
Ｄ．同前周溝北側土層（東より）　Ｅ．同前周溝南東部土器出土状態 (1)（東より）　Ｆ．同前周溝南東部土器出土状態 (2)（南東より）　Ｇ．同前石室南側の河原石出土状態（南より）　Ｈ．同前石室確認状況（南より）

図版14　A．５号墳石室全景（南より）　B．同前（北より）　C．同前閉塞（南より）D．同前玄門部（北より）　E．同前石室（北東より）　F．同前玄門部（北より）　G．同前羨道東壁（西より）　H．同前羨道西壁（東より）

図版15　A．５号墳羨道追葬時床面(南より)　B．同前羨道追葬時床面(南面)　C．同前羨道部掘方底面(南より)　D．同前玄門部断面（南より）　E．同前奥壁（南より）　F．同前玄室 横断面（南より）　G．同前墳丘封土東側土層（南より）　H．同前墳丘封土北側土層（東より）

図版16　A．５号墳石室根石（南より）　B．同前石室根石（北より）　C．同前石室奥壁（南より）　D．同前二次加工痕（南より）　E．同前石室奥壁縦断面（西より）　F．同前石室掘方（南より）　G．同前石室掘方（北より）　H．同前東壁の抉込み（北西より）

図版17　A．１号墓全景（南より）　B．同前西側の土壙完掘（南より）　C．同前土壙北端の炭化物（南東より）　D．4号墳北東の土壙群（南西より）　E．SK-02 完掘（南より）　F．SK-03 完掘（南より）　G．SK-05 完掘（東より）　H．SK-06 完掘（南西より）

図版18　A．SK-06 手前のローム土中土器出土状態（東より）　B．SK-07 完掘(南より)　C．SK-08･09 完掘(南東より)　D．SK-10 完掘（南より）　E．同前手前の土器出土状態（南より）　F．SK-11 完掘（南より）　G．SK-12 完掘（南より）　H．SK-13 完掘（南西より）

図版19　A．SK-14 完掘(南より)　B．SK-18 完掘(西より)　C．SK-19 完掘(南西より)　D．SK-20 完掘(南より)　E．SK-21 完掘（南東より）　F．４号墳丘下の遺構（南東より）　G．SK-04 完掘（南東より）　H．SK-15 完掘（南より）

図版20　A．SK-16 完掘(南西より)　B．SK-17 完掘(南より)　C．SK-22 完掘(西より)　D．SK-23 完掘(東より)　E．SK-24 完掘（東より）　F．SS-1 完掘（南より）　G．SX-01 完掘（東より）　H．SX-02 完掘（西より）

図版21　３～５号墳、１号墓、SK-06・10・18 出土遺物

図版22　３号墳土器集中区出土土器（１）

図版23　３号墳土器集中区出土土器（２）

図版24　５号墳周溝南東部出土土器

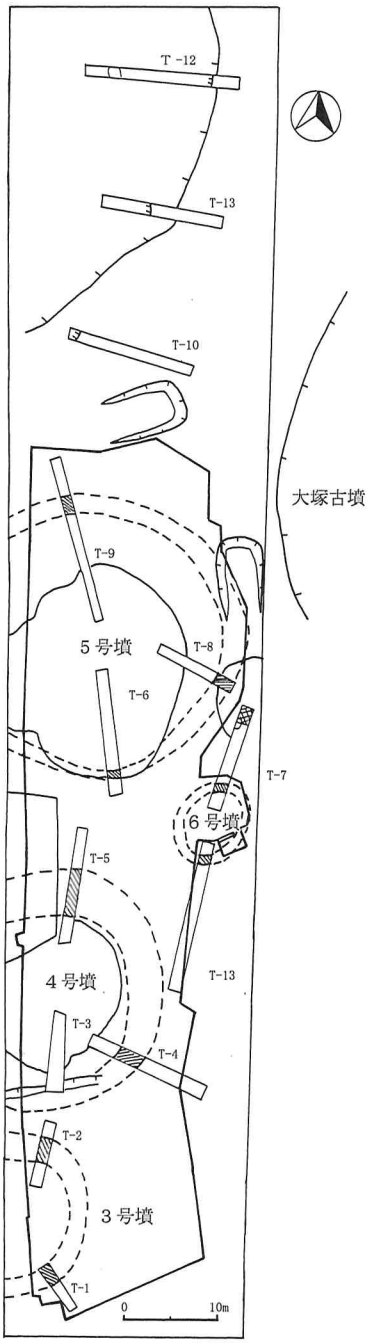
図版25　その他の出土遺物（縄文土器、石器、瓦）

Ⅰ　はしがき

1．調査に至る経緯

宇都宮市上戸祭 2989- 4に所在する個人所有地（約 4,000 ㎡）に対して宅地造成が計画された。当該地は、大塚古墳群（県遺跡番 2359）と呼ばれる周知の遺跡である。なお、東側に隣接する大塚古墳は、昭和 32 年 8 月 27 日に指定された県指定の史跡である。

平成 24 年 2 月 21 日・22 日・24 日に市教委が確認調査を行った。調査の結果、古墳が 4 基確認された。3 号墳は墳丘径約 12 m（周溝を含めた直径は約 17 m）で、墳丘が半分残っているが、石室は既に削平され



第 1 図　試掘調査図

第 2 図　遺跡付近地形図

ていると考えられる。４号墳は墳丘径約 19 m（周溝を含めた直径は約 26 m）で、西側１／３が削平されている。Ｔ－３、Ｔ－４のトレンチ内で凝灰岩の破片が見られることから南側に開口する横穴式石室が存在するものと考えられる。５号墳は墳丘径約 28 m（周溝を含めた直径は約 31 m）で、西側１／５が削平されている。Ｔ－６のトレンチ内で凝灰岩が見られることから南側に開口する横穴式石室が存在するものと考えられる。６号墳は現状では削平された古墳で、Ｔ－７、Ｔ-13 で周溝が確認された。墳丘径約６m（周溝を含めた直径は約８m）の小規模なもので、埋葬施設はすでに削平されているものと考えられる。

Ｔ-10 ～Ｔ-12 では、現地形でみられる自然の谷地形の状況が確認された。Ｔ-10・Ｔ-11 では遺構は確認されなかったが、Ｔ-12 の深さ 1.5 mの谷部で直径約１mの円形の土坑が１基確認された。

この調査成果をもとに、事業者である　オフィス永瀬有限会社と協議した結果、発掘調査が必要となり、市教委を調査主体者とし、調査実務は事業者の依頼を受けた　株式会社日本窯業史研究所がこれにあたることとなった。

発掘調査の対象面積は約 1,900 ㎡で、調査期間は平成 25 年９月 10 日～平成 26 年１月 25 日である。この間、１月９日・17 日・23 日に、市教委による立会いを受け、１月 25 日には野外調査をすべて終了した。

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	所　在　地	時代と種別	備　　考
1	大塚古墳群	宇都宮市戸祭町	古墳時代の古墳	県指定史跡、円墳５基
2	北山古墳群	宇都宮市瓦谷町	古墳時代の古墳	前方後円墳３基、円墳９基、（現存５基）
	宮下古墳			墳長 43 mの前方後円墳
	雷電山古墳			墳長 40 mの前方後円墳
	権現山古墳			墳長 40 mの前方後円墳
3	上の台遺跡	宇都宮市瓦谷町	古墳時代の集落跡	
4	曽理部羅遺跡	宇都宮市瓦谷町	縄文・古墳時代の集落跡	
5	欠の上遺跡	宇都宮市瓦谷町	縄文・古墳時代の集落跡 古代の須恵器窯跡	
6	広表窯跡	宇都宮市瓦谷町	古代の須恵器窯跡	
7	桜畑遺跡	宇都宮市瓦谷町	縄文・弥生の集落跡	
8	野沢石塚遺跡	宇都宮市野沢町	縄文・弥生の集落跡	
9	関堀土用地遺跡	宇都宮市関堀町	古墳時代の集落跡	
10	瓦塚日満遺跡	宇都宮市瓦谷町	縄文・古墳時代の集落跡	
11	瓦塚古墳群	宇都宮市長岡町	古墳時代の古墳	市指定史跡、墳長約 50 mの前方後円墳、円墳 41 基
12	谷口山古墳群	宇都宮市長岡町	古墳時代の古墳	市指定史跡、円墳５基
13	長岡百穴古墳	宇都宮市長岡町	古墳時代の古墳	県指定史跡、横穴墓 52 基
14	百穴裏遺跡	宇都宮市長岡町	縄文・古墳時代の集落跡	
15	浮ノ森古墳	宇都宮市上戸祭町	古墳時代の古墳	前方後円墳？
16	北原遺跡	宇都宮市上戸祭町	縄文・古墳～平安時代の集落跡	
17	上戸祭中ノ島遺跡	宇都宮市上戸祭町	縄文・古墳時代の集落跡	
18	大ジノ古墳群	宇都宮市上戸祭町	古墳時代の古墳	円墳８基
19	上戸祭大塚窯跡	宇都宮市上戸祭町	古代の瓦窯跡	
20	松ヶ丘遺跡	宇都宮市上戸祭町	縄文・古墳時代の集落跡	
21	北の前遺跡	宇都宮市上戸祭町	縄文～中世の集落跡	
22	前田遺跡	宇都宮市上戸祭町	古墳～平安時代の集落跡	
23	田向遺跡	宇都宮市長岡町	縄文・古墳時代の集落跡	
24	根河原窯跡	宇都宮市上戸祭町	古代の瓦窯跡	
25	水道山窯跡	宇都宮市中戸祭町	古代の瓦窯跡	
26	山本山古墳群	宇都宮市山本町	古墳時代の古墳	円墳２基
27	戸祭兜塚古墳群	宇都宮市戸祭町	古墳時代の古墳	円墳６基
28	戸祭兎田遺跡	宇都宮市戸祭町	古墳時代の散布地	
29	祥雲寺境内古墳群	宇都宮市戸祭町	古墳時代の古墳	墳長 40 mの前方後円墳
30	八幡山古墳群	宇都宮市塙田町	古墳時代の古墳	
31	御蔵山古墳	宇都宮市塙田町	古墳時代の古墳	墳長 40 mの前方後円墳
32	入畑窯跡群	宇都宮市山本町	江戸～明治の窯跡	

第３図　遺跡の位置と周辺遺跡　●古墳　■集落　▲窯跡

2．遺跡の位置と環境

（1）地理的環境（第2図）

大塚古墳群は、栃木県宇都宮市上戸祭町字大塚2989-4に所在し、市街地の中心部から北方約3㎞の丘陵部の雑木林に立地する。しかし近年は宇都宮市の「山の手」として急激に宅地化が進み、今次調査の要因もその一環である。なお、調査区の北方約250mを宇都宮環状線が通り、南方約0.8㎞を日光街道が東西に延びるなど自動車交通の要衝である。

宇都宮市は関東平野の北端に位置する栃木県のほぼ中央部に所在し、日光山地を源とする鬼怒川・大谷川・黒川などが形成する複合扇状地の扇端に立地している。この為、山地から平野部への転換点にあたり、市域の北側には丘陵が見られるが、南側では平野が広がっている。

市内は南流する鬼怒川・田川・姿川などによって、岡本台地・田原台地・宝木台地等が形成されている。

さらに、旧上河内町の高館山を北端とする宇都宮丘陵（標高150～200ｍ）が市内中心部の八幡山公園に向って南北に延びており、今次調査区はこの丘陵頂部南縁から南斜面（標高150～155ｍ）に立地している。

この宇都宮丘陵は市内瓦谷町付近で一時的に東流する田川によって北部と南部に分断されており、丘陵東側は急峻な崖面や開析谷が多く見られるのに対し、西側は比較的緩やかな斜面となっている。宇都宮丘陵南部は東側を田川が、西側を釜川が南流しており、丘陵の裾部には両者によって形成された田川低地が広がっている。この丘陵の基盤は第三紀中新世の凝灰岩や砂岩から成り、丘陵上にはローム層が堆積している。

基盤の凝灰岩は比較的柔らかく、この付近では長岡石と呼ばれ、かつては建築材として採掘されたこともある。また、各所に露頭が見られ、調査地の北東方約800ｍの露頭地には県指定史跡長岡百穴古墳があり、52基に及ぶ横穴墓が所在する。さらに、近隣の古代の集落跡では竪穴住居跡のカマドの用材として使用されており、本遺跡と同様に周辺の古墳の石室用材としても多用されている。

（2）歴史的環境（第2・3図）

第3図、第1表に示す通り、本古墳群の周辺には縄文時代より中・近世にわたる多数の遺跡が所在する。

このうち、古墳（古墳群）に目を向けると本古墳群の北に隣接する同一丘陵上には大ジノ古墳群（18）が所在し、現在8基の円墳の存在が知られるものの、盗掘によって石室の露出したものが散見される。別の名称が付されているが、立地から同一の古墳群と考えられる。したがって合計13基の円墳のうち最大の古墳が大塚古墳（1号墳）で、県指定史跡となっている。本古墳群が立地する宇都宮丘陵上には多数の古墳群が所在するが、そのほとんどが後期の古墳と見られる。丘陵の南側を見るとこれらの中で最も古いと考えられる御蔵山古墳（31）が南端に位置する。全長62ｍの前方後円墳で、埋葬施設は不明なものの出土した埴輪から6世紀前半と考えられている。この北側に多数の円墳から成る八幡山古墳群（30）が所在し、祥雲寺境内古墳（29）と呼ばれる全長40ｍの前方後円墳も所在する。さらに戸祭兜塚古墳群（27）、山本山古墳群（26）など5～6基の円墳で構成される古墳群が釜川に面する丘陵上に点在している。

また、丘陵の北側に目を転じると、北東方約1.5㎞に瓦塚古墳群（11）が所在する。市内でも最大級の古墳群で、全長50ｍ程の前方後円墳の瓦塚古墳を主墳とし30基程の円墳群によって構成されている。この東方には谷口山古墳を中心とする谷口山古墳群（12）がある。さらに、北東方約3㎞に北山古墳群（2）が所在する。この古墳群は権現山古墳、宮下古墳、雷電山古墳の3基の前方後円墳と円墳群から成り、権現山古墳は石室形態から初期の横穴式石室と考えられている。

また、北東方約 0.8 kmには前述の長岡百穴古墳（13）があり 52 基の横穴墓が所在する。数少ない内陸部の横穴墓の例として興味深い。

次に集落跡を見ると、各所に点在するが、本古墳群の西方約 400 mの前田遺跡（22）、同 500 ～ 600 mの北の前遺跡などで６世紀末葉から 10 世紀にわたる集落跡が調査されており、本古墳群との関係が推察された。

また、本古墳群の東側隣接地で上戸祭大塚窯跡（19）が、個人住宅建設に伴い確認された。ここで焼かれた瓦が前述の前田遺跡から多数出土しており両者の関係も興味深い。さらに、北西約 2.3 ～ 2.6 kmの釜川沿いに欠の上・広表（５・６）の須恵器窯跡、南方 0.7 ～ 0.8 kmの水道山・根瓦窯跡（25・26）の瓦窯跡、近世～近代の所産と推定される入畑窯跡群など各種の窯跡が所在するのも当地の特徴であろう。

なお、本古墳群のＡ区２号墳やＢ区（今次調査）５号墳は石室が破壊され、天井や奥壁の石材が持ち出されていた。今次調査区ではその時期を特定し得る遺物の出土は無かったがＡ区２号墳からは、かわらけや北宋銭などが出土し該期の行為と推考される。前述の北の前遺跡では溝に囲まれた有力者の屋敷跡と見られる施設が調査されており、その関係が推察される。

３．調査概要と経過

調査区は東西 20 ～ 25 m、南北約 100 mの細長い形状であり、丘陵南斜面に立地することから、南北の高低差は 10 m程である。北東には本古墳群の盟主的存在である大塚古墳（１号墳）が所在する。径 53.4 m、高さ 6.2 mの２段築成の大型円墳で県指定史跡となっている。その南下方には近年個人住宅の建設に伴い調査された２号墳が所在した。

前記の試掘調査によって調査区内には３～６号の計４基の古墳存在が推定された。調査の進捗に伴い６号墳は古墳では無く古代の墓所と推察されたことから１号墓と名称を改めた。

斜面の南西下方に位置する３号墳は既に宅地開発によって中央から西側が削平されていた。この為、石室は遺存せず、墳丘の東側３分の１程を調査し得たに過ぎないが、径 18 m程の円墳と推定される。しかし、調査の過程において墳丘封土を除去すると、旧地表面に近い封土中より約 80 個体の土師器坏がまとまって出土した。

斜面の中位西寄りに位置する４号墳も西側の３分の１程が既に削平されていた。径約 19 mの円墳で本跡は試掘において墳頂部に乱れが無いことから石室は天井部まで遺存すると推測された。調査の結果、石室は南に向けて開口する横穴式石室で、天井石や閉塞部も遺存したが、羨道上部に穿たれた盗掘坑によって数次の盗掘にあったと推察され、副葬品は極僅かであった。石室は凝灰岩の割石（削石）積みで、奥壁は１石、天井石は５石であったが、羨道の１石は危険な為調査途中に除去した。なお、調査の進捗に伴い墳丘の封土を除去すると、旧地表面に不規則に掘り込まれた溝状の痕跡が認められた。当初は動物の巣穴かと思われたが、埋積土の締りが強く、石室を囲むように見られることから、墳丘の構築に伴う何らかの行為と判断した。

遺物は石室の攪乱土より耳環１点の他は、周溝・墓道などから耳環４点、刀子１点、石室と盗掘坑の攪乱土中よりガラス小玉５点、墳丘南西より土師器高坏、坏などが出土した。

今次調査区の最上位に位置する５号墳は、西端の一部が調査区外に延びて削平され、東端はかろうじて調査区内に所在した。東に隣接する大塚古墳とは周溝外壁どうしの間隔が２～３mと近接していた。径約 27.5 mの円墳である。近隣の盗掘を受けた古墳の多くは石室が露出したり、墳頂部が陥没している例が多いことから、試掘調査時には石室は天井部まで遺存すると推測された。しかし、調査の結果南に向けて開口

する横穴式石室で、石室の掘方に匹敵するような大型の穴が掘り込まれていることが判明した。石室は凝灰岩の割石（削石）積みで、内部には石材や土砂が充満し、玄室の天井石が１石原位置を離れた状態で遺存したが他の天井石や奥壁の上半部が持ち出されており、石材目的の盗掘と推察された。また、その後埋戻しが行われていたが、石室内から副葬品の出土は皆無であった。墳丘・墓道より土師器、須恵器が少量出土し、周溝南東からは30個体の土師器坏がまとまって出土している。

前述の６号墳改め１号墓としたものは、幅60～90㎝の溝が径６ｍ程の不整円形に廻り、その西端に0.9×２ｍの長方形の土坑が付随する。土坑（壙）内には炭化材が遺存し、壁面に火熱で赤化した部分も見られたことから火葬墓・火葬跡の可能性を想定して慎重に調査を進めたが一片の火葬骨片も見出できなかった。土坑内より出土の土師器坏から奈良時代の所産と推定される。

また、古墳の周溝内やその周辺より壙穴と見られる土坑（壙）が10数基確認された。その多くは所謂「側壁抉込土坑」であり、内部より遺物の出土は無いが、周溝内に設けられたSK-06・10・18では開口部の手前より土師器坏、甕、須恵器蓋・坏などが出土し、古墳時代後期～奈良時代にわたるものと推察された。

さらに、試掘調査に際して縄文土器の出土や土坑の確認があり該期の遺構の調査が必要とされた。今次調査でも周溝内・外で土坑が確認され、少量ながら土器片なども出土した。この為、各古墳の調査が終了後墳丘下の旧表土を除去してローム漸移層もしくはローム層上面において該期の遺構の調査を行った。その結果、数基の土坑と集石遺構、性格不明遺構を調査し、縄文時代前期～後期の土器や石器が少量出土した。

調査は平成25年９月10日より準備に入り、繁茂する雑草や伐採木を処理し、現況写真の撮影や現況測量を行った。９月27日より重機を使用し表土の掘削を行い、10月１日から人力による本格的調査に入った。３・４・５号墳と順次調査を進め、全体の周溝を掘り上げ、５号墳の石室を掘り終えた11月23日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。この間10月22日～11月８日にかけて地元上戸祭小学校の児童の見学、11月15日に市文化財調査員等の視察があった。空中写真の撮影を終えて、順次封土の除去、さらにはその下層の調査に移行していった。

また、３号墳の封土中の土器群を調査中の11月27日、前の県考古学会々長 塙静夫氏、文化財保護グループ 富川努係長の来跡、12月３日には市文化財審議委員の竹澤謙、橋本澄朗両氏の視察があり、３号墳封土中の土器群について埋設用の掘り込みの追求、６号墳の１号墓への名称変更等の指導があった。

石室内部の実測を終えた４号墳は天井石を撤去して解体作業に入る予定であったが旧表土層に掘り込まれた溝状の遺構の掘り下げ及び記録の終了まで延期した。これと並行して５号墳の石室の記録を行い、残土運搬の通路下にあった同墳周溝の東端部分の調査、３号墳墳丘下の縄文時代の調査を行った。

その後、１月11日に５号墳の石室を人力で解体に着手、４号墳は１月15日に重機による天井石の撤去を行い、石室の構築状態を調査した。さらに、５号墳は１月17日より、４号墳は同月20日より縄文時代の面の調査に取りかかる。５号墳ではほとんど遺構は認められなかったが、４号墳は土坑、不明遺構、集石遺構などを確認した。

１月９・17・23日市教委文化課による終了確認、翌24日には事業主のオフィス永瀬㈲による立ち会いを受けた。今回は埋戻しを行わない為、１月25日に器材の撤収と近隣挨拶を行い全ての野外調査を終了した。

遺物整理は、現地調査と一部並行して実施し、整理・報告書作成作業は平成26年７月31日まで行った。

4．調査の方法と基本層序

（1）調査の方法

調査区内は、平成24年の試掘調査以前は広葉樹の大木が茂る雑木林で、調査着手時の平成25年には調査区内に伐採木が山積みされ、雑草が人の背丈程に繁茂していた。先ず雑草を人力で処理し、重機で伐採木を移動して現況写真の撮影及び現況測量（縮尺100分の１、25㎝コンター）を行った。測量にあたっては公共座標（世界測地系）を使用した。調査区南西隅に原点をおき、Ｘ軸をローマ数字、Ｙ軸をアルファベットで表し、原点の1Aの座標値はＸ＝65,470ｍ、Ｙ＝3,550ｍを示す。標高は海抜標高による。

その後、重機による表土除去作業に入るが、樹木の根はすべて残し、必要に応じて適宜人力で除去した。

また、表土等の置場については開発区域北寄りの谷部があてられ、調査区東端の古墳の調査に影響が出ない部分を重機の通路とした。さらに、前述の如く調査区は南と北で高低差が10ｍ程もあり、人力で100ｍ以上先の土置場へ運ぶのは効率的で無い為、この部分を人力掘削土の仮置場とし、適宜重機で移動した。

調査の進捗に伴い、墳丘の確認、周溝の埋積土を除去し、写真撮影と墳丘測量（縮尺100分の１、25㎝コンター）を行った。周溝の土層の記録は適所で行い、周溝内埋葬と見られる土壙の部分では慎重に対応した。埋葬主体部の調査は、４号墳は石室が完存の為墓道より閉塞を確認し、調査を進めた。５号墳も天井部が遺存すると思われた為墓道側より調査を進めたが、その後石室上部に大規模な盗掘坑を確認し、相方からの調査に切り替えた。石室内にはいずれも土砂が堆積していた為、有効と思われる土砂はフルイ掛けした後に水洗いを行い遺物の見出につとめたが、その結果は４号墳のガラス小玉５点に留まった。石室内の調査・記録の終了後、墳丘の封土を記録しながら除去して旧地表面の確認を行った。その結果、４号墳では細い溝状の掘り込みが多数認められ、これを調査・記録の後石室の解体・記録に入った。石室の解体にあたっては、４号墳の天井石は重機を使用したが、他は、軟質の凝灰岩であったことから全て人力で行った。

いずれの古墳も旧表土層を除去して、ローム漸移層もしくはローム層上面まで掘り下げて縄文時代の遺構の調査を行った。

調査の記録は、石室、墳丘土層、周溝土層の他、土坑類、性格不明遺構なども縮尺20分の１で統一した。なお、３号墳封土中の土器群、４号墳墳丘上の土器、５号墳周溝内の土器群、１号墓の土坑内の炭化材、集石遺構などは縮尺10分の１で実測した。

写真記録は35㎜版のモノクロ、カラーリバーサルフィルムを使用し、デジタルカメラで補足した。撮影にあたってはデータを記した黒板を写し込み、三脚及び大形脚立を使用した。遠景は対岸の丘陵より撮影し、ラジコンヘリによる空中写真も撮影した。

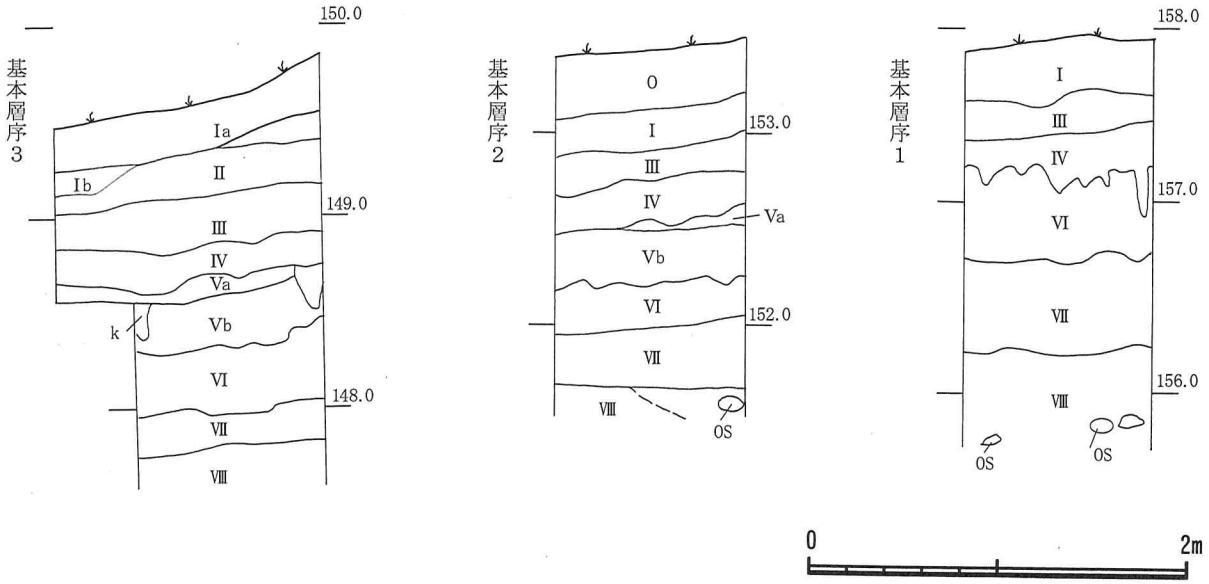
調査の公開については、駐車場の問題等から公式の現地説明会は実施し得なかったが、地元小学校の児童の見学、近隣住民の方々や古墳研究者への対応は適宜行った。

工事の関係上、埋戻し作業は行わず、野外作業を終了した。

整理・報告書作成作業及び、遺物整理は野外調査と一部並行して実施し、その後継続して作業を行い平成26年７月末日まで行った。

（2）基本層序

今次調査区は丘陵斜面に立地することから部分的に堆積の相違が見られた。第４図に斜面上方、同中位、同下方の３か所の柱状図を示した。自然流出か古墳築造に伴う土木工事によるものか判然としないが、第Ⅱ層が失われた所や、自然の作用と見られるIP・SPの純層が認められない部分があった。平面的な調査においても、IP・SPの堆積は３・４号墳の西寄りと５号墳の南東部に限定して見られた。



第４図　基本層序

基本層序

O.現代整地層

Ⅰ.表土層　黒褐色土(10YR3/1),暗褐色土(10YR3/3)20%含む。植物の根多く締り弱い。

Ⅱ.暗褐色土(10YR3/3),にぶい黄橙色土(10YR5/4),SPB小,IPを少量含む。締りあり。

Ⅲ.黒褐色土(10YR3/2),LR・IPを少量,SP微量含む。締り強い。

Ⅳ.暗褐色土(10YR3/3),LRを少量,IP・SPを微量含む。V層とは不整合に堆積。

Va.七本桜パミス(SP)純層。

Vb.今市パミス(IP)層純層。

Ⅵ.明黄褐色土(10YR6/6),IP・SPを少量,青灰色R,黒色岩片Rを微量含む。締り強い。

Ⅶ.明黄褐色土(10YR6/6),赤褐色Rを微量含む。締り強い。

Ⅷ.明黄褐色土(10YR6/6),爽雑物をほとんど含まず締りやや弱い。部分的にOSB中が認められる。KP層と不整合に堆積。

◎土層注記の略号

ローム粒＝LR(1～10mm)

ローム塊＝LB(10mm以上)

R(1～10mm),B小(11～30mm),B中(31～60mm),B大(60mm以上)

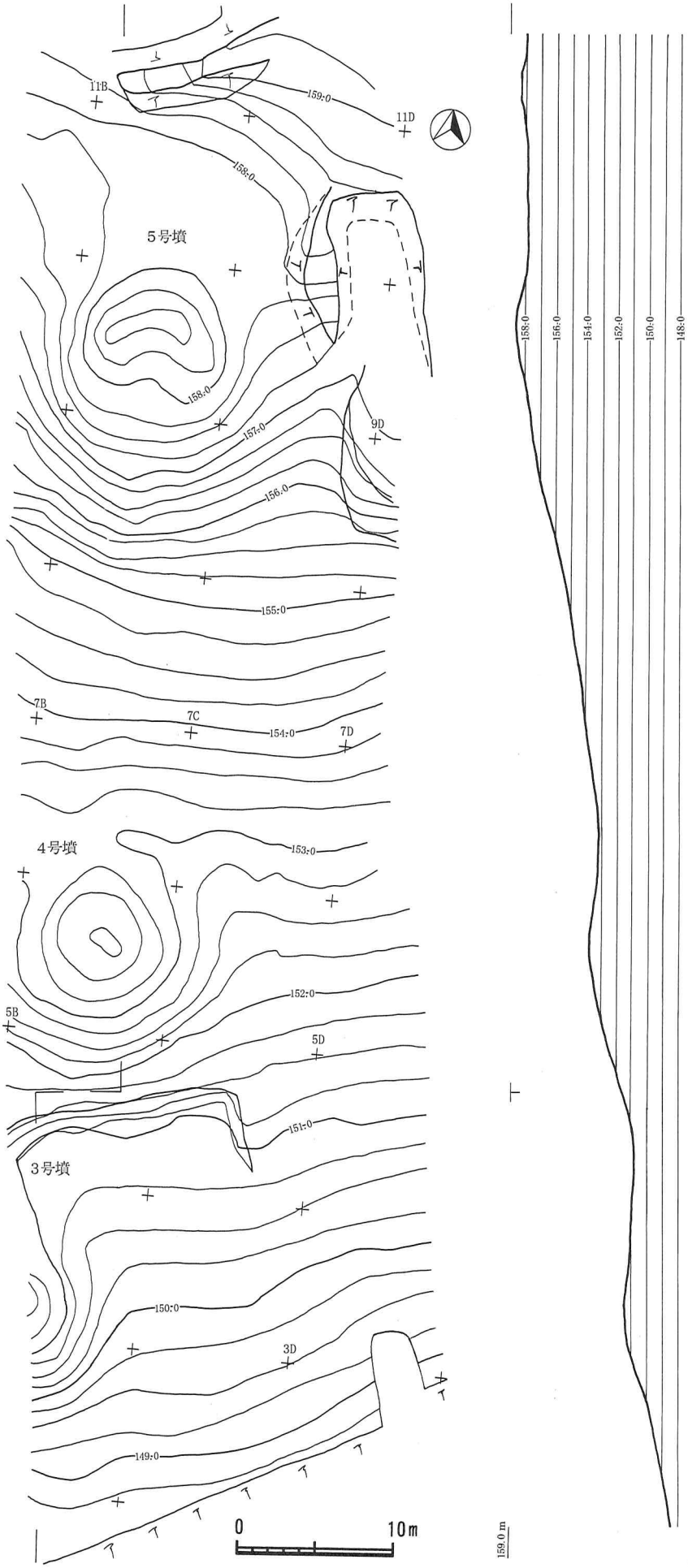
今市パミス＝IP

七本桜パミス＝SP

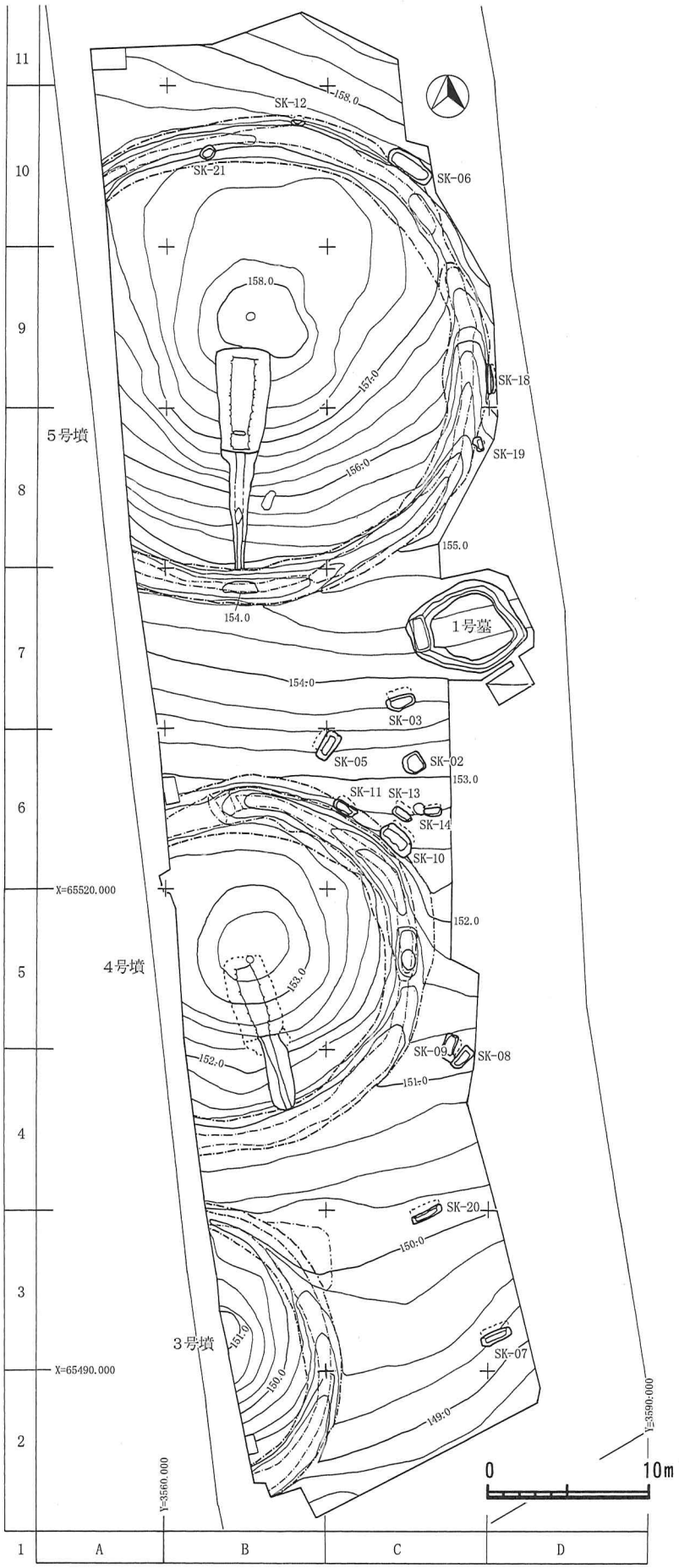
鹿沼パミス＝KP

小川スコリア＝OS

含 む 量＝微量(2%以下),少量(3～10%),中量(11～30%),多量(31%以上),主体(50%以上)


11B
11D
159.0
158.0
5号墳
158.0
157.0
9D
156.0
155.0
7B
7C
154.0
7D
4号墳
153.0
152.0
5B
5D
151.0
3号墳
150.0
3D
149.0
0
10m
158.0
156.0
154.0
152.0
150.0
148.0
159.0 m

第５図　調査区現況図



第６図　遺構配置図（１）古墳時代以降

Ⅱ遺構と遺物

今次調査では３～５号墳の円墳３基、奈良時代の墓所と推察される１号墓、古墳時代後期～奈良時代と推定される壙穴 16 基の他、その他の遺構として縄文時代の土坑７基、集石遺構１基、性格不明遺構２基などを調査した。

出土遺物は、古墳時代の土師器が大部分を占めるが、須恵器、耳環、刀子、ガラス小玉の他、奈良時代の須恵器、土師器、古瓦、縄文時代前期～後期の土器、石器などが出土した。

１．３号墳

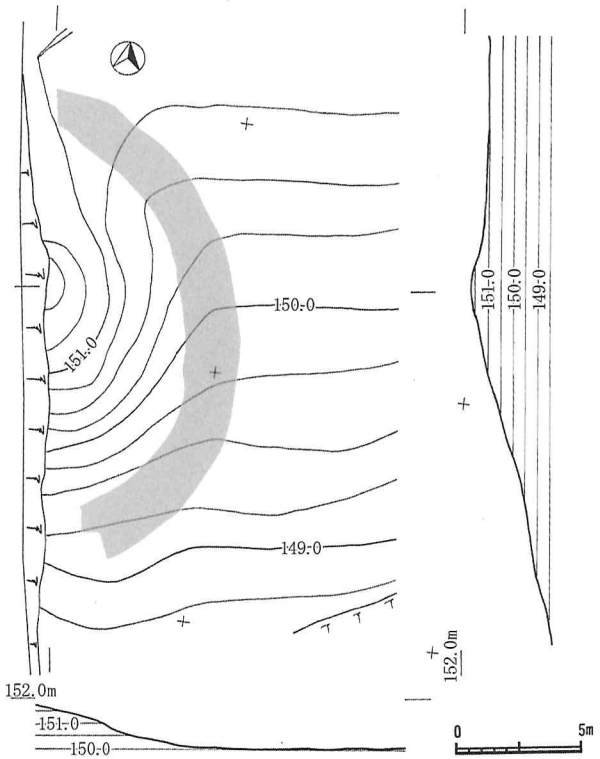
位置・外部施設（第７～10 図、図版４～５）

調査区の南西端、2B・3BGr に所在する。北約３ｍに４号墳が隣接し、南は市道に切られ、東側に古墳は認められなかった。さらに、西側は既に宅地化され、墳丘の中央～西寄りが削平されており、東側の３分の１程が遺存したに過ぎない。したがって埋葬主体部は遺存しなかった。

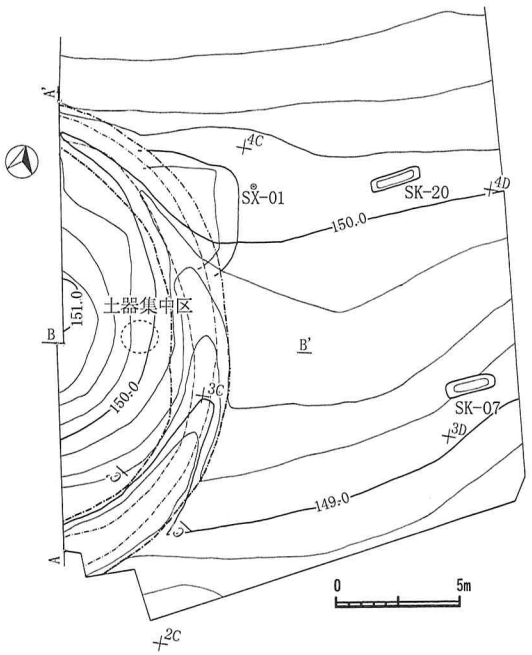
調査前は径 13 ｍ程の地ぶくれが見られ、現存の墳頂部との比高は南が約２ｍ、北が 0.6 ｍと山寄式の形態をとる。現存南北長は周溝内側の立ち上がり部分で約 16 ｍ、周溝を含めた同長が約 18 ｍ、本来は径 18 ｍ程の円墳と推定される。現墳頂と周溝底面との比高は南が約２ｍ、北が約 0.9 ｍ。周溝は幅２～ 2.4 ｍ、深さ 0.5 ～ 0.6 ｍで、埋積土は２～４層に分類される。

墳丘の封土は最も遺存状態の良好な部分で厚さ 0.75 ｍ、最下層はローム土主体の層でその上に暗褐色土、黒褐色土等を盛り上げているが樹木の根の影響と、裾部にも近い為かあまり明瞭でなかった。

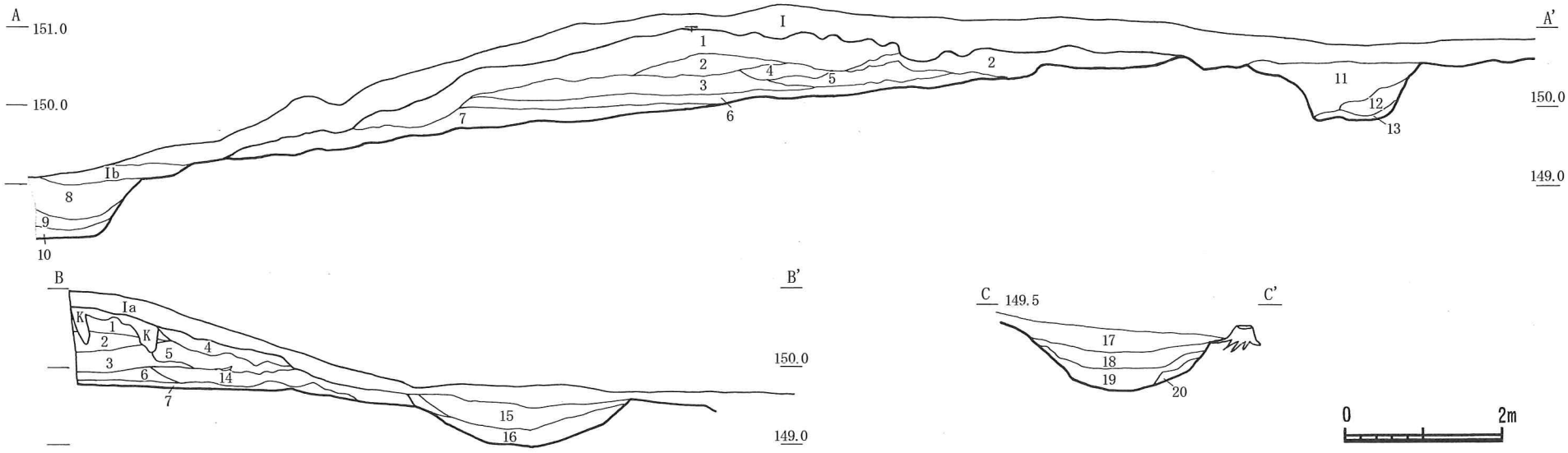
また、本墳は葺石や埴輪の樹立は無かったと判断される。



第７図　３号墳現況図



第８図　３号墳墳丘図



A-A', B-B', C-C'

Ia. 表土　褐灰色土(10YR4/1)
Ib. 表土　灰黄褐色土(10YR4/2)
1. 暗褐色土(10YR3/3), LR少量含む
2. 黒褐色土(10YR3/2), にぶい黄橙色土(10YR6/4)15%, LR5%, IP・SP(1～5mm)微量含む
3. 黒褐色土(10YR2/3), LR10%, にぶい黄褐色土(10YR5/4)15%含む
4. にぶい黄褐色土(10YR5/4), LR・LB小10%, IP・SP少量含む
5. 黒褐色土(10YR3/2), LR(1～5mm)微量含む, にぶい黄褐色土(10YR5/4)20%含む
6. 明黄褐色土(10YR6/6), LR・LB主体(1～120mm), 黒褐色土(10YR3/1)25%上・下に混じる
7. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR・LB(1～100mm)30%含む
8. 黒色土(10YR2/1), にぶい黄橙色土(10YR6/4)R・LB(1～100mm)25%含む
9. 黒色土(10YR2/3), LR15%, IP・SP(1～5mm)少量含む
10. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR15%, IP・SP(1～15mm)少量含む
11. 黒褐色土(10YR3/1), にぶい黄橙色土(10YR6/4)R・LB(1～40mm)25%, IP・SP(1～5mm)微量含む
12. 黒褐色土(10YR2/3), にぶい黄褐色土(10YR5/3)R・LB(1～30mm)15%, IP・SP少量含む
13. 灰黄褐色土(10YR5/2), にぶい黄褐色土(10YR5/3)R・LB(1～40mm)30%, IP・SP10%含む
14. 灰黄褐色土(10YR5/2), LR(1～3mm)20%, 黒色土(10YR2/1)R(1～10mm)10%含む
15. 黒褐色土(10YR3/1), 褐灰色土(10YR5/1)R・LB(1～30mm)25%含む
16. 灰黄褐色土(10YR5/2), にぶい黄褐色土(10YR5/3)R・LB(1～30mm)40%, LR・LB(1～30mm)5%含む
17. 黒褐色土(10YR2/3), LR(1～3mm)3%含む
18. 褐色土(10YR4/4), LR(1～3mm)5%, IP・SP(1～5mm)微量含む
19. 暗褐色土(10YR3/3), LR(1～3mm)7%, IP(1～15mm)微量含む
20. 褐色土(7.5YR4/6), IP・SP(1～3mm)微量含む

第９図　３号墳墳丘・周溝土層図

土器集中区（第10図、図版５）

なお、調査の進捗に伴い封土を除去したところ、墳丘東端部の封土最下層付近で、多量の土師器坏が集中する箇所を確認した。これらは一部の例外もあるが径約1.5ｍの範囲にまとまって出土しており、完形に近い個体が多いことから一括廃棄ではなく、一括して埋納されたと推察される。そこで、これらの土器群を取り上げた後、掘り込み等の施設の有無について精査したが、その存在は明確にし得なかった。封土の観察から、南に向かって緩やかに下降する旧地表面を平坦に整地した後の行為と推察され、石室（推定）などの完成に近い段階に行われた何らかの儀礼に使用された土器群が一括埋納されたと考えられる。一部に２～３個体が入子状に重なったものも見られたが、全体としては大まかに平らに並べられた上に封土が盛られたと考えられる。

埋葬主体部

前述の如く既に削平されていて、痕跡すら確認できなかった。調査中に現場を訪れた、生家が直ぐ近くという40代の女性は「自分が小学校高学年のころにこの古墳が削られたが、大谷石のような石が転がっていて、人骨のようなものもあった」との談であった。したがって、埋葬主体部は４・５号墳と同様に凝灰岩積みの横穴式石室であったと推定される。

出土遺物（第11～13図、図版21～23、第２・３表）

墳丘上及び周溝内より土師器坏、須恵器埦、壺、甕などが出土した。須恵器甕は墳丘上や周溝内の埋積土上位より出土し、いずれも同一個体と見られることから墳頂部に置かれたものが飛び散ったものと考えられる。

墳丘東端の封土の下位（土器集中区）より一括出土した土師器は、図示したものは59点であるが破片類を含めると計80個体程と推察される。口径10.6～13.6㎝、器高4.4～6.7㎝で、口辺が広がるもの、直立するもの、内湾するもの、底部が丸底風のもの、平底のものなど細部ではバリエーションが見られるものの、概して埦形で、須恵器模倣坏は含まれない。

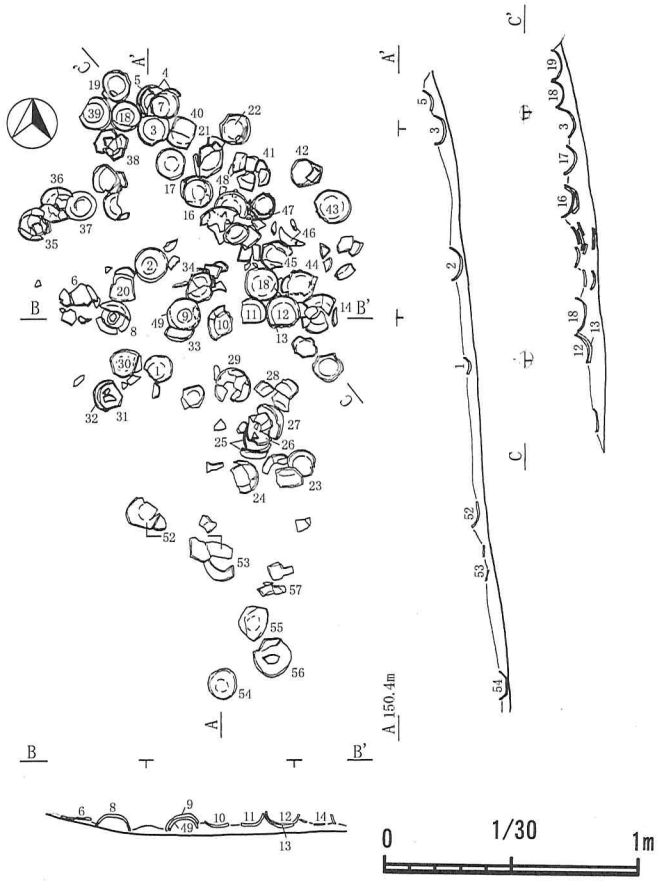
また、一部にミガキを施したものも認められるが一般集落跡から出土のものに比べてやや粗製に見え、外面に粘土紐の痕跡の目立つものが多い。単に焼成時の特徴によるものか判断し難いが色調が橙色のものが多い中に約20％程黒色のものが含まれる。これらは内面にミガキを施すものが多く、用途の違いを意図した可能性も否めない。

２．４号墳

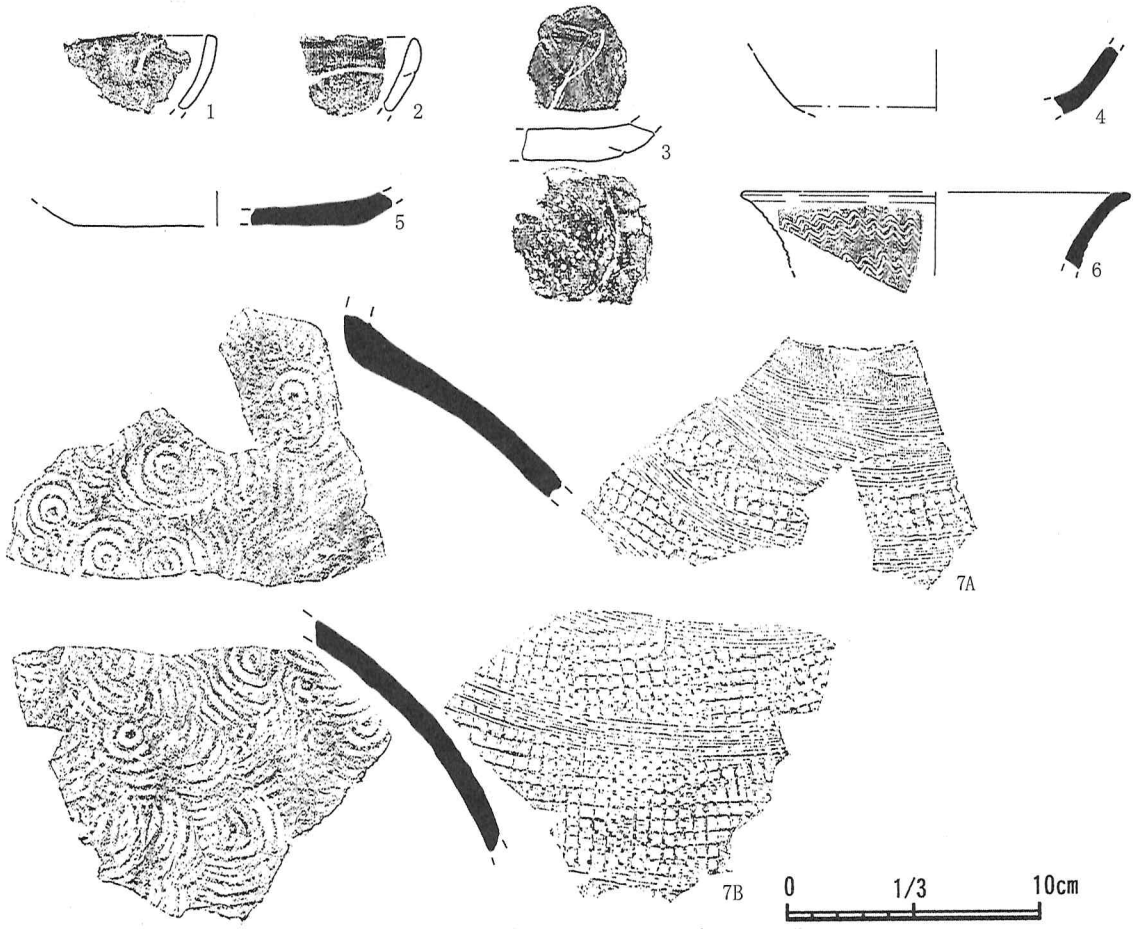
位置・外部施設（第14～17図、図版６・７）

調査区の中央やや西寄り、4～6B、4～6CGrに所在する。南約３ｍに３号墳、北約10.5ｍに５号墳が隣接し、東側に古墳は認められなかった。西側は既に宅地化され、墳丘の西寄り３分の１程は削平されていた。調査前は径16ｍ程の地ぶくれが認められ、現存墳頂部との比高は南が２ｍ、北が0.75ｍと山寄式の形態を取る。周溝内側の立ち上がり部分での径は約19ｍ、周溝を含めた径は約23ｍであった。現存墳頂部と周溝底面の比高は南が2.5ｍ、北は1.25ｍであった。周溝は幅2.5～３ｍ、深さは0.5～1.2ｍと所により差が大きい。北東部が比較的しっかりしており、大塚古墳との関係を意識したものか、単に地形を意識したものかは判然としない。埋積土は3～4層に分類されるが、埋没途中に抉り込みの壙穴が設けられた北東部は中程にローム土主体の層があり、複雑な堆積を示す。南西の墳丘上で、土師器高坏4点、坏3点がまとまって出土している。

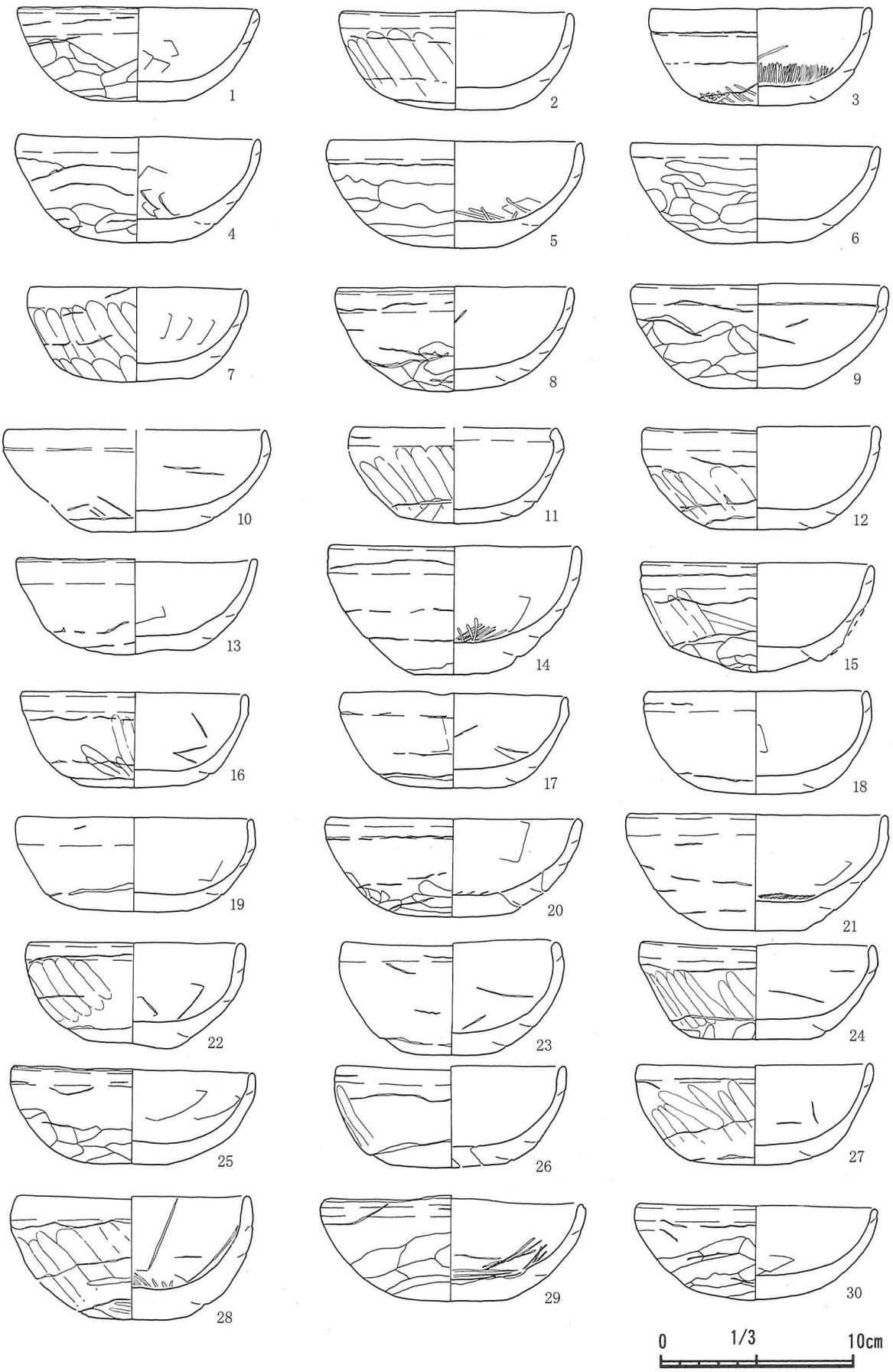
墳丘の封土は中央で厚さ約１ｍ、ローム土を多く含む土と暗褐色土・黒褐色土が細かく盛り上げられていた。本墳は葺石や埴輪の樹立は無かったと判断される。



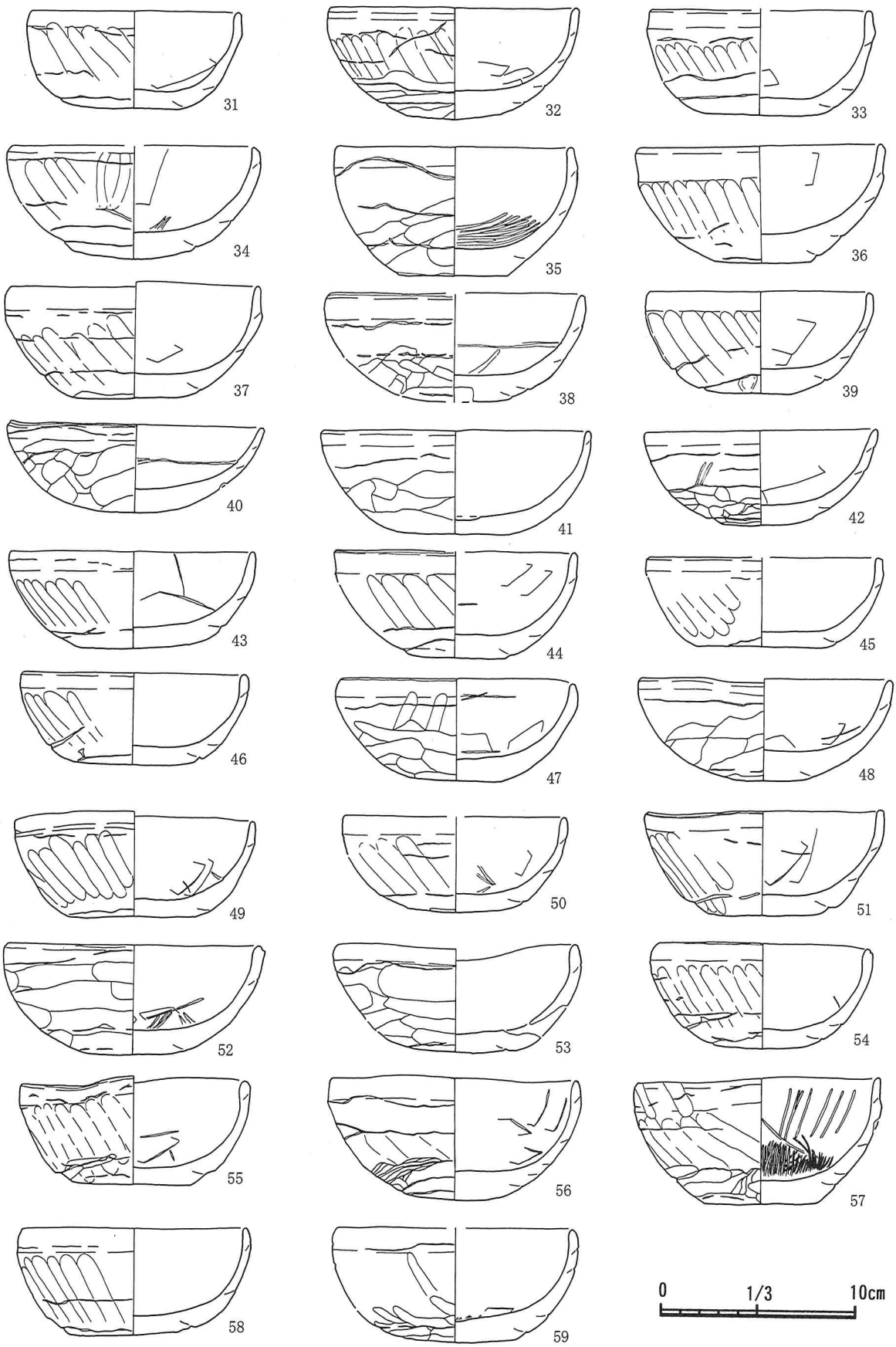
第10図　3号墳土器集中区土器出土状態



第11図　3号墳出土遺物（1）墳丘・周溝



第12図　3号墳出土遺物（2）土器集中区－1



第 13 図　３号墳出土遺物（３）土器集中区－２

第２表　３号墳出土遺物観察表

（　）推定値［　］現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
1	土師器 坏	口径　— 器高　— 底径　—	断片	紐づくり、内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 浅黄橙色	墳丘東表土
2	土師器 坏	口径　— 器高　— 底径　—	断片	紐づくり、内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	周溝東埋土
3	土師器 坏	口径　— 器高　— 底径　—	断片	紐づくり、底部外面削り、内面ナデ後ミガキ、内面黒色処理	胎土　白色粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 にぶい黄橙色・黒褐色	周溝東埋土 外面被熱
4	須恵器 埦？	口径　— 器高　— 底径　—	断片	ロクロ整形	胎土　微砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	南東表土
5	須恵器 鉢？	口径　— 器高　— 底径　(11.4)	断片	ロクロ整形、外面外周削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	南東表土
6	須恵器 壺	口径　(15.6) 器高　— 底径　—	断片	ロクロ整形、外面に１単位５条のクシによる波状文２段、内面灰被り	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰色	周溝北東埋土
7A・B	須恵器 甕	口径　— 器高　— 底径　—	大型破片	外面格子目叩き後カキ目、内面同心円文の当具痕	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 紫灰、外 灰青色	周溝北東埋土

第３表　３号墳土器集中区出土遺物観察表

（　）推定値［　］現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
1	土師器 坏	口径　12.4 器高　4.8 底径　5.0	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	封土中
2	土師器 坏	口径　12.0 器高　5.0 底径　6.0	完形	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 明黄褐色・浅黄橙色	封土中
3	土師器 坏	口径　11.5 器高　5.0 底径　5.8	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面ナデ、内面ナデ後ミガキ、底部外面削り後ミガキ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色・浅黄橙色	封土中
4	土師器 坏	口径　12.6 器高　5.5 底径　5.8	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒褐色・浅黄色	封土中
5	土師器 坏	口径　13.1 器高　5.5 底径　4.1	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ後ミガキ、底部外面削り	胎土　微砂粒混 焼成　良 色調　内 黒褐色、外 灰白色・黒褐色	封土中
6	土師器 坏	口径　12.8 器高　5.0 底径　3.9	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 褐灰色、外 灰白色	封土中
7	土師器 坏	口径　11.2 器高　4.9 底径　6.1	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 灰白色、外 灰白色・橙色	封土中
8	土師器 坏	口径　12.3 器高　5.4 底径　5.6	90%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面上半ナデ、下半削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	封土中
9	土師器 坏	口径　13.2 器高　5.4 底径　5.3	100%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	封土中
10	土師器 坏	口径　(13.4) 器高　5.3 底径　5.3	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒褐色・浅黄色	封土中
11	土師器 坏	口径　(10.6) 器高　5.0 底径　6.0	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒褐色、外 浅黄色	封土中
12	土師器 坏	口径　12.2 器高　5.3 底径　5.0	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 淡黄色	封土中
13	土師器 坏	口径　12.5 器高　4.9 底径　4.5	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄橙色	封土中
14	土師器 坏	口径　12.9 器高　4.7 底径　3.9	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面ナデ、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 灰白色、外 黒褐色・灰白色	封土中
15	土師器 坏	口径　12.1 器高　5.6 底径　7.8	90%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒褐色、外 浅黄色・褐灰色	封土中
16	土師器 坏	口径　11.6 器高　4.9 底径　5.8	100%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄色	封土中
17	土師器 坏	口径　11.6 器高　4.9 底径　6.5	95%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	封土中

第３表　３号墳土器集中区出土遺物観察表

（　）推定値［　］現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
18	土師器 坏	口径　11.4 器高　5.8 底径　6.2	90%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄色・灰白色	封土中
19	土師器 坏	口径　12.1 器高　4.9 底径　5.2	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 褐灰色、外 黒褐色・浅黄橙色	封土中
20	土師器 坏	口径　13.1 器高　5.1 底径　6.2	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ後一部ミガキ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色・黒褐色	封土中
21	土師器 坏	口径　13.6 器高　6.0 底径　5.4	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ後一部ミガキ、底部外面ナデ後一部ミガキ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	封土中
22	土師器 坏	口径　11.1 器高　5.2 底径　4.4	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	封土中
23	土師器 坏	口径　11.2 器高　5.8 底径　5.4	100%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	封土中
24	土師器 坏	口径　12.1 器高　5.0 底径　6.5	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 褐灰色・浅黄橙色、外 浅黄橙色	封土中
25	土師器 坏	口径　12.5 器高　4.9 底径　4.3	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄橙色	封土中
26	土師器 坏	口径　11.7 器高　5.2 底径　6.3	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒色	封土中
27	土師器 坏	口径　12.1 器高　5.1 底径　5.1	100%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 淡黄色	封土中
28	土師器 坏	口径　12.1 器高　6.3 底径　5.0	90%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面ナデ、下半削り後ミガキ、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色・灰白色、外 灰白色・褐灰色	封土中
29	土師器 坏	口径　13.4 器高　5.1 底径　5.6	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒褐色、外 灰白色・褐灰色	封土中
30	土師器 坏	口径　12.2 器高　4.9 底径　—	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 淡黄橙色	封土中
31	土師器 坏	口径　10.7 器高　5.0 底径　6.7	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 灰白色、外 灰白色・褐灰色	封土中
32	土師器 坏	口径　12.6 器高　5.7 底径　4.7	90%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	封土中
33	土師器 坏	口径　(11.4) 器高　5.3 底径　5.7	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内 褐灰白色、外 浅黄橙色・褐灰色	封土中
34	土師器 坏	口径　(12.4) 器高　5.8 底径　6.1	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面ナデ、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面削り	胎土　微砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 黒色・褐灰色	封土中
35	土師器 坏	口径　12.0 器高　6.7 底径　5.5	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 灰白色、外 黒色・灰白色	封土中
36	土師器 坏	口径　12.6 器高　5.9 底径　4.9	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	封土中
37	土師器 坏	口径　12.8 器高　5.8 底径　5.8	90%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄橙色	封土中
38	土師器 坏	口径　(13.0) 器高　5.5 底径　(5.7)	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	封土中
39	土師器 坏	口径　11.6 器高　5.2 底径　4.5	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄橙色	封土中
40	土師器 坏	口径　13.0 器高　4.5 底径　—	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 褐灰色、外　褐灰色・灰黄褐色	封土中
41	土師器 坏	口径　13.6 器高　5.3 底径　5.6	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 浅黄色	封土中
42	土師器 坏	口径　12.0 器高　4.9 底径　4.8	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色・褐灰色	封土中

第３表　３号墳土器集中区出土遺物観察表

（　）推定値［　］現存値

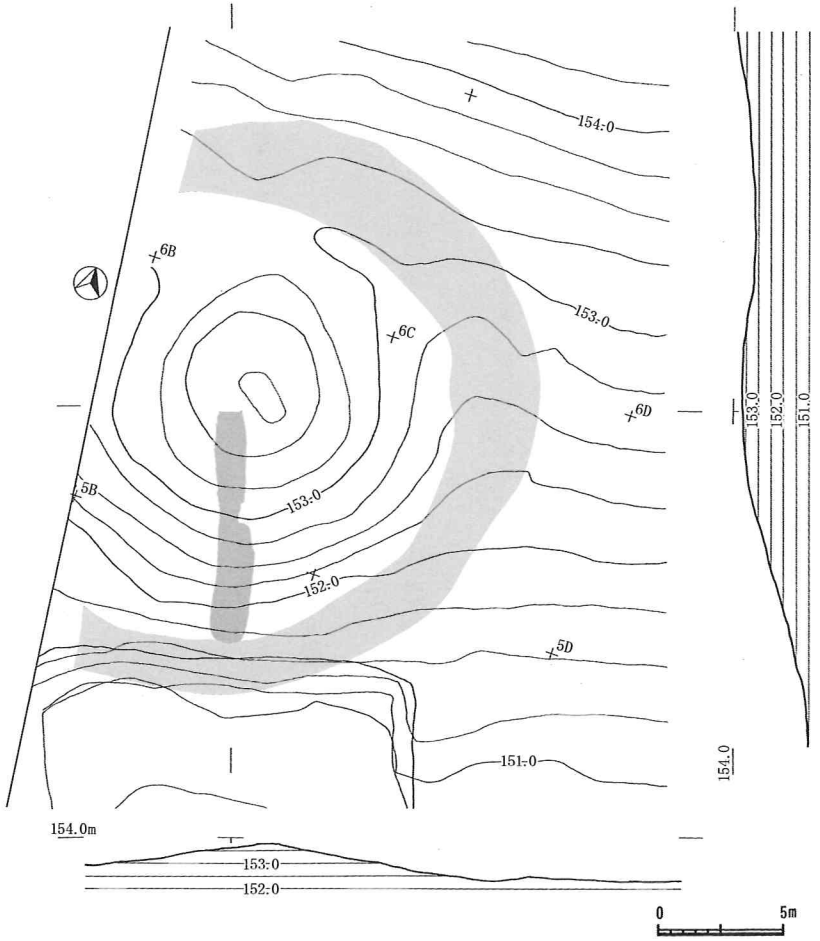
No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
43	土師器 坏	口径　12.5 器高　5.0 底径　5.7	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄橙色	封土中
44	土師器 坏	口径　12.2 器高　5.4 底径　5.0	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 褐灰色・黒褐色、外 褐灰色・灰白色	封土中
45	土師器 坏	口径　(12.0) 器高　(4.5) 底径　8.8	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 褐灰色・浅黄橙色	封土中
46	土師器 坏	口径　11.4 器高　4.7 底径　5.7	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 浅黄橙色	封土中
47	土師器 坏	口径　12.1 器高　5.2 底径　4.6	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄橙色	封土中
48	土師器 坏	口径　13.0 器高　5.2 底径　3.4	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒褐色、外 黒褐色・浅黄橙色	封土中
49	土師器 坏	口径　12.1 器高　4.9 底径　6.3	95%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄橙色	封土中
50	土師器 坏	口径　(11.3) 器高　(4.9) 底径　5.2	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒色	封土中
51	土師器 坏	口径　12.1 器高　5.3 底径　5.6	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄橙色	封土中
52	土師器 坏	口径　13.0 器高　5.6 底径　3.6	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄橙色	封土中
53	土師器 坏	口径　12.3 器高　5.5 底径　5.5	90%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 黒色・褐灰色	封土中
54	土師器 坏	口径　10.8 器高　5.4 底径　4.6	95%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒・粗砂粒混 焼成　やや良 色調　内外 にぶい黄橙色	封土中
55	土師器 坏	口径　11.5 器高　5.2 底径　6.0	95%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　微砂粒・砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色・浅黄橙色、外 浅黄橙色	封土中
56	土師器 坏	口径　12.6 器高　6.3 底径　4.9	100%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面ナデ後下半一部ミガキ、内面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	封土中
57	土師器 坏	口径　12.5 器高　6.4 底径　5.3	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面削り後一部ミガキ	胎土　微砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 黒色・灰白色	封土中
58	土師器 坏	口径　11.5 器高　5.4 底径　5.8	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄橙色	封土中一括
59	土師器 坏	口径　(12.2) 器高　5.9 底径　5.1	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面削り	胎土　微砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 黒色・浅黄橙色	封土中一括

また、石室の上部では純層に近いローム土が天井石を覆うように10㎝以下の厚さで数次にわたって盛られていた。石室の水漏れを防ぐ為か丁寧な作業を行っており、各層の間には水分によるものか薄い赤化した層が認められたことから水を用いて貼り付けて叩き締めた可能性が高い。

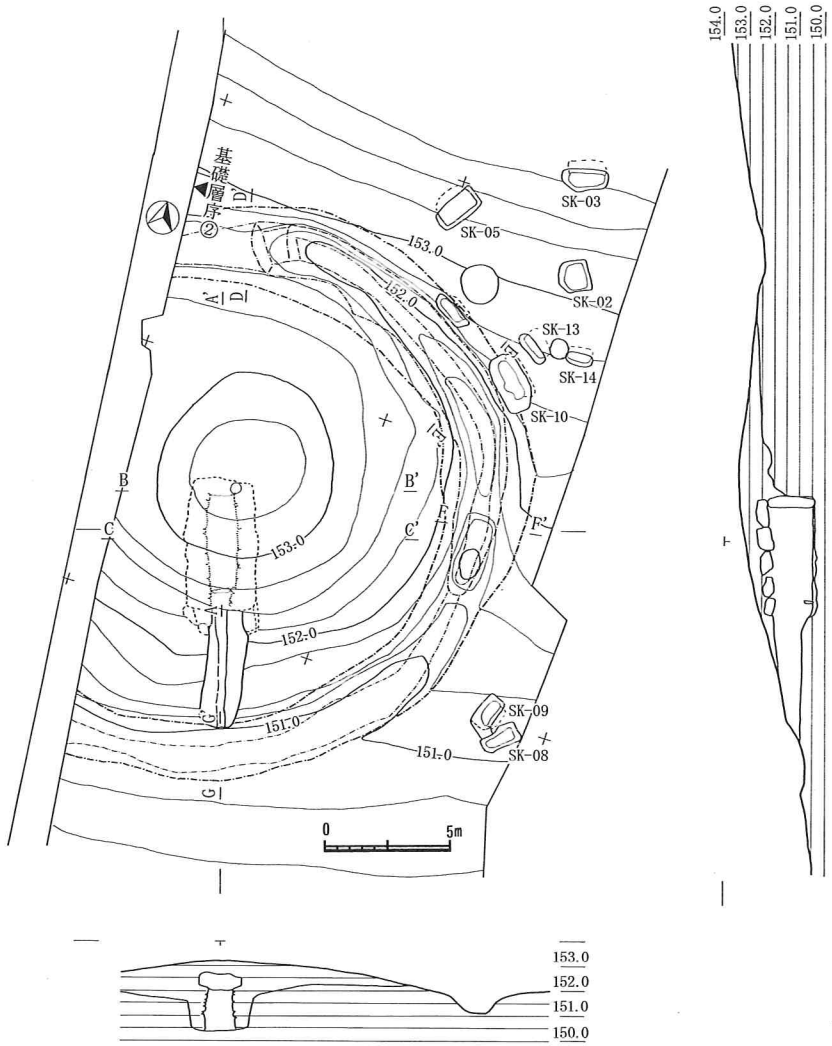
なお、本墳では封土を除去した結果旧地表面に掘り込まれた幅30～50㎝、深さ10～30㎝程の溝状の遺構を確認した。一見不規則な配置に見えるが、石室を囲むように認められた。また、封土の土層観察によれば、これらの一部は旧地表面に近い最下層の封土を切り込んで設けられているものもあることから、墳丘構築・封土盛り上げに関わる何らかの行為による所産と考えられる。

埋葬主体部（第18～20図、図版7～12）

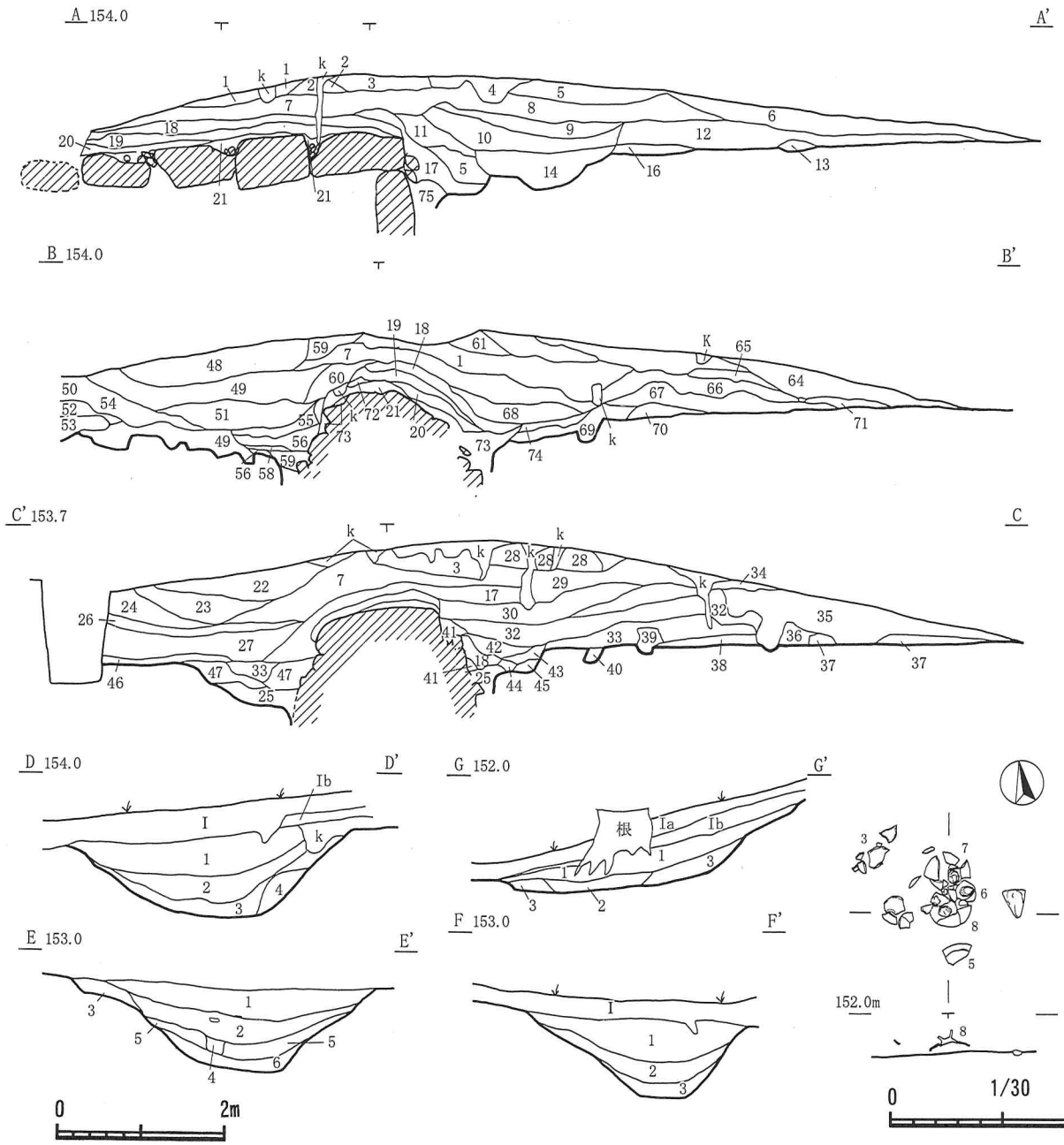
埋葬主体部は墳丘のほぼ中央から南に向けて開口する横穴式石室で主軸方位はN－18°－Wを示す。石室は旧地表面より掘り込まれた掘方内に築かれた半地下式である。



第 14 図　4 号墳現況図



第 15 図　4 号墳墳丘図



第16図　4号墳墳丘・周溝土層図

第17図　4号墳墳丘土器出土状態

A-A', B-B', C-C'

1. 暗褐色土(10YR3/4), LR・LB(1～80mm)20%, にぶい黄橙色土(10YR5/3)15%, IP・SP(1～10mm)微量含む
2. 暗褐色土(10YR3/4), LR・LB(1～30mm)25%, 褐色土(10YR4/4)R・LB(1～20mm)10%, IP・SP(1～3mm)微量含む
3. 褐色土(10YR4/4), LR・LB(1～50mm)30%, IP・SP(1～10mm)少量含む
4. 黒褐色土(10YR3/1), LR5%, IP・SP(1～5mm)微量含む
5. 黒褐色土(10YR3/2), LR・LB(1～100mm)10%, IP・SP(1～10mm)少量含む
6. 黒褐色土(10YR3/2), LR(1～3mm)5%, IP・SP(1～3mm)微量含む
7. 黒褐色土(10YR3/1), LR・LB(1～40mm)15%, IP(1～10mm)少量含む
8. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～150mm)35%, IP・SP(1～20mm)少量含む
9. 黒褐色土(10YR3/1), LR・LB(1～150mm)20%, IP・SP(1～15mm)微量含む
10. 暗褐色土(10YR3/3), LR・LB(1～150mm)40%, IP・SP少量含む
11. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR・LB(1～100mm)主体, 黒褐色土(10YR3/2)30%含む
12. 黒褐色土(10YR3/1), LR(1～8mm)3%, IP・SP(1～10mm)微量含む
13. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～30mm)30%含む
14. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR・LB(1～100mm)主体, 黒褐色土(10YR3/1)20%, IP・SP(1～5mm)微量含む
15. 暗褐色土(10YR3/4), LR・LB(1～40mm)35%, 黒色土(10YR3/1)15%含む
16. 明黄褐色土(10YR6/6), LR・LB(1～40mm)主体, 黒色土(10YR2/1)上・下に2～3mmの層をなす
17. 黄褐色土(10YR5/3), LR・LB(3～30mm)主体, 暗褐色土(10YR3/2)20%含む
18. 明黄褐色土(10YR6/6), にぶい黄橙色土(10YR7/3)R・LB(1～30mm)10%, 褐灰色土(10YR6/1)R・LB(10～50mm)10%含む
19. にぶい黄褐色土(10YR5/3), 明黄褐色土(10YR6/6)R・LB(1～30mm)15%含む
20. 明黄褐色土(10YR6/6), にぶい黄橙色土(10YR7/3)R・LB(1～30mm)20%含む
21. にぶい黄褐色土(10YR5/3), にぶい黄橙色土(10YR7/4)R・LB(1～40mm)20%含む
22. にぶい黄褐色土(10YR4/3), LR・LB(1～15mm)25%, IP・SPR・LB(1～15mm)少量含む
23. にぶい黄褐色土(10YR4/3), LR・LB(1～20mm)15%, IP・SPR(1～10mm)少量含む
24. にぶい黄褐色土(10YR4/3), LR・LB(1～15mm)20%, IP・SPR・LB(1～15mm)少量含む
25. 暗褐色土(10YR3/3), LR・LB(1～30mm)20%, 凝灰岩R(1～5mm)少量含む
26. 暗褐色土(10YR3/3), LR(1～3mm), IPR・LB(1～40mm), SPR(2～10mm), 凝灰岩R(1～10mm)微量含む
27. 暗褐色土(10YR3/3), 黒褐色土(10YR3/1)少量, LR(1～5mm), IPR・LB(1～40mm), SPR(2～10mm), 凝灰岩
28. 褐色土(10YR4/4), LR・LB(1～50mm)35%, 黒褐色土(10YR3/1), IP・SP(1～10mm), 凝灰岩R(1～5mm)少量含む
29. 暗褐色土(10YR3/3), LR・LB(1～30mm)少量, IP・SP(1～3mm), 凝灰岩R(1～5mm)微量含む
30. 暗褐色土(10YR3/3), LR(1～3mm), IPR・LB(1～50mm), SP(2～10mm), 凝灰岩R(3～10mm)少量含む
31. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～30mm)少量, IP・SPR(1～3mm), 凝灰岩R(1～5mm)微量含む
32. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～70mm)少量, IP・SP(1～5mm), 凝灰岩R(1～10mm)微量含む
33. 明黄褐色土(10YR6/8), ロームとKPの混合土(7:3), 凝灰岩R・LB(1～100mm)10%含む
34. 黒褐色土(10YR2/3), LR(1～3mm)少量含む

続く

掘方は、長さ5.1ｍ、幅2.5～2.6ｍの隅丸長方形で、深さ1.5ｍ。底面は鹿沼軽石層中にあり、壁はほぼ直立するが、上部はやや外反し、側壁部の壁面には壁材もしくは裏込めの石材を納める為の抉り込みが多数認められた。玄室、羨道とも一体の掘方内に築かれており、底面には根石を据えた痕跡が残る。

石室は全長4.35ｍ、玄室は長さ3.65ｍ、幅は奥が0.95ｍ、中央で1.25ｍ、玄門側が1ｍの僅かに胴張り形の両袖式であった。本墳の石室は試掘調査時の想定通り、閉塞部から天井石までほぼ完存するが、羨道西側壁の上部に盗掘坑が穿たれていた。奥壁は凝灰岩の1枚石で、長さ1.82ｍ、幅0.55～1ｍ、厚さ30～45㎝で、内面は平らに加工されていた。側壁は加工度の高い軟質の凝灰岩の割石（削石）積みで、僅かに河原石の使用が見られる。上部は直方体の石材を小口積みするが、中・下位は横置きにしたものもあり西壁の腰部に用いられた大型の石材の場合は平面を内側に向けて据え、裏込め材で安定させていた。これら大型の石材は加工度が低いが、他は石材の硬度の差によるものか、数種の加工痕跡が見られた。

A-A', B-B', C-C'　続き
35. 暗褐色土(10YR3/3), LR, 凝灰岩R(1～5mm)30%, IP(1～5mm)微量含む
36. 黒褐色土(10YR3/2), LR, 凝灰岩R(1～5mm)20%, IP(1～5mm)微量含む
37. 黒褐色土(10YR2/3), LR(1～3mm)少量含む
38. 黒褐色土(10YR2/3), LR(1～2mm)微量含む
39. 暗褐色土(10YR3/3), LR(1～5mm), 凝灰岩R(1～5mm)多量に含む
40. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～40mm), 凝灰岩R・LB(3～30mm)少量混入
41. 暗褐色土(10YR3/3), LR・LB(1～30mm)35%, IPR・LB(1～15mm), SP(3～7mm)少量含む
42. 暗褐色土(10YR3/3), 黒褐色土(10YR3/2), 凝灰岩R(3～10mm)少量, IPR・LB(1～40mm), SP(1～7mm)微量含む
43. 暗褐色土(10YR3/3), LR, 凝灰岩R(1～3mm)少量含む
44. 暗褐色土(10YR3/3), LR・LB(1～30mm), 凝灰岩R(1～3mm)少量含む
45. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～20mm), IP, 凝灰岩R(1～3mm)微量含む
46. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～30mm), IP, 凝灰岩R(1～10mm)少量含む
47. 暗褐色土(10YR3/3), LR(1～5mm), 凝灰岩R・LB(1～30mm)少量含む
48. 黒褐色土(10YR3/2), LR・LB(1～150mm)10%, IP・SP(3～10mm)少量含む
49. 黒褐色土(10YR3/2), LR5%, IP・SP(1～10mm)少量含む
50. 黒褐色土(10YR3/1), LR・LB(1～40mm)少量, 凝灰岩R(1～10mm)少量含む
51. 黒褐色土(10YR2/3), 灰黄褐色土(10YR4/1)15%, LR(1～8mm), IP・SP, 凝灰岩R(1～10mm)少量含む
52. 明黄褐色土(10YR6/7), ローム主体, 東寄りに黒褐色土(10YR3/2)25%含む
53. 黒褐色土(10YR3/1), IP・SP, 凝灰岩R(1～6mm)少量含む
54. 暗褐色土(10YR3/4), LR・LB(1～80mm)5%, KPB(3～150mm)5%, IP・SP, 凝灰岩R(1～5mm)微量含む
55. 黒色土(10YR2/1), LR・LB(1～40mm)8%含む
56. 明黄褐色土(10YR6/7), LR・LB(1～100mm)主体, 凝灰岩(5～50mm)53%, 暗褐色土(10YR3/4)10%, IP・SP(1～10mm)微量含む
57. 黒褐色土(10YR3/1), LR・LB(1～20mm)10%, 凝灰岩(1～20mm)微量含む
58. 暗褐色土(10YR3/5), LR15%, 灰黄褐色土(10YR4/2)15%含む
59. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR・LB(1～30mm)20%, IP・SP(1～10mm)少量含む
60. 黒褐色土(10YR3/2), 褐灰色土(10YR5/1)R・LB(1～40mm)20%, LR5%, IP・SP(1～10mm)少量含む
61. 褐灰色土(10YR4/2), LR8%, 黒褐色土(10YR3/3)R・LB(1～30mm)10%含む
62. 褐灰色土(10YR4/2), LR15%, 暗褐色土(10YR3/4)R・LB(1～30mm)10%, IP・SP(1～10mm)少量含む
63. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR8%, IP・SP(1～10mm)微量含む
64. 黒褐色土(10YR3/2), LR5%, IP・SP(1～5mm)微量含む
65. 黒褐色土(10YR3/1), LR(1～6mm)5%, 灰黄褐色土(10YR4/2)10%含む
66. 黒褐色土(10YR3/1), LR8%, 灰黄褐色土(10YR5/2)20%含む
67. 明黄褐色土(10YR7/6), LR・LB(1～200mm)主体, 暗褐色土(10YR3/3)20%, 黒褐色土(10YR3/2)10%, IP・SP(1～10mm)少量, 凝灰岩(1～10mm)少量含む
68. 黒褐色土(10YR3/2), 灰黄褐色土(10YR5/2)R・LB(5～30mm)20%, LR少量, IP・SP少量, 凝灰岩(1～20mm)微量含む
69. 褐灰色土(10YR4/1), LR・LB(1～30mm)10%, IP・SP(1～5mm)少量含む
70. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～20mm)5%, IP・SP(1～3mm)微量含む
71. 黒褐色土(10YR2/3), 灰黄褐色土(10YR5/2)R・LB(1～40mm)20%含む
72. 明黄褐色土(10YR6/8), 灰黄褐色土(10YR6/2)R・LB(5～20mm)20%含む
73. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR・LB(1～40mm)10%, 黒褐色土(10YR3/1)10%含む
74. 黒褐色土(10YR3/1), 上部にLR3～4cmの厚さで密に入る。凝灰岩(1～30mm)少量含む。28の延長か？
75. 黒褐色土(10YR3/2), LR15%, にぶい黄橙色土(10YR6/4)R・LB(10～30mm)20%含む(裏込め材)

D-D'
Ⅰ. 表土
Ⅰb. 整地土
1. 黒色土(10YR1/1), にぶい黄橙色土(10YR6/4)R・LB(10～50mm)20%, 岩片R(3～8mm), IP・SP(1～5mm)微量含む
2. 黒褐色土(10YR3/1), にぶい黄橙色土(10YR6/4)R・LB(5～20mm)10%, LR(1～5mm)少量, 岩片R, IP・SP(1～8mm)微量含む
3. 褐灰色土(10YR4/1), LR・LB(1～60mm)25%, IP・SP(1～8mm)微量含む
4. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR・LB(1～50mm)35%含む

E-E'
1. 黒色土(10YR1/1), にぶい黄橙色土(10YR6/4)R・LB(10～30mm)10%, 岩片R(3～15mm)微量含む
2. 褐灰色土(10YR5/1), LR・LB(1～30mm)20%, 灰黄褐色土(10YR5/2)15%, IP・SP(3～5mm)微量含む
3. 褐灰色土(10YR5/1), LR・LB(1～30mm)10%, 灰黄褐色土(10YR5/2)10%, IP・SP(2～5mm)微量含む
4. 褐灰色土(10YR5/1), LR20%含む
5. 黒褐色土(10YR3/1), LR・LB(1～20mm)5%, 岩片R(3～10mm), IP・SP(2～5mm)微量含む
6. 灰黄褐色土(10YR5/2), LR・LB(1～30mm)30%, 褐灰色土(10YR4/1)15%, KP微量含む

F-F'
Ⅰ. 灰黄褐色土(10YR4/2)　表土
1. 黒色土(10YR1/1), にぶい黄橙色土(10YR6/4)R・LB(1～110mm)30%, 岩片R(5～10mm), IP・SP(2～8mm)微量含む
2. 黒褐色土(10YR2/2), にぶい黄橙色土(10YR6/4)R・LB(10～30mm)8%, 岩片R(3～8mm), IP・SP(3～5mm)微量含む
3. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR・LB(1～80mm)35%, IP(3～10mm)少量, SP(1～3mm)微量含む

G-G'
Ⅰa. 現表土
Ⅰb. 整地土
1. 黒色土(10YR2/1), 灰黄褐色土(10YR5/2)R・LB(5～20mm)20%, IP・SP(1～3mm)微量含む
2. 黒褐色土(10YR2/3), 灰黄褐色土(10YR5/2)R・LB(5～40mm)30%, IP(1～10mm), SP(1～3mm)微量含む
3. 黒褐色土(10YR2/3), 灰黄褐色土(10YR4/2)R・LB(10～50mm)20%, IP・SP(1～10mm)少量含む

側壁の石材の積み方は掘方の壁面と石材の間隔による制約で異なると考えられる。

また、内面のみならず、６面全てもしくは４～５面加工されていることから、加工した後に積み上げたことが判る。

玄門部は柱状の石材を使用するが、長さ0.8～１mと短く、上部までは至らない。両門柱石の間隔は65～75㎝で、間には幅75㎝、高さ35㎝、厚さ10㎝の長方形の間仕切石（閾石）を据えていた。この石は非常に加工度が高く切石状であった。玄門の上部に楣石は設けられていなかった。

床面(埋葬面)は径４～15㎝の礫が敷詰められており、凝灰岩片も一定程度混じる。残存した礫の総数は１、221個、うち凝灰岩は331個で、河原石は890個のうち790個が径10㎝以下であった。調査着手時には盗掘坑より流入した土砂が0.7～0.9mの厚さで堆積し、流入土が人為的に移動された痕跡が見られたことから盗掘は数次にわたると推察された。

天井石は４石より成り、長さ1.5～1.7m、幅0.8～1.1m、厚さ40～60㎝で、石材と石材の接点や外面上部には明確な加工痕を残す。外面上部の高さをそろえてローム土による水漏れ防止の作業を容易にしたと考えられる。床面からの高さは1.6～1.75mであった。

羨道は長さ0.6m、幅1.07m、床面は墓道底面より約40㎝低い。側壁は加工度の高い凝灰岩の割石（削石）積みで、河原石が僅かに混じる。玄室に比べやや小振りの石材を用いる。

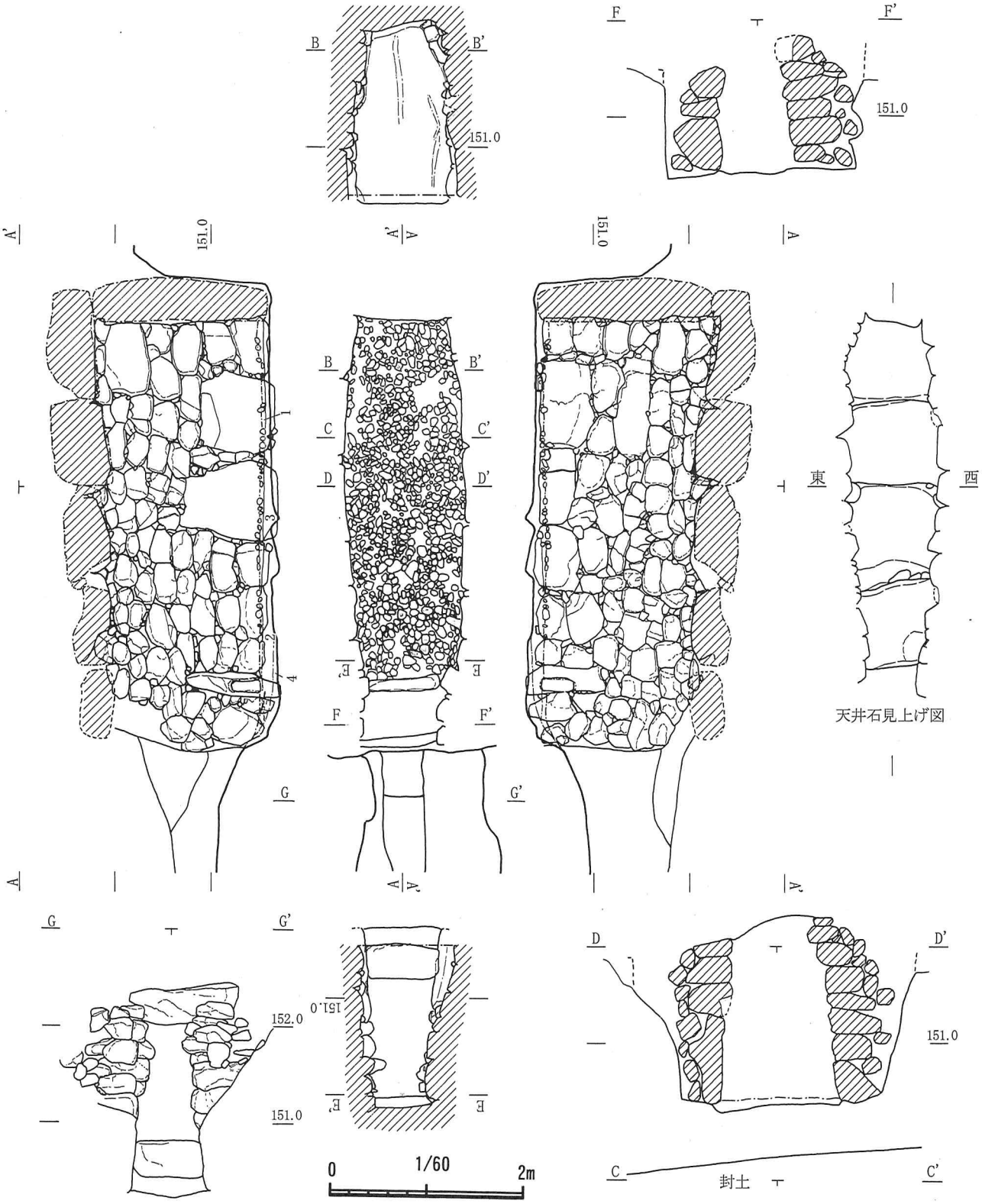
前述の如く西側壁は羨門寄りの上部が盗掘によって壊されていた。この為、天井石が１石遺存したものの、流入土と閉塞を除去した際に危険と判断された為除去した。石材は玄室と同様に板状では無く、長さ1.5m、幅0.6～0.75m、厚さ35㎝と細長いものであった。天井の高さは1.5m程である。

閉塞は数次の追葬によるものか、内・外の二重になっていた。外側は羨門部外で1.10×0.55m、厚さ40㎝程のやや丸みをもった凝灰岩を据えて、その周囲に人頭大の河原石を積み上げていた。内側の閉塞は羨道内で、河原石のみを積み上げていたが、上部は追葬時に除かれたものか２分の１程が失われていた。

本墳の石室は深い掘方内に築かれているが、斜面地の為南側は浅くなっており、長さ4.8m、幅1.5～1.6mの墓道が周溝南側に向って延びる。墓道の深さは北で1.4m、南は30㎝程であった。なお、追葬との関係で考慮しなければならないが、石室内からの副葬品は攪乱土中の耳環１点とガラス小玉３点に留まる（他２点は盗掘坑)。この他には、墓道西脇の周溝内１、墓道内２、墓道西上部１の計４の耳環、墓道東上部より刀子１点が出土している。これらは盗掘というよりも追葬時に外に出されたものと考えたい。

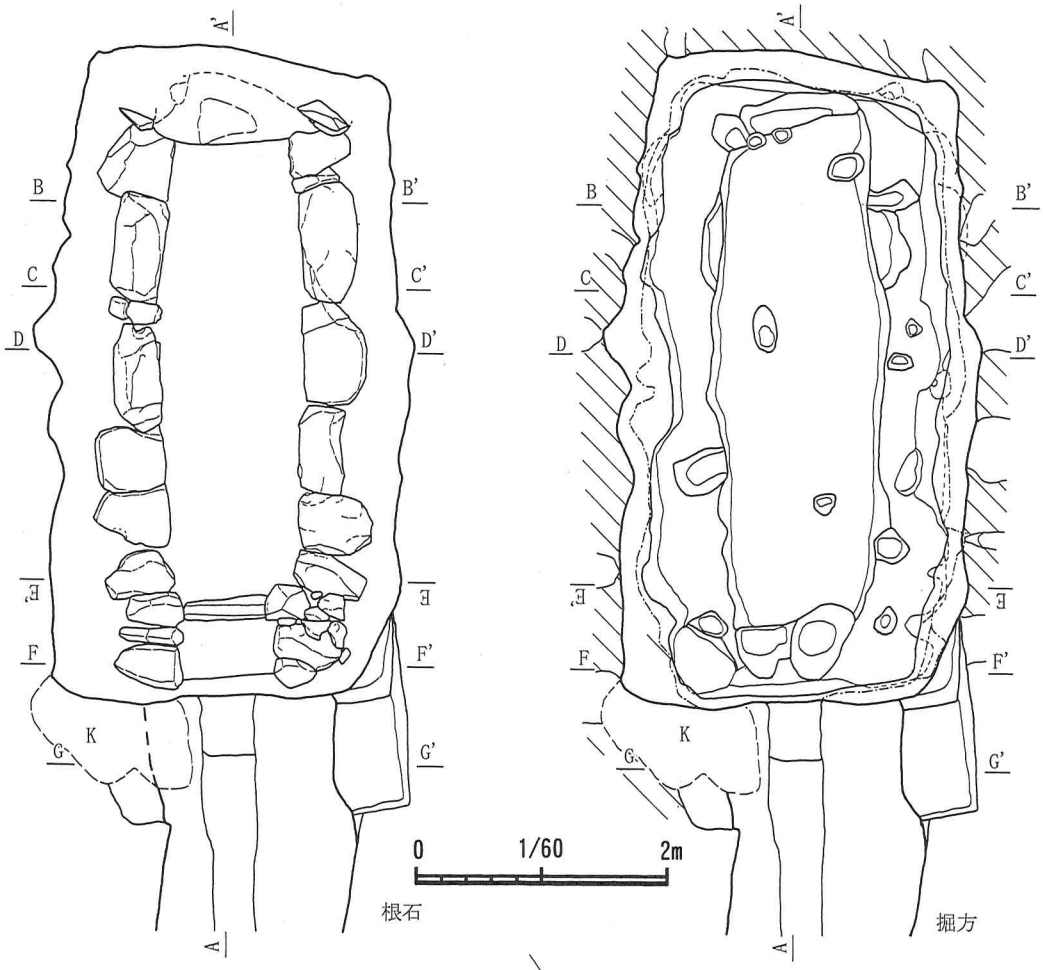
出土遺物（第21図、図版21、第４表）

出土遺物は、土器類（土師器坏・高坏)、装身具（耳環、ガラス小玉)、什器（刀子）などがある。土器類（２～８）は墳丘南西よりまとまって出土、刀子（９）は墓道東上部、ガラス小玉は石室と盗掘坑の攪乱土、耳環は15が周溝、16・17が墓道、18は石室攪乱土、19は墓道西上部より出土した。刀子は両端を欠失し現存長20.7㎝、刃関で刃部長は17.8㎝、幅は1.6～2.4㎝で研ぎ減りが目立つ。棟は平棟平造りで厚さ0.5～0.7㎝。柄は現存長3.1㎝、上部は丸みをもって細くなり、幅2.1～1.2㎝、厚さ２～４㎜で刃部に近い断面形で、現存重量127ｇ。耳環は遺存状態の差こそあれ、いずれも銅地銀貼で金鍍金を施す。外径は横が2.09～2.32㎝、縦は1.20～1.30㎝、断面は0.44～0.48×0.65～0.68㎝、重量は19が6.8ｇと最も軽く、16が6.9ｇ、18が7.6ｇ、15が7.9ｇで17が9.5ｇと最も重い。ガラス小玉はいずれも紺色で径3.5～3.9㎜、厚さ２～３㎜、孔径が0.9～1.8㎜、断面は扁平、丸みを帯びる。左右の厚みの異なるものなどまちまちである。

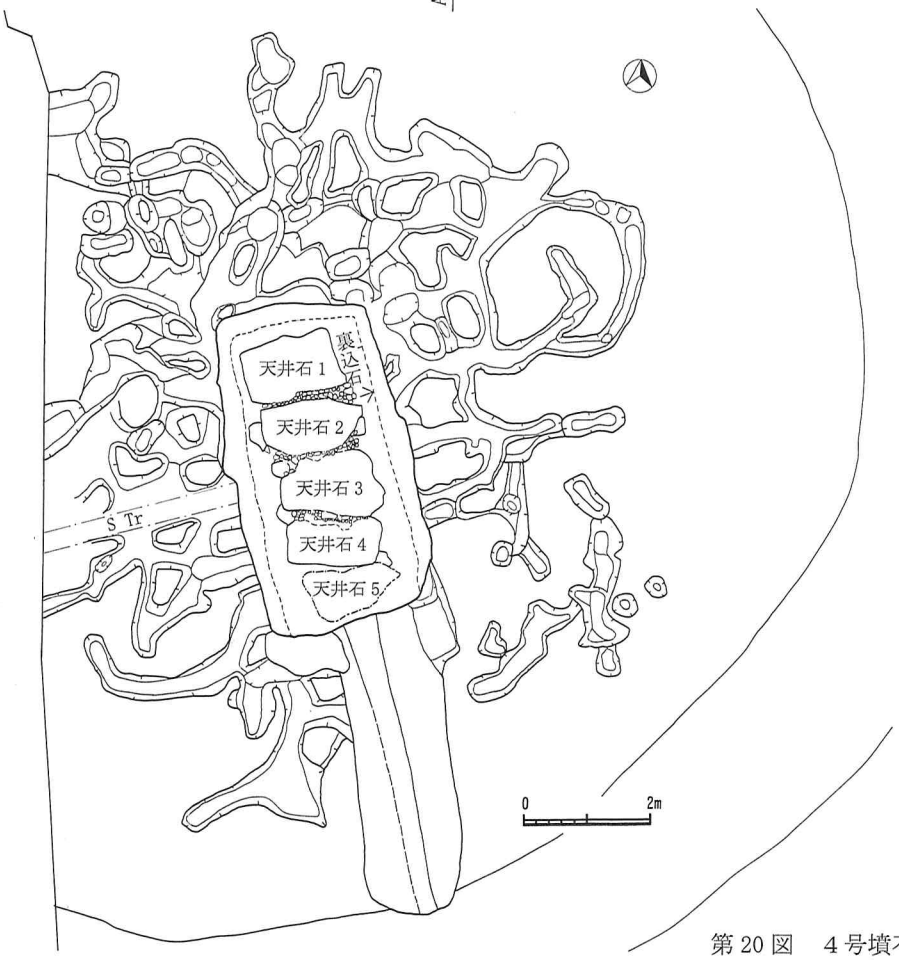


石室
1．暗褐色土(10YR3/3)，LR(1～5mm)5%，凝灰岩R・LB(1～40mm)10%含む
2．暗褐色土(10YR3/4)と黒褐色土(10YR2/2)の混合土(1:1)，LR，凝灰岩R・LB(1～50mm)25%，KP(2～5mm)微量含む
3．暗褐色土(10YR3/4)，KP(1～5mm)河原石(20～50mm)少量，凝灰岩R・LB(5～50mm)多量含む。整地層か？
4．黄褐色土(10YR5/8)，KP主体の層，灰白色(10YR8/2)R(2～4mm)少量含む

第18図　4号墳石室図（1）



第19図　4号墳石室図（2）



第20図　4号墳石室天井石と旧地表面の掘り込み

３．５号墳

位置・外部施設（第 22 ～ 26 図、図版 13）

調査区の北西部、A8 ～ 10、B7 ～ 10、C8 ～ 10Gr に所在する。南方約 10.5 ｍに４号墳、東方約３ｍに大塚古墳（１号墳）が隣接し、北方には古墳は認められなかった。西側は既に宅地化されていて、墳丘の西裾４分の１程は削平されていた。

現況では径 20 ｍ程の地ぶくれが見られ、現墳頂部との比高は北が 0.7 ｍ、南は 3.5 ｍと山寄式の形態を取る。周溝内側の立ち上がりでの径は約 27.5 ｍ、周溝を含めると約 30.3 ｍである。現存の墳頂部と周溝底面の比高は北が 1.5 ｍ、南が 4.25 ｍであった。周溝は幅 2.5 ～３ｍ、深さ 45 ～ 55 ㎝、埋積土は３層に分けられる。なお、SK-06 が所在した周溝北東部や SK-18 が所在する周溝東部は、他の部分とは幾分異なる堆積状況を示していた。

また、周溝南東部では底面直上より一括廃棄されたと思われる土師器坏が 30 個体程まとまって出土した。周溝の底面直上の出土であり古墳築造に伴う何らかの儀礼に関連する行為と推察される。

墳丘の封土は最も遺存状態の良好な部分で約 1.1 ｍ、外側は周溝の内側２～３ｍ付近で判然としなくなる。緩やかな斜面に立地することから、旧地表面をローム土主体の土で整地した後、ローム土主体の土と暗褐色土、黒褐色土主体の土を交互に積み上げている。封土除去後に旧地表面を精査したが、４号墳に見られたような掘り込み等は認められなかった。

また、南東部の旧地表面付近で炭化物の小片が所々に散見され、築造に伴う行為かと思われたが、位置的に限定されており疑問視していたところ、後世の掘り込みの存在が確認され、これに伴うものと判断した。

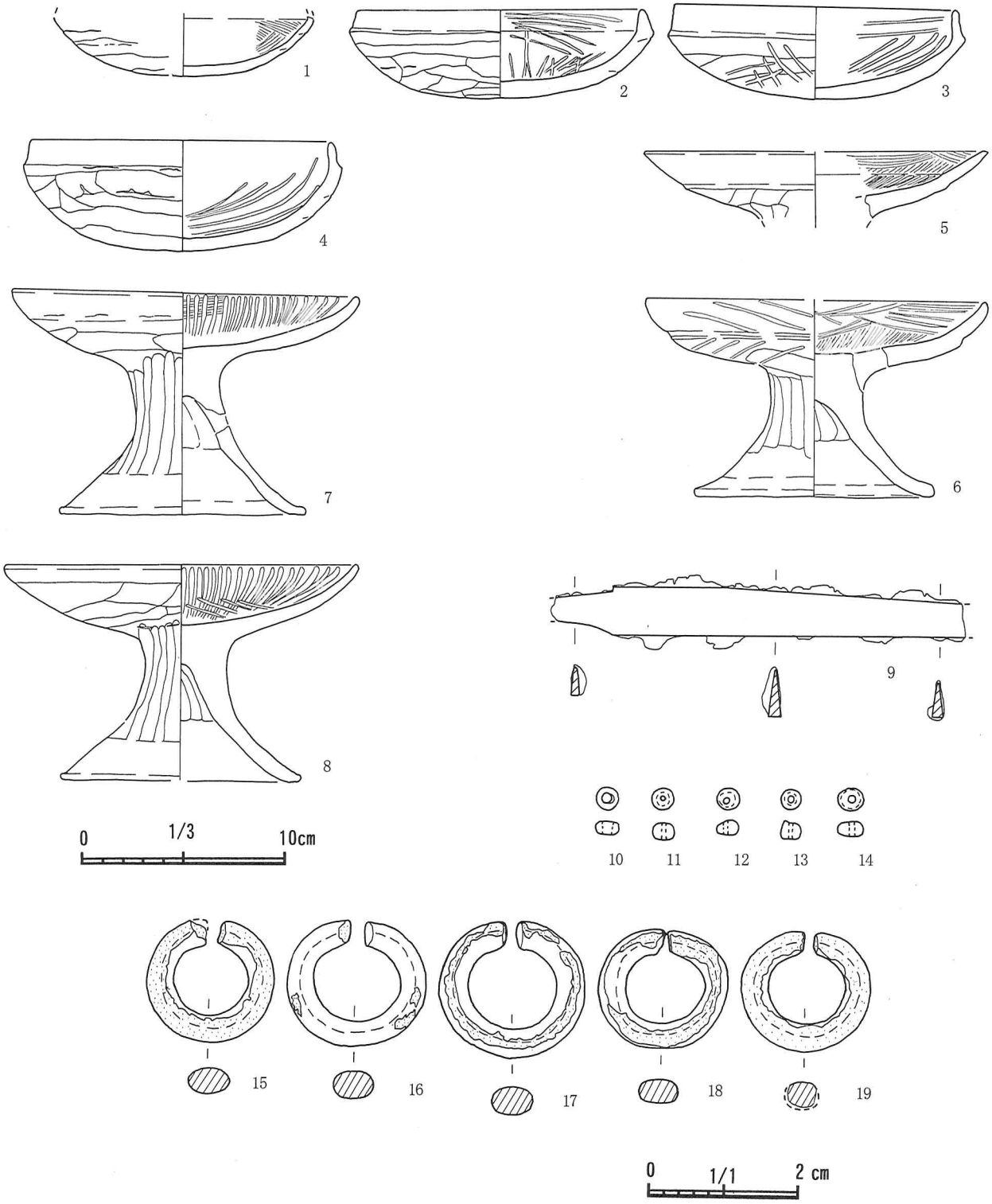
埋葬主体部（第 27・28 図、図版 13 ～ 16）

埋葬主体部は墳丘の中央より南に向けて開口する横穴式石室である。石室は旧地表面より掘り込まれた掘方内に築かれた半地下式である。

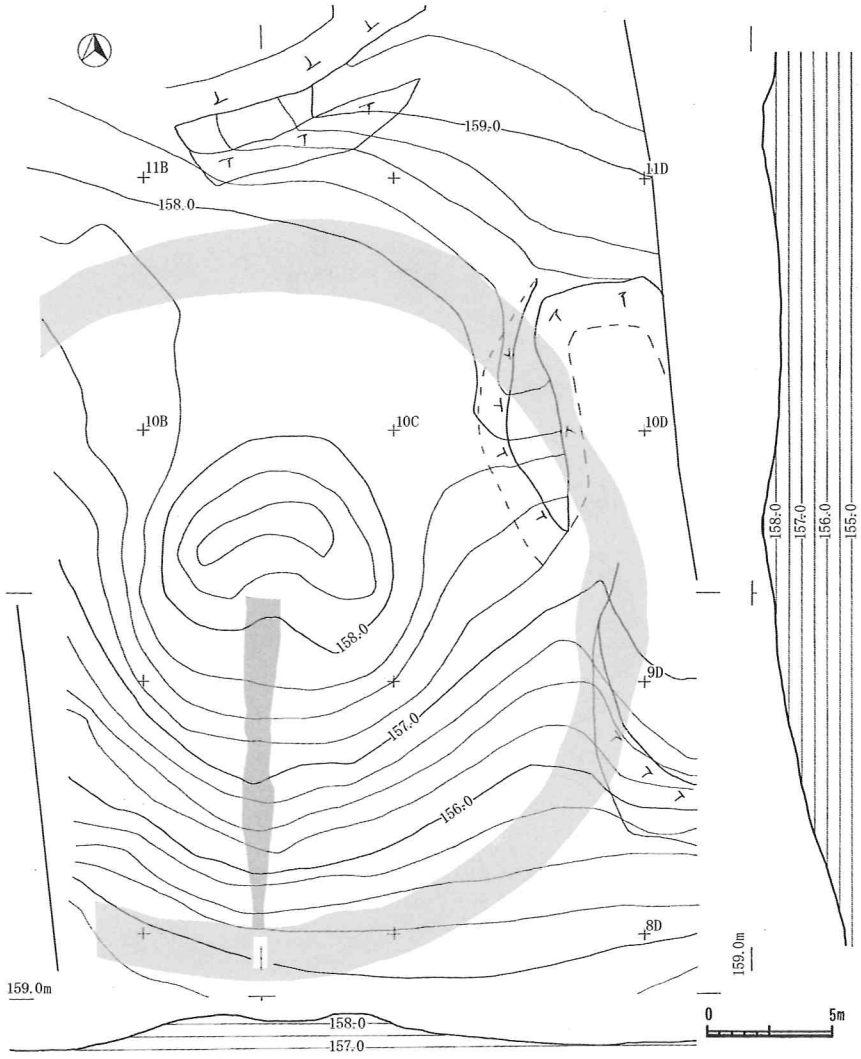
掘方は、長さ 5.34 ｍ、幅は奥が 2.7 ｍ、手前が 1.9 ｍの末広がりの長方形。確認面からの深さは１～ 1.5 ｍで斜面下方の南側が浅く、底面はローム層中にある。壁はほぼ直立し、側壁側の壁面には壁や裏込め材を納める為の抉り込みが随所に設けられていた。玄室・羨道とも一体の掘方内に築かれていた。底面には根石を据えた痕跡が残る。

石室は全長 5.65 ｍ、玄室は長さ 4.45 ｍ、幅は奥が 1.3 ｍ、中央で 1.4 ｍ、玄門側が 0.97 ｍで、手前がやや窄まる長方形で両袖式。中軸方位はＮ－3°-Ｅを示す。天井及び壁の上部は破壊され、石室内には石材や土砂、石宵が充満していた。なお、玄室の中央付近に天井石が１石遺存したが、左右（東西）の壁の高さが異なっており、原位置を離れていると判断された。一旦持ち上げた石が落下した為かこの部分の東側壁が危険な状態であり、天井石を除去して調査を進めた。

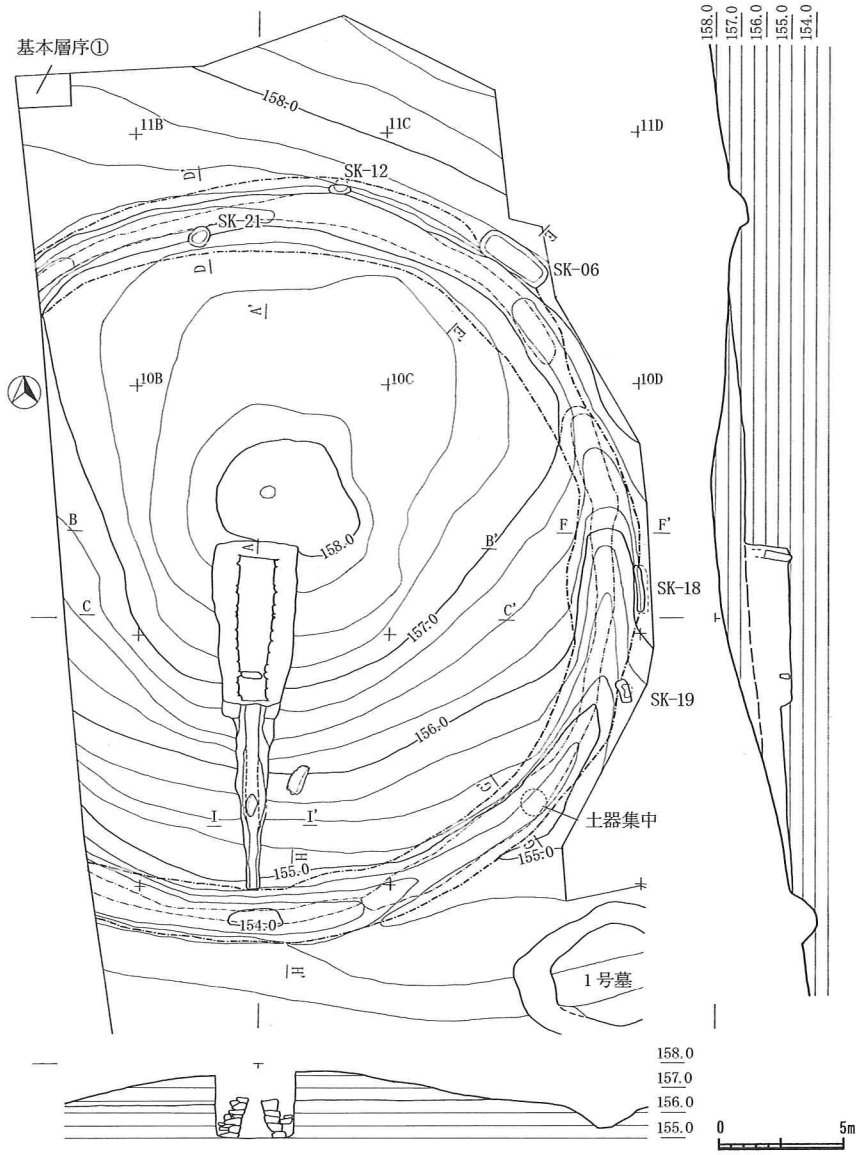
また、天井石は約 1.2 ｍ× 1.1 ｍの不整方形で、厚さ 20 ～ 30 ㎝の平たいものであった。奥壁も本来は一枚石だったと推察されるが、幅約 1.55 ｍで、高さが 1.2 ｍしか遺存せず、上部を割って持ち出されたものと推察される。残存部の上端中央にＶ字状の切り込みが見られることから、さらに分割して持ち出す予定を何らかの事情で断念したと考えられる。側壁は加工度の高い軟質の凝灰岩の割石（削石）を積み上げたもので、４号墳に比べ急な持ち送りである。おそらくは、天井石の長さに伴う制約によるものと推察される。壁材は硬度の違いか数種の加工痕が見られるものの、基本的には直方体を小口積みしており６面もしくは４～５面加工してあることから、加工後に積み上げたことが判る。裏込めは凝灰岩片と黄褐色土を主体とし、下位は掘方との間隙が狭い為石材はあまり使用していないが、持ち送りが進む中～上位は壁材を裏込めの石材で固定しながら積み上げてあった。しかし、調査時には細長の壁材が途中で折れているものが多く見受けられた。時



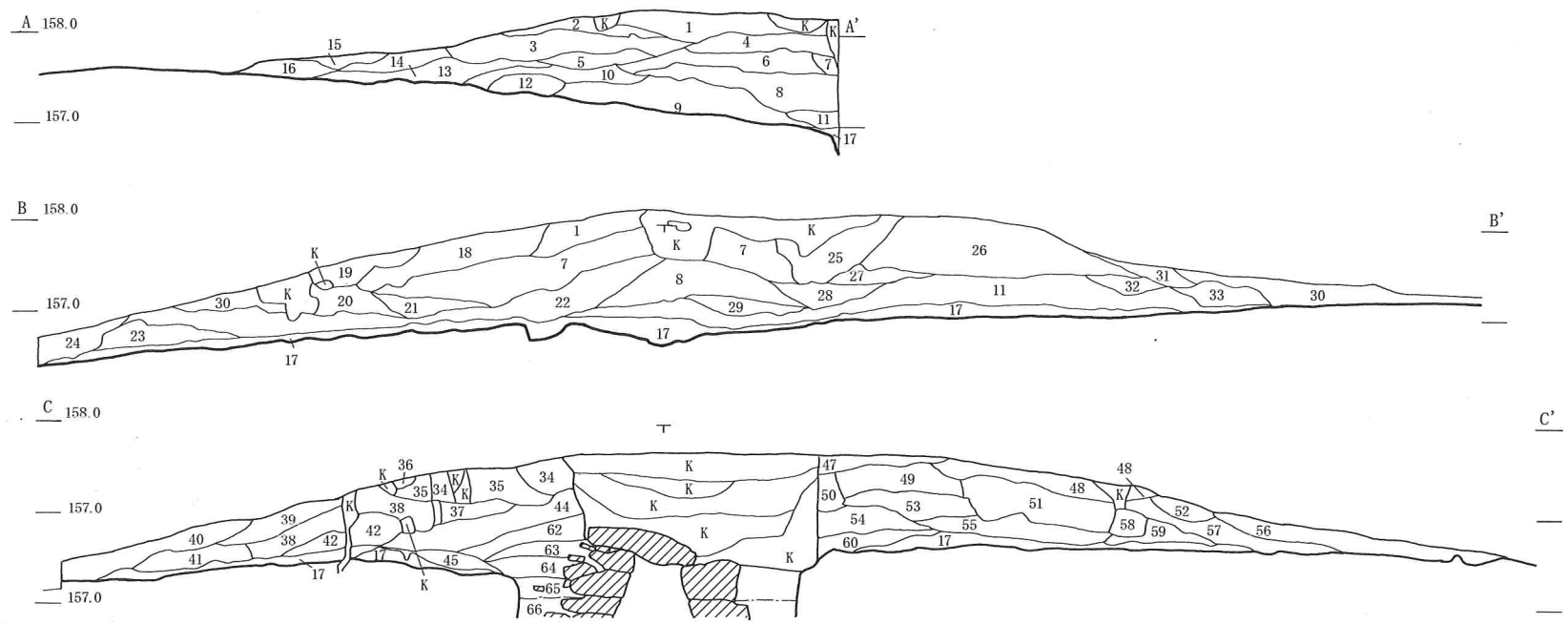
第21図　4号墳出土遺物



第 22 図　5 号墳現況図



第 23 図　5 号墳墳丘図



AA-A', B-B', C-C'

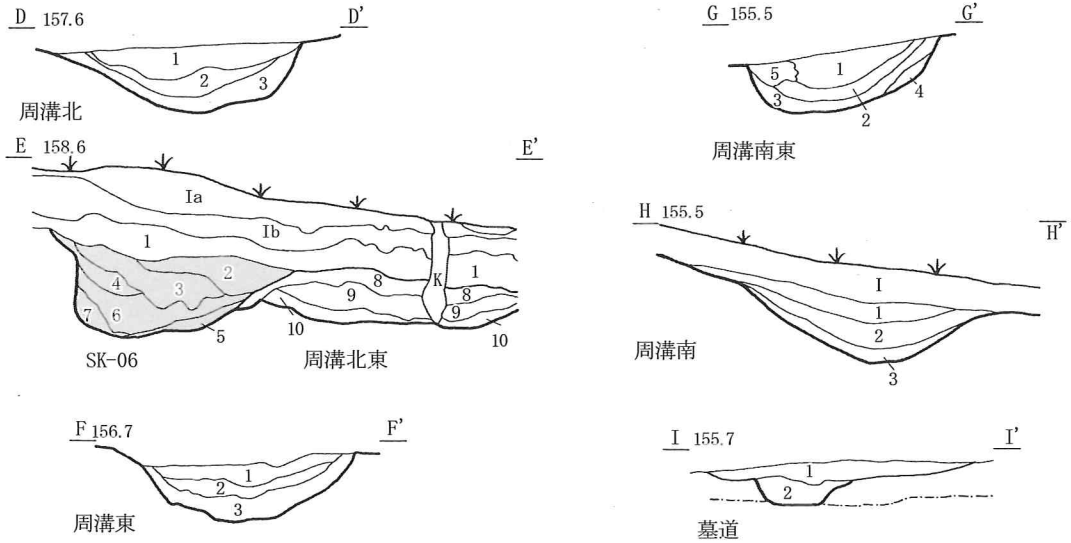
1. 黒褐色土(10YR3/1), LR・LB(1～100mm)15%, IP・SP, 岩片(1～10mm)少量含む
2. 黒褐色土(10YR3/1), LR少量, IP・SP(1～15mm)微量含む
3. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～80mm)30%, IP・SPを少量含む
4. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～120mm)40%, IP・SP, 岩片(1～10mm)微量含む
5. 黒褐色土(10YR3/2), LR(1～3mm)15%, IP・SP(1～2mm)微量含む
6. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～40mm)8%, IP・SP, 岩片(1～10mm)少量含む
7. 黒褐色土(10YR3/2), LR・LB(1～100mm)30%, IP・SP(1～10mm)微量含む
8. 黒褐色土(10YR2/2), LR・LB(1～40mm)25%, IP・SP(1～10mm)3%含む
9. 黒褐色土(10YR2/2), 褐灰色土(10YR4/1)30%, IP・SP(1～10mm)少量含む
10. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR10%, IP・SP(1～10mm)微量含む
11. 黒褐色土(10YR3/1), LR・LB(1～20mm)少量, IP・SPを微量含む
12. 黒褐色土(10YR3/1), にぶい黄褐色土(10YR5/4)R・LB(5～40mm)30%含む
13. 黒褐色土(10YR3/1), 褐灰色土(10YR5/2)20%, LR少量含む
14. 暗褐色土(10YR3/3), 黒褐色土(10YR3/1)15%, LR20%含む
15. 暗褐色土(10YR3/3), LR20%含む
16. 黒褐色土(10YR3/1), LR10%含む
17. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR・LB(1～50mm)30%, 凝灰岩(10～30mm)少量含む
18. 黒褐色土(10YR2/2), 灰黄褐色土(10YR4/2)R・LB(5～30mm)15%, LR少量含む
19. 黒褐色土(10YR3/2), LR・LB(1～80mm)10%, IP・SPを少量含む
20. 暗褐色土(10YR3/4), にぶい黄褐色土(10YR4/3)R・LB(1～30mm)30%, IP・SP(1～8mm)微量含む
21. 黒褐色土(10YR3/2), LR・LB(1～50mm)20%, IP・SP(1～10mm)微量含む
22. 灰黄褐色土(10YR4/2), 黒褐色土(10YR2/2)10%, IP・SP(1～5mm)微量含む
23. 黒褐色土(10YR2/2), にぶい黄褐色土(10YR4/3)R・LB(1～40mm)20%, IP・SP(1～8mm)微量含む
24. 灰黄褐色土(10YR5/2), 暗褐色土(10YR2/3)20%, LR20%, IP・SP(1～8mm)少量含む
25. にぶい黄褐色土(10YR5/4), LR・LB(1～120mm)主体, 黒褐色土(10YR3/1)10%含む
26. 黒褐色土(10YR3/2), LR・LB(1～140mm)40%, IP・SP(1～15mm)少量含む
27. 黒褐色土(10YR3/1), LR・LB(1～60mm)20%含む
28. 黒褐色土(10YR3/1), LR・LB(1～40mm)20%, IP・SP, 岩片(1～10mm)微量含む
29. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～100mm)30%, IP・SPを少量含む
30. 褐灰色土(10YR5/1), LR(1～15mm)20%含む
31. 褐灰色土(10YR4/1), LR10%含む
32. 黒褐色土(10YR3/1), LR・LB(1～120mm)15%, IP・SP(1～8mm)微量含む
33. 褐灰色土(10YR5/1), LR・LB(1～30mm)30%含む
34. 黒褐色土(10YR3/2), LR15%含む
35. 明黄褐色土(10YR6/8), LR・LB(1～80mm)主体, 暗褐色土(10YR3/4)25%含む
36. 暗褐色土(10YR3/4), LR(1～3mm)10%含む
37. 黒褐色土(10YR2/3), LR(1～8mm)5%含む
38. 黒褐色土(10YR3/1), LR・LB(1～30mm)3%, IP・SP(1～5mm)3%含む
39. 黒褐色土(10YR2/3), にぶい黄褐色土(10YR7/4)R・LB(5～100mm)20%, SP(3～20mm)少量含む
40. 黒褐色土(10YR3/2), LR(1～5mm)5%含む
41. 黒褐色土(10YR3/1), LR(1～5mm)少量, IP・SP(1～3mm)微量含む
42. 褐灰色土(10YR4/1), LR(1～3mm)微量, 灰黄褐色土(10YR4/2)R・LB(3～40mm)20%含む
43. 黒褐色土(10YR3/2), LR・LB(1～40mm)20%, IP・SP(1～15mm)3%, 凝灰岩(1～20mm)微量含む
44. にぶい黄褐色土(10YR5/4), LR・LB(1～100mm)30%, 黒褐色土(10YR2/3)10%, IP・SP(1～10mm)少量含む
45. 明黄褐色土(10YR5/6), ローム主体, 暗褐色土(10YR3/4)5%, IP・SP(1～20mm)少量, 上層との境に凝灰岩R・LB(1～60mm)少量含む
46. 黒褐色土(10YR3/2), LR(1～8mm)少量, IP・SP(1～8mm)微量含む
47. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR30%, IP・SP(1～15mm)少量含む
48. 暗褐色土(10YR3/3), LR10%, IP・SP(1～10mm)微量含む
49. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～30mm)5%, IP・SP(1～30mm)微量含む
50. 黒褐色土(10YR2/3), LR・LB(1～30mm)15%, IP・SP(1～10mm)微量含む
51. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR・LB(1～80mm)40%, IP・SP(1～10mm)少量含む
52. 黒褐色土(10YR2/3), LR(1～3mm)少量含む
53. 黒褐色土(10YR3/1), 褐灰色土(10YR4/1)R・LB(1～80mm)30%, IP・SP(1～3mm)微量含む
54. 黄褐色土(10YR5/6), LR・LB(1～150mm)主体, 褐灰色土(10YR5/1)30%含む
55. 黒褐色土(10YR3/2), 灰黄褐色土(10YR4/2)10%, LR・LB(1～30mm)5%, IP・SP(1～3mm)微量含む
56. 黒褐色土(10YR2/3), にぶい黄褐色土(10YR5/3)R・LB(10～80mm)15%含む

続く

第24図　5号墳墳丘土層図

AA-A', B-B', C-C'　続き

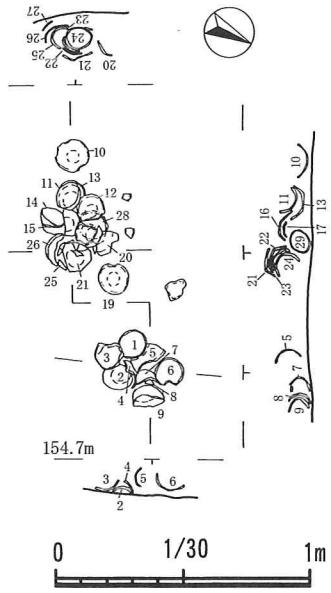
57. 暗褐色土(10YR3/3), LR25%, 白色R(1～8mm)少量含む
58. 黒褐色土(10YR3/2), 灰黄褐色土(10YR4/2)30%, 白色R(1～3mm)少量含む
59. 黒褐色土(10YR3/1), LR15%含む
60. 黄褐色土(10YR5/6), LR・LB(1～150mm)主体, 暗褐色土(10YR3/4)20%含む
61. 黒褐色土(10YR3/1), LR・LB(1～40mm)20%, 灰黄褐色土(10YR4/1)15%含む
62. 黒褐色土(10YR3/2), 灰黄褐色土(10YR5/2)30%, LR・LB(1～150mm)15%含む
63. 灰白色粘質土(10YR8/2), 黒褐色土(10YR3/2)8%, LR・LB(1～30mm)10%含む
64. にぶい黄褐色土(10YR7/3), 黒褐色土(10YR3/2)8%, LR・LB(1～30mm)15%, 凝灰岩R・LB(1～20mm)5%含む
65. 明黄褐色土(10YR6/6), ローム主体, 褐色土(10YR5/8)R・LB(1～30mm)20%含む
66. 黄褐色土(10YR5/8), ローム主体, 明黄褐色土(10YR6/6)R・LB(1～20mm)15%含む
67. にぶい黄橙色土(10YR5/4), ローム主体, 明黄褐色土(10YR6/6)R・LB(1～20mm)15%, 褐色土(10YR5/8)R・LB(1～30mm)8%含む
68. 明黄褐色土(10YR6/6), ローム主体, にぶい黄橙色土(10YR5/4)R・LB(1～30mm)20%含む
69. にぶい黄橙色土(10YR5/4), ローム主体, 褐色土(10YR5/8)R・LB(1～20mm)15%, 明黄褐色土(10YR6/6)R・LB(1～30mm)5%含む
70. 黄褐色土(10YR5/8), ローム主体, 褐色土(10YR4/4)R・LB(1～30mm)15%含む



第 25 図　5 号墳周溝土層図

D-D'
1. 黒色土(10YR2/1), にぶい黄橙色土(10YR6/3)R・LB(10～100mm)15%, IP・SP少量含む
2. 黒褐色土(10YR3/1), LR・LB(1～25mm)15%, IP・SP少量含む
3. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR・LB(1～60mm)20%含む

E-E'
Ia. 褐灰色土(10YR4/1)　表土層
Ib. にぶい黄橙色土(10YR5/4), 灰黄褐色土(10YR4/2) 20%含む。墳丘削平時の土砂か
1. 黒色土(10YR2/1), にぶい黄橙色土(10YR6/3)20%含む
2. 黒褐色土(10YR3/1), にぶい黄橙色土(10YR6/3)10%, IP少量, SP微量含む
3. 黒色土(10YR2/1), にぶい黄橙色土(10YR6/3)15%, IP・SPR・LB(1～20mm), LR少量含む



第 26 図　5 号墳周溝南東部土器出土状態

4. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR・LB(1～20mm)30%, IP・SP(1～10mm)微量含む
5. にぶい黄褐色土(10YR5/4)ローム主体, 黒褐色土(10YR3/1)10%, IPR・LB(1～30mm)少量, SP(1～10mm)微量含む
6. 灰黄褐色土(10YR4/2), 褐灰色土(10YR4/1)20%, LR・LB(1～40mm)20%, IPR・LB(1～20mm)少量, SP(1～10mm)微量含む
7. 黄褐色土(10YR5/6), LR・LB(1～80mm)主体の層, 褐灰色土(10YR4/1)15%含む。壁の崩れか？
8. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR・LB(1～30mm)20%, 褐灰色土(10YR4/1)15%含む
9. 黒褐色土(10YR3/1), LR少量, IP・SP(1～10mm)微量含む
10. 褐灰色土(10YR4/1), LR・LB(1～50mm)20%, 灰黄褐色土(10YR4/2)15%含む

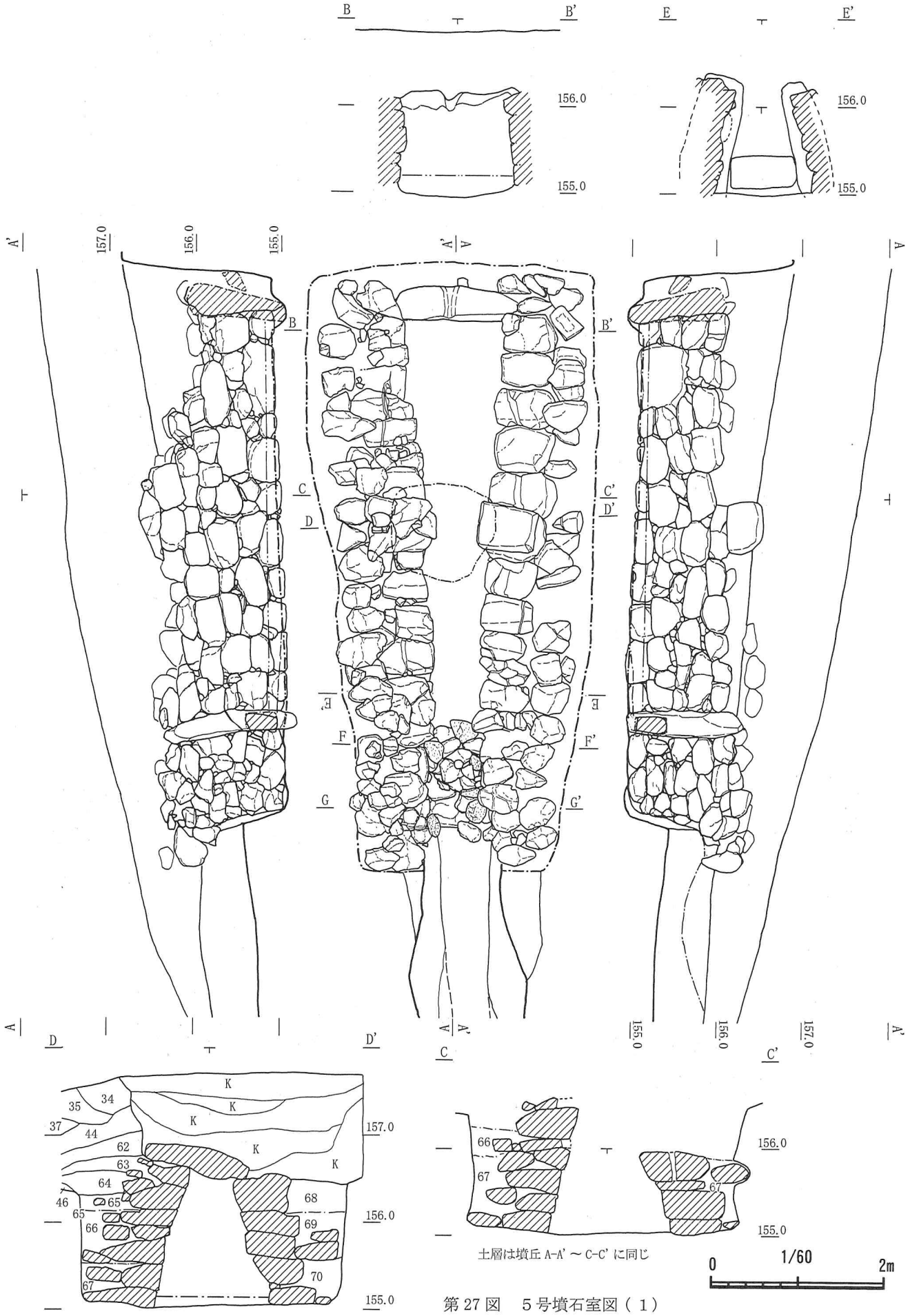
2～7はSK-06埋土, 8は整地土

F-F'
1. 黒褐色土(10YR3/1), にぶい黄橙色土(10YR6/4)R・LB(5～30mm)30%, IP・SP(3～8mm)微量含む
2. 黒褐色土(10YR3/1), にぶい黄橙色土(10YR6/4)R・LB(5～40mm)20%, LR, IP・SP(1～5mm)微量含む
3. 黒褐色土(10YR3/2), LR・LB(1～40mm)25%, IP・SP(2～5mm)少量含む

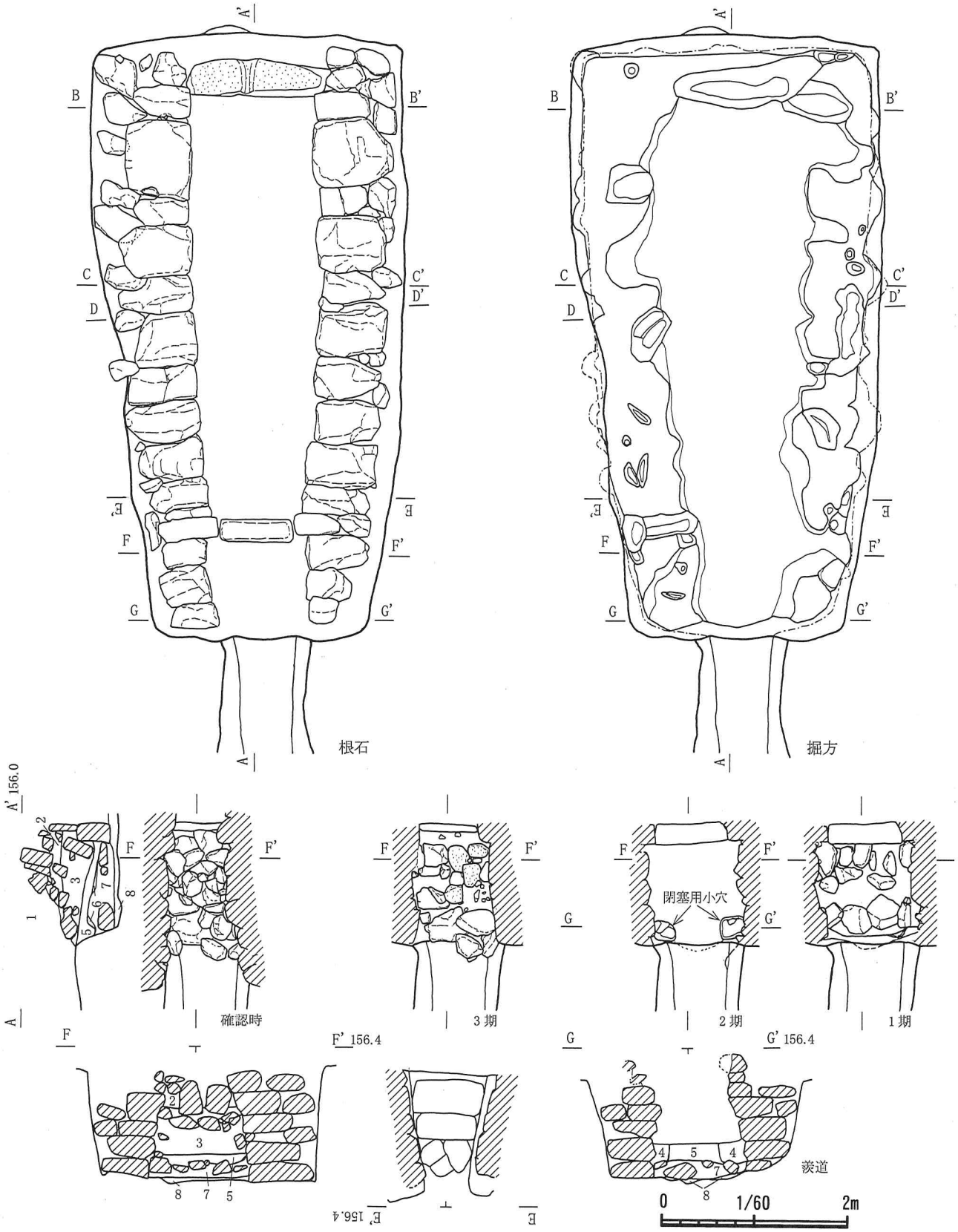
G-G'
1. 黒色土(10YR1/1), にぶい黄褐色土(10YR5/4)R・LB(5～50mm)20%含む
2. 黒褐色土(10YR3/1), にぶい黄褐色土(10YR5/4)R・LB(5～20mm)15%, LR(1～6mm)少量含む
3. 褐灰色土(10YR4/1), LR(1～5mm)少量含む
4. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR・LB(1～50mm)25%含む
5. 黒褐色土(10YR3/1), にぶい黄褐色土(10YR5/4)R・LB(1～30mm)40%含む

H-H'
I. 表土
1. 黒色土(10YR1/1), 褐灰色土(10YR5/1)20%, LR(1～5mm), IP(1～2mm)微量含む
2. 黒色土(10YR2/1), にぶい黄褐色土(10YR5/4)20%, LR(1～5mm)5%, 岩片R(3～10mm)少量, IP(1～5mm)微量含む
3. 褐灰色土(10YR4/1), 黒褐色土(10YR2/2)15%, LR・LB(1～60mm)20%含む

I-I'
1. 褐灰色土(10YR4/1), にぶい黄褐色土(10YR4/3)少量, IP・SP(1～5mm)微量含む
2. 黒褐色土(10YR3/1), 灰黄褐色土(10YR4/2)R・LB(1～30mm)20%, 凝灰岩R(1～10mm)少量含む



第 27 図　5 号墳石室図（1）



石室

1．暗褐色土(10YR3/3)，LR・IP(1～2mm)微量含む
2．暗褐色土(10YR3/4)とロームの混合土，凝灰岩R・LB(1～40mm)少量含む
3．暗褐色土(10YR3/4)とロームの混合土，凝灰岩R・LB(1～60mm)少量含む
4．暗褐色土(10YR3/4)，LR(1～2mm)微量，IP・SP(1～10mm)，凝灰岩R・LB(1～30mm)20%含む
5．暗褐色土(10YR3/3)，凝灰岩R・LB(1～50mm)1:1混合土
6．灰白色粘質土(10YR8/2)
7．凝灰岩R・LB(1～50mm)に暗褐色土(10YR3/3)25%含む
8．凝灰岩R・LB(1～30mm)が主体

第28図　5号墳石室図（2）

間の経過によるものか、石材盗掘の影響に伴うものかは判然としないが、石材による裏込めではなく、黄褐色土（ローム土）の粘性によってかろうじて崩壊を免れていた。

床面（埋葬面）と判断したのは、掘方の底面より15㎝程の厚さで認められた黄褐色土と凝灰岩片の混合土層である。他の土が混入しておらず比較的締まっていた。これより上に堆積していた土砂には壁材や大小の石材片が混入し、土砂も種々入混じり、締りの弱いものであった。一般的な埋葬面としては４号墳のように礫を敷詰めるか、タイル状に加工した石材を並べたものかであるが本墳では１点の礫も認められず、タイル状の石材も全く認められなかった。

なお、石室内の下位の埋積土はフルイ掛け、水洗い等を行ったが遺物の出土は皆無であった。

玄門は長さ1.35～1.5ｍ程の柱状の石材を立て、玄室と羨道の側壁で挟み込んであった。相方の間隔は下が80㎝、上は40㎝と側壁と同様に内傾していた。両者の間には幅80㎝、高さ40㎝、厚さ25㎝の板状の石材が間仕切石（閾石）として据えられており、その上には幅65㎝、高さ28㎝、厚さ８㎝の板状の石材が設置されていた。こちらは厚さなどから閉塞用の石材と推察される。また、上部には55㎝程の空間があり本来はさらに２段程積まれていたと思われるが、追葬により取り外された後は玉石で閉塞されたものと考えられる。なお、墓道の調査時に底面直上に横たわる長さ1.2ｍ、幅40㎝、厚さ10㎝程の長楕円形の石材を確認した。当初は厚さから天井石ではなく、閉塞材かと推察したが形状より推して楣石の可能性が高いと思われる。これにより推定される玄門の内法は幅40～80㎝、高さ75㎝の台形と考えられる。羨道は、長さ0.9ｍ、幅1.03～1.07ｍ、床面は墓道底面より約40㎝低い。側壁は加工度の高い凝灰岩の割石（削石）積みで、玄室に比べやや小振りの石材を使用する。

さらに、墓道の東方に長さ1.3ｍ、幅58㎝、厚さ31～38㎝の天井石と見られる石材が遺存した。大きさや位置から羨道部の天井石であったと推察される。

本墳は墳丘のほぼ中心に石室の奥壁を設けており、羨道から周溝に延びる墓道は幅0.5～1.35ｍで、長さ7.2ｍと細長いものであった。

出土遺物（第29・30図、第５・６表）

遺物は、墓道、墳丘、周溝から古墳時代の土師器（坏・甕）を主体とし少量の須恵器甕片が出土した。なお、29図１は墓道より出土したが、古墳築造時のものでは無く追葬もしくは墓前祭など後世に持ち込まれたものと推察される。

また、周溝北東部の黄褐色土中より出土の土師器坏、東側の底面より出土の土師器甕などはそれぞれ、SK-06・18に伴うと考えられる為別項に記す。前述の周溝南東部より出土の一群は一括廃棄と考えられ、径10.5～13.3㎝、器高3.3～6.7㎝で、平底、丸底、深・浅など多少器形の相違は見られるものの、概ね粗製の土器でミガキなどの仕上げの度合は著しく低い。

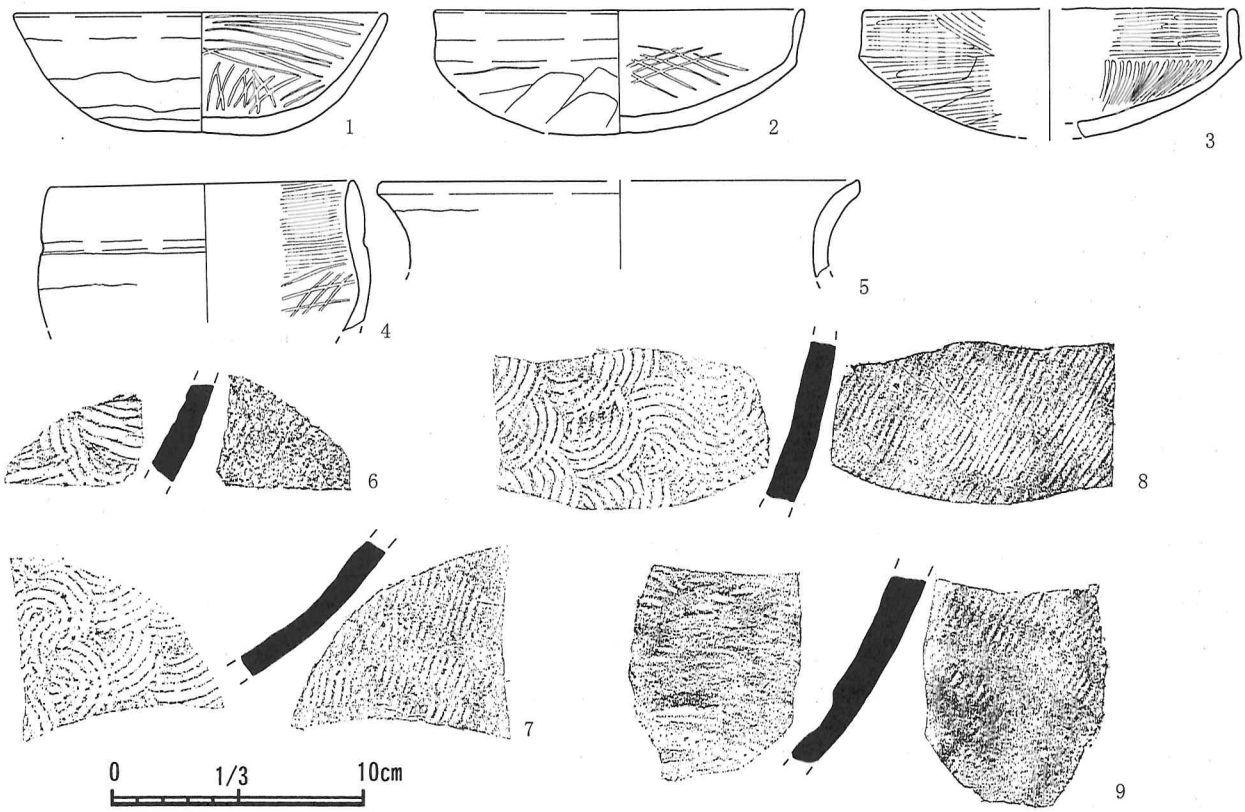
４．１号墓（旧６号墳）

位置・外部施設（第31図、図版17）

調査区の北東部、7C・DGrに所在する。北西約3.5ｍに５号墳、南西約10ｍに４号墳が所在し、南西約２ｍにSK-03、南約5.5ｍにSK-02が隣接する。

本跡は試掘調査時には小規模ながら６号墳として想定されていたが、調査の進捗に伴い古墳では無く奈良時代の遺構であることが判明し、１号墓と名称を変更した。

平面は、東西７ｍ、南北5.6ｍの不整楕円形に廻る溝の西端に長方形の土坑が付随する遺構である。



第29図　5号墳出土遺物（1）墳丘・墓道

溝は幅55～85㎝、深さ50～80㎝、断面は逆台形、埋積土は3層に別けられ、自然埋没であった。この溝の埋積土中に炭化物が混じっており、北側の底面より長さ15㎝、径10㎝弱の炭化材が出土した。後述の如く西端の土坑内に炭化材が多数遺存していたことから両者は一体の遺構と判断した。

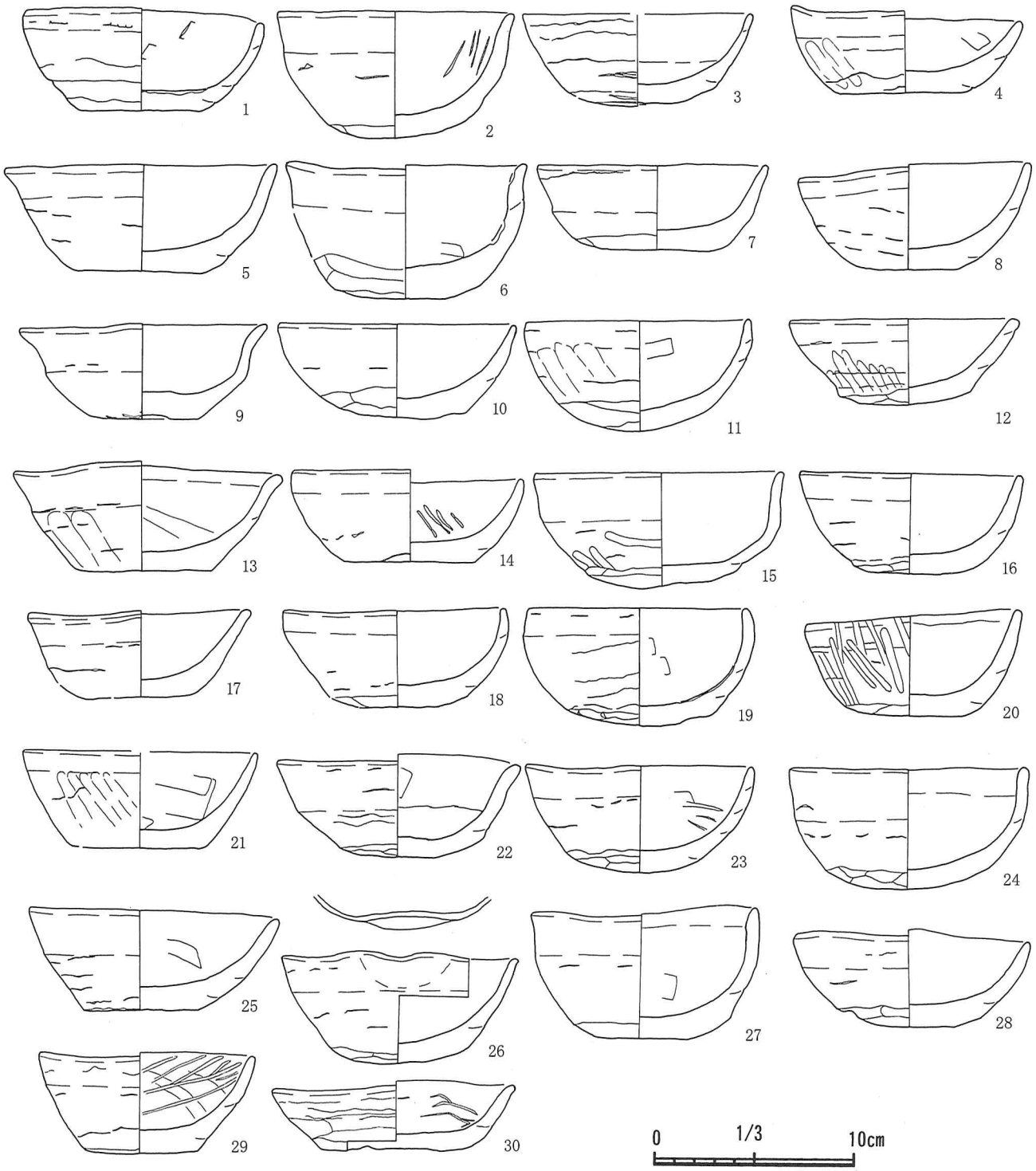
付属施設（第31図、図版17）

当初、この土坑を確認し、SK-01として調査を進めたが、前述の通り溝と一体の遺構であろうとの判断に至った。

平面は南北2m、東西0.9mの長方形、深さは斜面地の為北が90㎝、南で55㎝であった。埋積土は3層に分けられ、下位の3層中には多くの炭化材が遺存し、壁面には火熱で赤化した部分が所々認められた。この為、火葬墓・火葬跡を想定して慎重に調査を進めたが、一片たりとも火葬骨は認められなかった。壁面に赤化部分が無ければ土葬して炭化材を周囲に置いたとも考えられるが、明らかに土坑（壙）内で火を使用しており疑問を残す。

出土遺物（第31図、第7表）

遺物は、炭化材の他は土坑内より出土の土師器坏が1点（1）のみである。数片に割れて出土し、火熱によって内面の黒色処理が失われていた。



第30図　5号墳出土遺物（２）周溝南東部

第４表　４号墳出土遺物観察表

（　）推定値［　］現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
1	土師器 坏	口径　— 器高　— 底径　—	30%	紐づくり、底部外面削り後ミガキ、内面ナデ後ミガキ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 にぶい黄橙色	周溝南墓道前埋土下層
2	土師器 坏	口径　14.3 器高　5.4 底径　—	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、底部削り、内面ナデ後ミガキ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 にぶい黄橙色・黒褐色	墳丘南表土
3	土師器 坏	口径　14.4 器高　4.6 底径　—	80%	紐作り、口辺部内外面横ナデ、底部内外面削り後ミガキ、内面ナデ後ミガキ	胎土　微砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	墳丘南西封土上
4	土師器 坏	口径　15.3 器高　5.5 底径　—	90%	紐づくり、口辺部内外面ナデ、底部外面削り、内面ナデ後ミガキ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 浅黄橙色・褐色、外 褐色・黄橙色	墳丘南西封土上
5	土師器 高坏	口径　(17.3) 器高　— 底径　—	断片	口辺部内外面横ナデ、坏部外面削り、内面ナデ後ミガキで黒色処理	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 橙色	墳丘南西封土上
6	土師器 高坏	口径　17.4 器高　11.3 底径　12.4	80%	口辺部と脚裾部内外面横ナデ、坏部外面及び接合部削り、内面ナデ後ミガキで黒色処理、脚部内面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 浅黄橙色	墳丘南西封土上
7	土師器 高坏	口径　(17.1) 器高　(9.8) 底径　12.1	60%	口辺部と脚裾部内外面横ナデ、坏部外面及び接合部削り、内面ナデ後ミガキで黒色処理、脚部内面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 明褐色	墳丘南西封土上
8	土師器 高坏	口径　17.8 器高　10.8 底径　(12.2)	80%	口辺部と脚裾部内外面横ナデ、坏部外面及び接合部削り、内面ナデ後ミガキで黒色処理、脚部内面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 黄橙色	墳丘南西封土上

第５表　５号墳出土遺物観察表

（　）推定値［　］現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
1	土師器 坏	口径　15.1 器高　4.7 底径　—	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、底部外面削り、内面ナデ後ミガキ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒褐色・にぶい黄橙色	墓道埋土
2	土師器 坏	口径　15.0 器高　4.9 底径　—	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、底部外面削り後ミガキ、内面ナデ後ミガキ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒褐色・にぶい黄橙色	墓道埋土
3	土師器 坏	口径　(14.7) 器高　(5.1) 底径　—	40%	紐づくり、、口辺部外面横ナデ後ミガキ、底部外面削り後ミガキ、内面ナデ後ミガキで内面黒色処理	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 黒色・橙色	墳丘南西封土
4	土師器 鉢？	口径　(12.1) 器高　— 底径　—	断片	紐づくり、口辺部外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ後ミガキで内面黒色処理	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 浅黄橙色	墳丘南表土
5	土師器 甕	口径　(18.0) 器高　— 底径　—	断片	口辺部内外面横ナデ、内面磨滅	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄橙色	墳丘南東封土
6	須恵器 甕	口径　— 器高　— 底径　—	断片	輪積み、外面平行目叩き、内面同心円文当具痕	胎土　白色粒混 焼成　良 色調　内 暗青灰色、外 赤灰色	墳丘北表土
7	須恵器 甕	口径　— 器高　— 底径　—	断片	輪積み、外面平行叩き、内面同心円文当具痕	胎土　白砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰色	周溝東埋土
8	須恵器 甕	口径　— 器高　— 底径　—	断片	輪積み、外面平行目叩き、内面同心円文当具痕	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰色	墳丘南表土
9	須恵器 甕	口径　— 器高　— 底径　—	断片	輪積み、外面平行叩き、内面同心円文当具痕をナデ消す	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰色	墳丘南表土

第６表　５号墳周溝内出土土器観察表

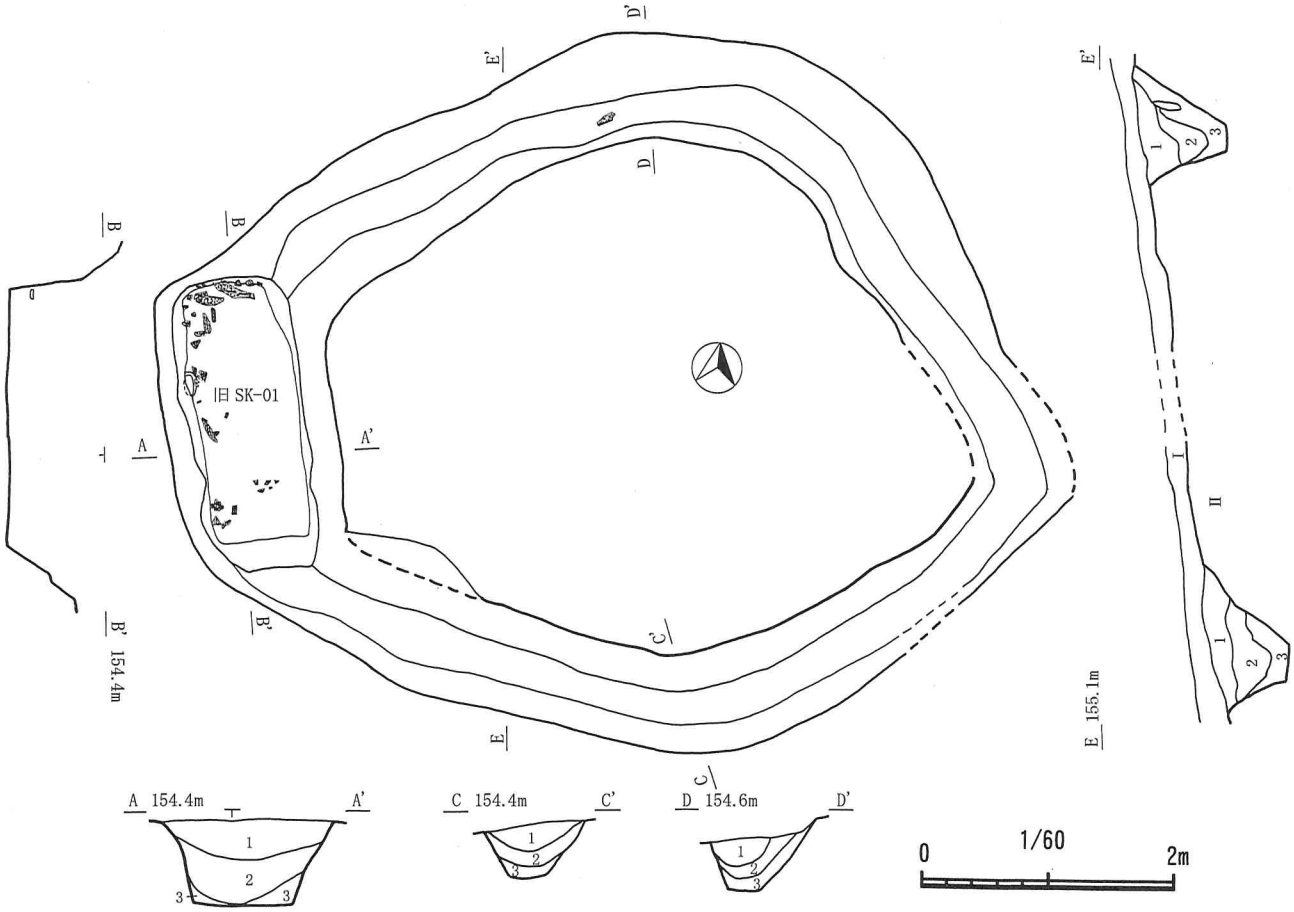
（　）推定値［　］現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
1	土師器 坏	口径　11.8 器高　4.7 底径　6.2	完形	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色・褐灰色	周溝南東底面埋土下層
2	土師器 坏	口径　11.8 器高　6.2 底径　6.8	90%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　やや良 色調　内 褐灰色、外 灰白色・褐灰色	周溝南東底面埋土下層
3	土師器 坏	口径　(11.4) 器高　4.6 底径　7.6	50%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 にぶい黄橙色・黒褐色	周溝南東底面埋土下層
4	土師器 坏	口径　11.4 器高　4.0 底径　6.3	60%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒褐色	周溝南東底面埋土下層
5	土師器 坏	口径　13.5 器高　5.2 底径　6.2	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒褐、色外 灰白色	周溝南東底面埋土下層

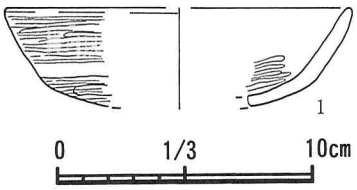
第６表　５号墳周溝内出土土器観察表

（　）推定値　［　］現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
6	土師器 坏	口径　12.0 器高　6.8 底径　—	70%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒褐色・黄橙色	周溝南東底面埋土下層
7	土師器 坏	口径　11.5 器高　4.2 底径　5.4	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色・褐灰色	周溝南東底面埋土下層
8	土師器 坏	口径　11.5 器高　5.3 底径　5.2	90%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	周溝南東底面埋土下層
9	土師器 坏	口径　12.2 器高　4.8 底径　5.5	90%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒褐色・黄橙色	周溝南東底面埋土下層
10	土師器 坏	口径　11.8 器高　4.7 底 径　—	完形	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒褐色・淡黄色	周溝南東底面埋土下層
11	土師器 坏	口径　11.4 器高　5.5 底径　—	完形	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒褐色・浅黄色	周溝南東底面埋土下層
12	土師器 坏	口径　11.4 器高　4.3 底径　—	80%	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黄橙色	周溝南東底面埋土下層
13	土師器 坏	口径　13.3 器高　4.9 底径　7.0	完形	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒褐色・黄橙色	周溝南東底面埋土下層
14	土師器 坏	口径　11.4 器高　4.4 底径　6.6	完形	紐づくり、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黄橙色	周溝南東底面埋土下層
15	土師器 坏	口径　12.5 器高　5.7 底径　—	完形	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 浅黄橙色	周溝南東底面埋土下層
16	土師器 坏	口径　11.0 器高　5.0 底径　3.2	完形	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　やや良 色調　内外 浅黄橙色	周溝南東底面埋土下層
17	土師器 坏	口径　10.9 器高　5.3 底径　(5.6)	80%	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　やや良 色調　内外 褐灰色	周溝南東底面埋土下層
18	土師器 坏	口径　11.2 器高　4.9 底径　4.0	完形	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色・黒褐色	周溝南東底面埋土下層
19	土師器 坏	口径　11.0 器高　5.9 底径　7.4	完形	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色・黒褐色	周溝南東底面埋土下層
20	土師器 坏	口径　10.5 器高　5.0 底径　5.3	完形	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部外面ナデ後削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	周溝南東底面埋土下層
21	土師器 坏	口径　(11.6) 器高　4.7 底径　6.6	70%	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部から底部内外面ナデ	胎土　砂粒・粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒色	周溝南東底面埋土下層
22	土師器 坏	口径　12.1 器高　4.8 底径　7.4	70%	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色・黒褐色	周溝南東底面埋土下層
23	土師器 坏	口径　11.2 器高　5.3 底径　6.7	90%	紐作り、口辺部外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色・黒褐色	周溝南東底面埋土下層
24	土師器 坏	口径　11.8 器高　6.0 底径　5.3	90%	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	周溝南東底面埋土下層
25	土師器 坏	口径　12.4 器高　5.0 底径　5.8	80%	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒褐色、外 浅黄橙色	周溝南東底面埋土下層
26	土師器 坏	口径　11.8 器高　5.4 底径　6.9	80%	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒褐色	周溝南東底面埋土下層
27	土師器 坏	口径　11.4 器高　6.7 底径　4.8	80%	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黄橙色	周溝南東底面埋土下層
28	土師器 坏	口径　11.6 器高　4.5 底径　7.4	80%	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部外面ナデ後、一部削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄橙色・黒褐色	周溝南東底面埋土下層
29	土師器 坏	口径　10.9 器高　5.0 底径　5.8	80%	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 黒褐色	周溝南東底面埋土下層
30	土師器 坏	口径　12.0 器高　3.3 底径　7.6	90%	紐作り、口辺部内外面横ナデ、体部内外面ナデ、底部外面削り	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 浅黄橙色・黒褐色	周溝南東底面埋土下層



第 31 図　1 号墓・出土遺物



A-A'

1．黒色土(10YR2/1)，にぶい黄橙色(10YR6/3)R・B小を中量，IP・炭化物R・岩片Rを微量含む
2．黒褐色土(10YR3/1)，にぶい黄橙色(10YR6/3)R・Bを中量含む
3．暗褐色土(10YR3/3)，LR・LB小・中量，焼土R少量，炭化物R・B大多量含む

C-C'

1．黒褐色土(10YR2/2)，灰黄褐色土(10YR5/2)Rを中量，LRを少量含む
2．黒褐色土(10YR3/2)，灰黄褐色土(10YR5/2)R・B小を中量含む
3．暗褐色土(10YR3/3)，LR・LB中を中量，IP・SPを微量含む
1～3締り強い

D-D'

1．黒褐色土(10YR2/2)，灰黄褐色土(10YR5/2)R・B小を中量，LRを少量，IPを微量含む
2．黒褐色土(10YR3/2)，灰黄褐色土(10YR5/2)R・B小を中量，IP・SPを微量含む
3．灰黄褐色土(10YR4/2)，LR・LB中，R・B小を中量含む
1～3締り強い

E-E'

1．黒褐色土(10YR2/2)，灰黄褐色土(10YR5/2)R・B小を中量，LRを少量，IP・SPを微量含む
2．黒褐色土(10YR3/2)，灰黄褐色土(10YR5/2)R・B小を中量，IP・SP，炭化物Rを微量含む
3．灰黄褐色土(10YR4/2)，LR・LB小を中量含む。締り強い

5．壙穴

古墳の周溝内及びその周辺より埋葬施設と推察される土坑が計 16 基確認された。大部分は所謂「側壁抉込土坑」であるが、一部抉り込みが確認出来なかったものもあった。

（1）SK-02

遺構（第 32 図、図版 17）　調査区の中央部東端、6CGr に位置する。北約 3 m に SK-03、西約 4.5 m に SK-05、南約 2 m に SK-13・14、南西約 3.5 m に SK-10 などが隣接する。

浅い為抉り込みは遺存しなかったが、底面の状態などから西に竪坑、東に横坑を設けていたと推察され、横坑部分の主軸方位はN -38° -Wを示す。遺存部分では平面が 1.2 × 1.2 m の不整方形で、深さは 30 ～ 50 cm。

また、竪坑と推定される西寄りは東より 10 cm程高い。

埋積土は 4 層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

（２）SK-03

遺構（第 32 図、図版 17）　調査区の中央部東端、7CGr に位置する。北東約２ｍに１号墓、南約３ｍに SK-02、西南西約３ｍに SK-05 が隣接する。

竪坑は開口部が 1.87 × 0.88 ｍの不整楕円形、底面が 1.3 × 0.4 ｍ、西に 20 ㎝程張り出すが掘り過ぎの可能性がある。主軸方位はN-83°-Eを示す。深さ 82 ～ 95 ㎝、壁はほぼ直立するが上部は外傾していた。底面はローム層中にあり、ほぼ平らであった。横坑は側壁下部を北に抉り込んでおり、1.4 × 0.4 ｍの楕円形で、高さ 50 ㎝。底面は竪坑と平らになる。

埋積土は３層に分けられるが、全体に人為的埋没であった。

遺物の出土は無かった。

（３）SK-05

遺構（第 32 図、図版 17）　調査区の中央やや北寄り、6B・CGr に所在する。４号墳の北約２ｍに位置し、東北東約 3.5 ｍに SK-03、東約 4.5 ｍに SK-02、南約２ｍに SK-11 が隣接する。

竪坑は開口部が 1.85 × 0.65 ～ 0.9 ｍの不整長円形、底面は 1.55 × 0.7 ｍの長方形。主軸方位はＮ -26° -Ｅを示す。深さ 0.8 ～ 1.0 ｍで壁はほぼ直立する。底面は鹿沼軽石層中にあり、平らであった。横坑は側壁下部を北西に抉り込んでおり、1.45 × 0.3 ～ 0.4 ｍの楕円形で、高さ 46 ㎝。底面は竪坑とほぼ平らである。

埋積土は４層に分けられ、下位は人為的埋没であった。

遺物の出土は無かった。

（４）SK-06

遺構（第 32 図、図版 17）　調査区の北東端、10CGr に所在する。５号墳周溝の北東外壁を切って設けられていた。西北西約 5.5 ｍに SK-12、西約 10.5 ｍに SK-21、南約 12 ｍに SK-18 が隣接する。

平面は開口部が 3.07 × 1.63 ｍの楕円形、底面は 2.6 × 1.1 ｍでほぼ同形。主軸方位はＮ -62° -Wを示す。深さは 0.75 ～ 0.8 ｍで壁はやや外傾する。底面はローム層中にあり、北西から南東に向って緩やかに下降する。埋積土は６～７層に分けられ、下位は人為的埋没と考えられるが、当初より抉り込み土坑でなかった可能性が高い。

なお、本跡は５号墳の周溝が 20 ㎝程埋った時期に掘られたと推察され、古墳の築造から大きく遅れるものではないと判断される。

また、本跡の確認前に古墳周溝の埋積土除去作業を行った際、埋積中位に東西３ｍ、南北 1.5 ｍの範囲でローム土を多量に含む土層の堆積が確認されその理由を計りかねていた。その後の調査の進捗に伴いこれらの土砂は本跡の掘削によって生じたものを周溝に埋めて祭壇状に整地したと判断された。周溝内の土砂を取り除いた際上記のローム土を多量に含む層中よりほぼ完形の土師器坏が１点出土している。

出土遺物（第 34 図、図版 21、第７表）　第 34 図１は本跡の南西約 1.5 ｍの、周溝内に堆積するローム土が多量に含まれる土層中より出土。位置的に５号墳の遺物とするよりは、本跡に伴うものと判断した。第 39 図６は本跡の確認面付近で出土したが、後世の流入と考えられる。

（５）SK-07

遺構（第 32 図、図版 18）　調査区の南東端、3C・DGr に所在する。３号墳の西約 8.5 ｍに位置し、北西約８ｍに SK-20 が隣接するが、他には近隣に該期の遺構は認められなかった。

竪坑は開口部が 1.95 × 1.25 ｍの楕円形、底面は 1.5 × 0.6 ｍの長方形。主軸方位はＮ -61° -Eを示す。深さは 0.95 ～ 1.15 ｍで壁は下部が直立し上部は外傾する。底面はローム層中にあり、ほぼ平らであった。横坑は、側壁下部を北に抉り込み、1.8 × 0.4 ～ 0.55 ｍの長方形で高さ 0.25 ㎝。底面は竪坑より約 25 ㎝高い位置にある。しかし、竪坑の下位は不純物が含まれないローム土で堅く埋め戻してあり、両者の使用面は平らであったと判断される。

埋積土は５層に分けられ、３～５層は人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

（６）SK-08

遺構（第 32 図、図版 18）　調査区の中央部東端、4・5CGr に所在する。４号墳の東約 3.5 ｍに位置し、南西部は SK-09 と重複しこれを切られていた。

開口部は 1.65 × 0.9 ｍの長方形、底面は 1.35 × 0.6 ｍのほぼ同形。主軸方位はＮ -46° -Eを示す。深さは 0.8 ～ 0.9 ｍで壁はほぼ直立する。底面はローム層中にあり、概ね平らであった。現状では抉り込みは確認できないが、北西の側壁下端を抉り込んでいた可能性が高く、09 との重複によってそれが破壊されたと推察される。

埋積土は４層に分けられ、下位の２～４層は人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

（７）SK-09

遺構（第 32 図、図版 18）　調査区の中央部東端、4・5CGr に所在する。４号墳の東約２ｍに位置し、南東が SK-08 と重複しこれを切っていた。

竪坑は開口部が 1.5 × 0.85 ｍの不整長方形で南が丸みを帯びる。底面は 1.2 × 0.65 ｍでほぼ同形。主軸方位はＮ -10° -Wを示す。なお竪坑の底面はローム層中にあり、東側が８～ 13 ㎝低くなっており、ここから横坑に変わると推察される。壁は南と西が外傾するが、北と東はほぼ直立する。横坑は前記の如く竪坑底面より一段下がり 1.35 × 0.7 ｍの丸みを持った長方形で高さ 32 ㎝。

埋積土は３層に分けられ、２・３層は人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

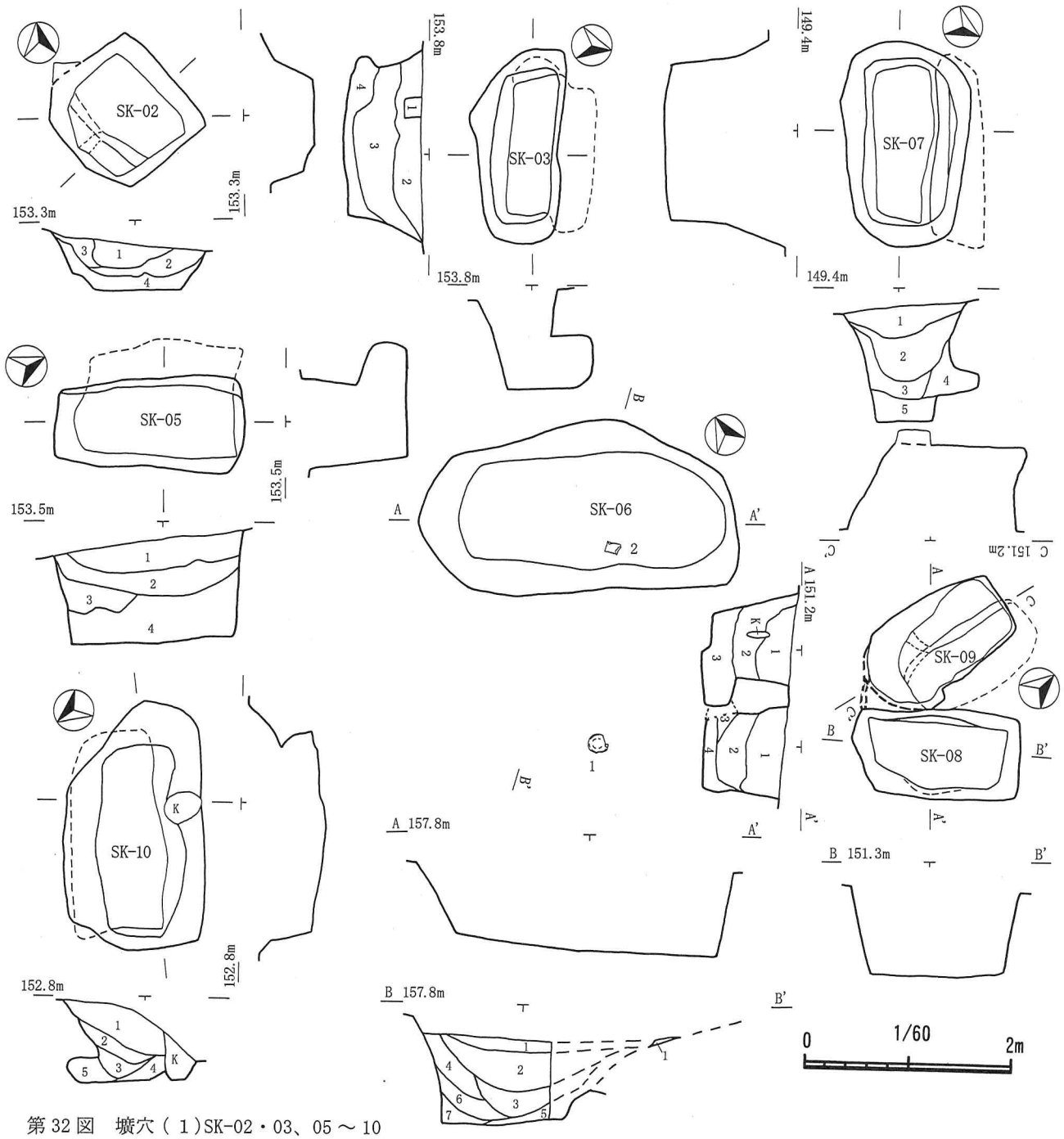
（８）SK-10

遺構（第 32 図、図版 18）　調査区の中央部東端、6CGr に所在する。４号墳周溝の北東外壁に設けられていた。北約 0.5 ｍに SK-13、北東約 1.5 ｍに SK-14、北西約２ｍに SK-11 などが隣接する。

周溝外壁に設けられていることから、開口部は上部が変形していた。開口部は長さ 2.4 ｍ、幅 1.38 ｍの不整楕円形。横坑は 1.9 × 0.95 ｍの楕円形、高さ 25 ㎝。主軸方位はＮ -46° -Wを示す。

開口部から横坑に向けて 18 ㎝程下がる。埋積土は５層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

本跡の確認前に周溝の埋積土除去作業を行っていたところ、周溝が 25 ㎝程埋ったところで、ローム土を



第32図　壙穴（１）SK-02・03、05～10

壙穴

SK-02

1．黒色土(10YR2/1)，LRを少量，にぶい黄橙色(10YR6/3)R・B小を中量含む
2．黒褐色土(10YR3/1)，LR・LB少，にぶい黄橙色土(10YR6/3)を中量含む
3．褐灰色土(10YR4/1)，LRを少量，黒褐色土(10YR3/1)を中量含む
4．にぶい黄橙色土(10YR6/3)，LR・LB中，黒褐色土(10YR3/1)を中量含む
1～4締り強い

SK-03

1．暗褐色土(10YR3/4)，LRを少量含む，締り弱い
2．褐灰色土(10YR4/1)，灰黄橙色土(10YR4/2)，LR・LB中を中量含む
3．灰黄褐色土(10YR5/2)，LR・LB大を中量，褐灰色土(10YR4/1)を少量含む
4．灰黄褐色土(10YR5/2)，LR・LB大を中量，褐灰色土(10YR4/1)を少量含む

SK-05

1．黒褐色土(10YR3/1)，IP・SPを少量含む
2．黒褐色土(10YR3/1)，LR・IP・SPを少量含む
3．褐灰色土(10YR4/1)，LRを少量，IP・SPを微量含む
4．灰黄褐色土(10YR4/2)，LR・LB中を中量，IP・SPを微量含む

SK-06

1．黒色土(10YR2/1)，にぶい黄橙色土(10YR6/3)を中量含む
2．黒褐色土(10YR3/1)，にぶい黄橙色土(10YR6/3)を少量，IP・SPを微量含む
3．黒色土(10YR2/1)，にぶい黄橙色土(10YR6/3)を中量，LR・IP・SPを少量含む
4．灰黄褐色土(10YR4/2)，LR・LB小を中量，IP・SPを微量含む
5．にぶい黄橙色土(10YR5/4)LR・LB主体，黒褐色土(10YR3/1)，IPを少量，SP・岩片を微量含む
6．灰黄褐色土(10YR4/2)，褐灰色土(10YR4/1)，LR・LB中を中量，IPを少量，SPを微量含む
7．黄褐色土(10YR5/6)，LR・LB大主体，褐灰色土(10YR4/1)を中量含む。壁の崩れ

SK-07

1．黒褐色土(10YR3/1)，灰黄褐色土(10YR4/2)を中量，IPを微量含む
2．黒色土(10YR2/1)，褐灰色土(10YR4/1)を中量，LR・IPを少量含む
3．灰黄褐色土(10YR4/2)，黒褐色土(10YR3/1)を中量，LR・LB小を少量
4．灰黄褐色土(10YR4/2)，LR・LB大，褐灰色土(10YR4/1)を中量含む。締り弱い
5．黄褐色土(10YR5/6)，LR・LB大を主体，褐灰色土(10YR4/1)を少量含む。締り非常に強い
1～3締りあり

SK-08・09

1．灰黄褐色土(10YR4/2)，LR・LB小を中量，褐灰色土(10YR4/1)を少量，IPを微量含む
2．黒色土(10YR2/1)，褐灰色土(10YR4/1)を中量，LR・IPを少量含む
3．灰黄褐色土(10YR4/2)，黒褐色土(10YR3/1)を中量，LR・LB小を少量
4．灰黄褐色土(10YR4/2)，LR・LB大，褐灰色土(10YR4/1)を中量含む。締り弱い

SK-10

1．黒褐色土(10YR3/2)，LRを少量，IP・SPを微量含む
2．褐灰色土(10YR4/1)，LR・LB小を中量，IP・SPを少量含む
3．灰黄褐色土(10YR4/2)，LR・LB小を中量，KPを微量含む
4．にぶい黄褐色土(10YR6/3)，LR・LB小，KPB小を中量含む
5．明黄褐色土(10YR6/6)，LR・LB中を中量，KP，灰黄褐色土(10YR4/2)を少量含む

多く含む層が確認され、奈良時代の須恵器蓋と坏の破片が散在していた。竪穴住居跡の可能性を想定し調査を進めたが、カマド等の火処もなく、遺物は前記の須恵器の蓋と坏各１点（その破片のみが散在）と須恵器甕、瓦の細片のみであった。そこで周囲を精査して本跡の確認に至ったものである。前述の SK-06 同様に掘削によって生じたローム土を周溝内に敷いて整地したと判断した。

出土遺物（第 34 図、図版 21、第７表）第 34 図２・３の須恵器蓋と坏には同じ「×」のヘラ記号がみられ、セットで製作・焼成されたと推察される。また、出土状態から推して本来の形状のままではなく、意図的に破壊して散布した可能性が高い。

（９）SK-11

遺構（第 33 図、図版 18）　調査区の中央部、6CGr に所在する。４号墳周溝の北部外壁に設けられていた。東約２ｍに SK-13、南東約２ｍに SK-10、北約２ｍに SK-05、北東約４ｍに SK-02 が隣接する。

周溝内に所在する為開口部は変形していると思われる。現状の開口部は 1.35 ～ 1.65 × 0.75 ｍの不整長方形、底面は 1.2 × 0.5 ｍの不整長方形で、主軸方位はＮ -55° -Wを示す。底面は竪坑と横坑の境が明瞭でなく、横坑は 1.05 × 0.5 ｍの不整楕円形で、高さ 40 ㎝。深さは北が 85 ㎝、南の周溝底面からは 35 ㎝、南東側は緩やかに立ち上がっていた。

埋積土は４層に分けられたが１・２層は周溝の埋積土が落ち込んだ可能性が高い。

遺物の出土は無かった。

(10) SK-12

遺構（第 33 図、図版 18）　調査区の北端中程、10BGr に所在する。５号墳周溝の北側外壁に設けられていた。東約５ｍに SK-06、西約５ｍに SK-21 が隣接する。

周溝内に所在する為開口部は横口形で、長さ 0.8 ｍ、高さ 30 ㎝程であった。横坑は 0.7 ｍ× 45 ㎝の楕円形で、主軸方位はＮ -82° -Wを示す。底面の深さは北で 85 ㎝、南は周溝底面から 18 ㎝であったが、樹木の根の痕跡によって不瞭になっていた。

埋積土は１層で、人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

(11) SK-13

遺構（第 33 図、図版 18）　調査区の中央部東端、6CGr に所在する。４号墳の北東約１ｍに位置し、東約１ｍに SK-14、南西約 0.5 ｍに SK-10、西約２ｍに SK-11、北約２ｍに SK-02 が隣接する。

竪坑は開口部が 1.6 × 0.83 ｍの不整長方形、底面は 1.13 × 0.45 ｍの長方形で、主軸方位はＮ -54° -Wを示す。深さ 0.65 ～ 0.85 ｍで、壁は西を除き外傾する。底面はローム層中にあり、横坑側に向って下降する。横坑は側壁の下位を北西下方に向って抉り込み、約 1.4 × 0.55 ｍの不整長方形で、高さは 35 ㎝。

埋積土は３層に分けられ、２・３層は人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

(12) SK-14

遺構（第 33 図、図版 19）　調査区の中央部東端に所在する。西は SK-15 と重複しこれを切る。４号墳の

北東約2.5ｍに位置し、西約１ｍにSK-13、同約４ｍにSK-11、北約２ｍにSK-02、南西約1.5ｍにSK-10などが隣接する。

竪坑は開口部が1.2×0.67ｍの不整楕円形、底面も1.1×0.3ｍのほぼ同形と推定され、主軸方位はＮ-72°-Eを示す。深さは28～40㎝と浅く、底面はローム層中にあり横坑側に向って下降する。横坑は側壁下端を北下方に向って抉り込み、1.3×0.4ｍの楕円形で、高さは約20㎝、底面は奥に向って下降する。

埋積土は３層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

(13) SK-18

遺構（第33図、図版19）　調査区の北部東端、9C・DGrに所在する。５号墳の周溝東側の外壁に抉り込まれていた。南約2.5ｍにSK-19、北約12ｍにSK-06が隣接する。

周溝の外壁に設けられていることから、開口部は横口となり、長さ2.1ｍ、高さ25㎝である。したがって竪坑の状態は明確にし難いが、後述の如く周溝がその役割を達したと推察される。横坑は東に向って抉り込まれ、2.25×0.5ｍの楕円形で、主軸方位はＮ－２°-Eを示す。底面はほぼ平らで、東側の深さは周溝上面から1.17ｍ、西側は周溝底面より25㎝程であった。

埋積土は４層に分けられ、人為的埋没と判断し得るが、堆積状態から推して構築時には周溝底面が露出した状態であったと考えられる。SK-06・10などは周溝埋没途中に掘削土でその土を整地したと判断されるのに対し、本跡の場合は古墳の築造から比較的近い周溝の埋没が進まない時期か、若干埋没は進んだもののそれを除去して周溝底面を露出させたと考えられる。

出土遺物（第34図、図版21、第７表）　本跡北東約50㎝のところよりほぼ完形の土師器甕が１点出土した。位置的に古墳の副葬品というよりは本跡への供え物の感が強い。この土器は周溝底面と見られるローム直上より出土しており、上記の想定を裏付ける資料となろう。胴張から長胴への移行期のものと見られ、最大径は胴部中央より下にある。胴部下位は火熱によって赤化しもろくなった部分も見られ、日常生活で使用されたものと考えられる。

(14) SK-19

遺構（第33図、図版19）　調査区の北部東端、8CGrに所在する。５号墳の周溝東側の外壁に抉り込まれていた。北約2.5ｍにSK-18が隣接する。

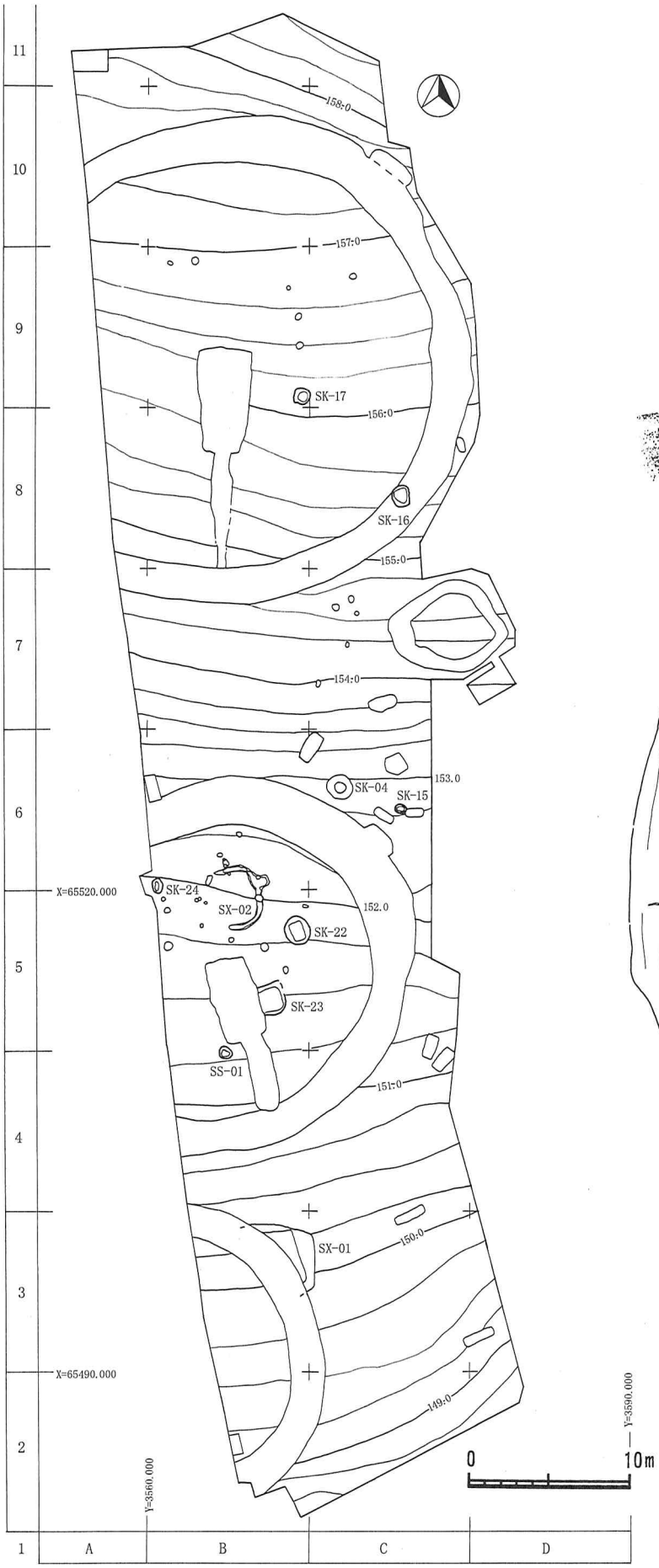
竪坑と横坑の区画が明瞭で無いもの、東側壁の下部が東に向って抉り込まれており、同種の遺構と判断した。開口部は、１×0.53～0.65ｍの不整楕円形、底面は0.75×0.45ｍのほぼ同形で、主軸方位はＮ-17°-Wを示す。底面は樹木の根跡との重複によって一部不明瞭となっていたが、南から北に向って下降するとともに、北東下方に向って抉り込まれていた。深さは北の周溝上面から70㎝、南は約25㎝であった。

埋積土は３層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

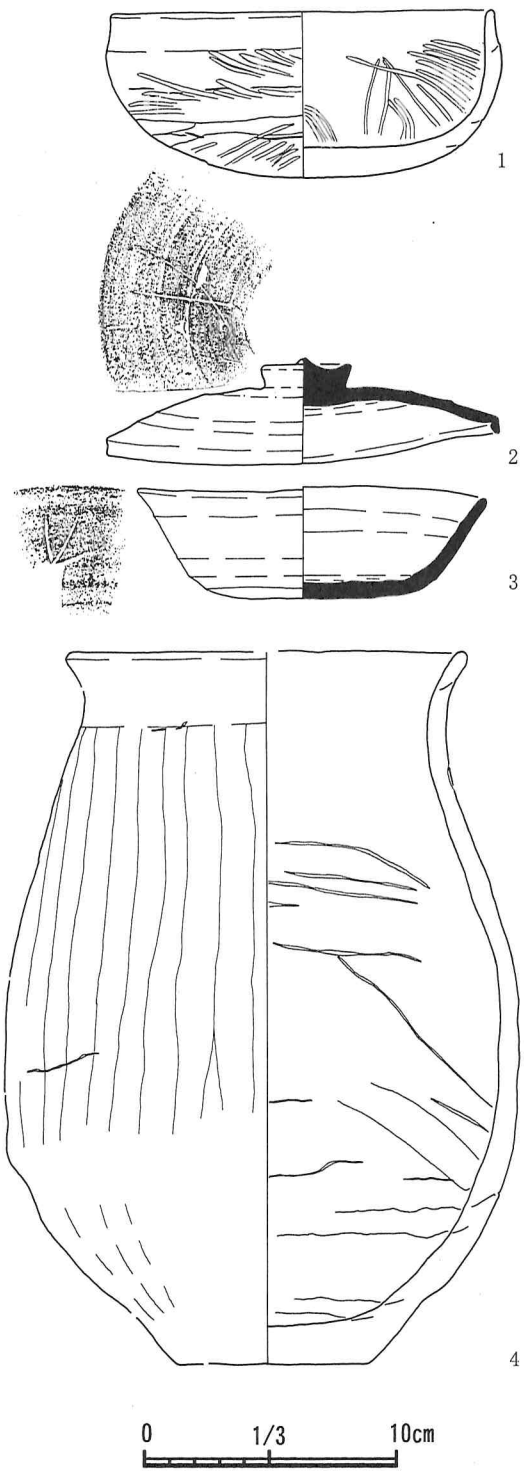
遺物の出土は無かった。

(15) SK-20

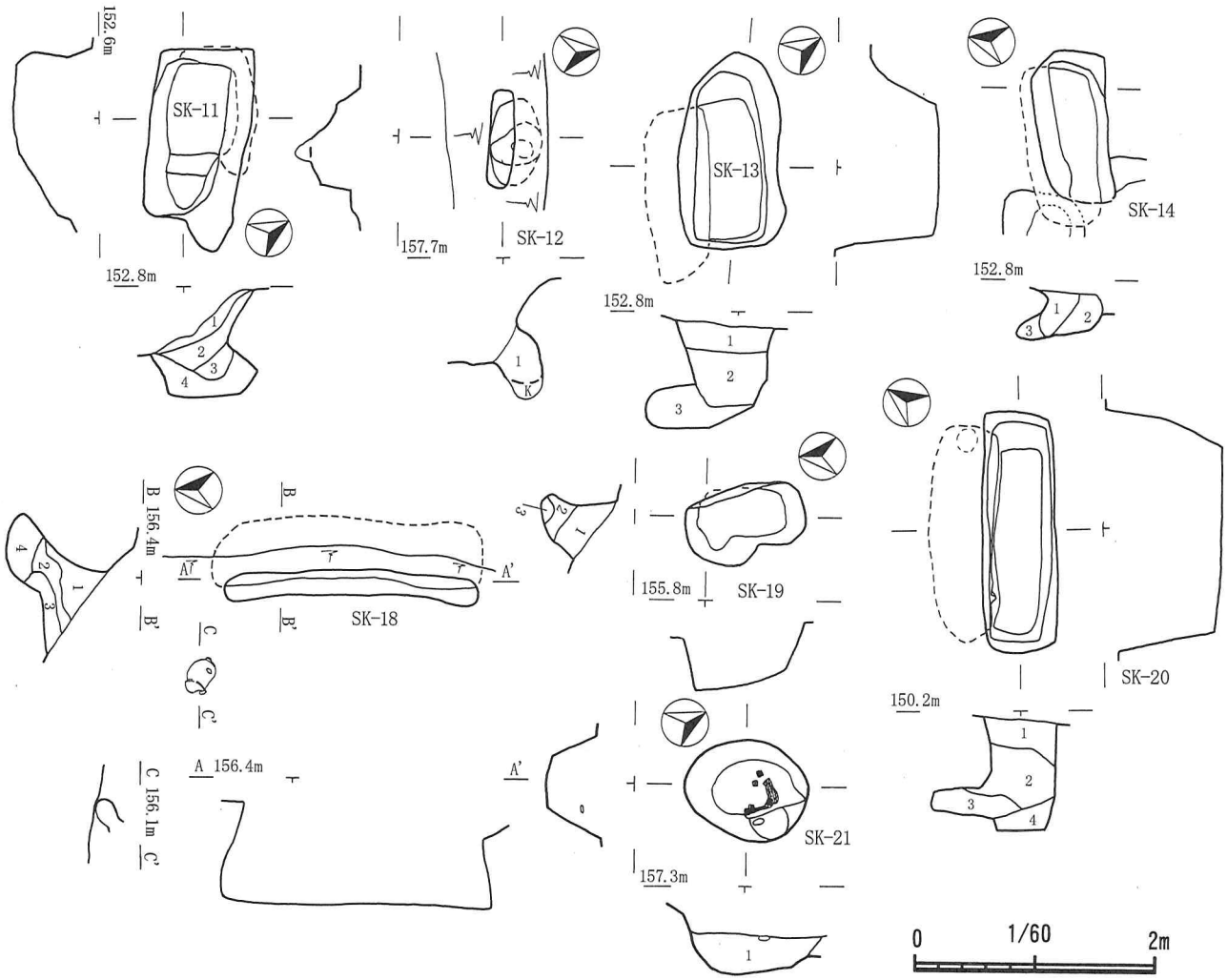
遺構（第33図、図版19）　調査区の南部東寄り、3・4CGrに所在する。４号墳の南東約7.5ｍ、３号墳の北東約6.5ｍに位置し、東南東約８ｍにSK-07がある。



第 35 図　遺構配置図（２）古墳時代以前



第 34 図　壙穴出土遺物



第33図　壙穴（２）SK-11～14、18～21

SK-11
1．黒褐色土(10YR2/2)，LR・IP・SPを少量含む
2．灰黄褐色土(10YR4/1)，褐灰色土(10YR4/1)を中量，LRを少量含む
3．にぶい黄褐色土(10YR6/3)，褐灰色土(10YR4/1)を少量含む
4．明黄褐色土(10YR6/6)，LR主体，灰黄褐色土(10YR4/2)を中量，KPを少量含む

SK-12
1．黒褐色土(10YR2/2)，LR・LB小を少量含む

SK-13
1．黒褐色土(10YR2/2)，LR・LB中を少量，LRを少量，IPににぶい黄褐色土(10YR5/4)を少量含む
2．にぶい黄褐色土(10YR5/4)，LR・LB中を多量，黒褐色土(10YR2/3)を少量含む
3．明黄褐色土(10YR6/6)，LR・LB大主体，にぶい黄褐色土(10YR5/3)中量含む

SK-14
1．黒褐色土(10YR3/1)，LRを中量含む
2．LR・LB中を主体，黒褐色土(10YR3/2)を多量に含む
3．灰黄褐色土(10YR5/2)，LR・LB小を中量，黒褐色土(10YR2/3)R・B小を少量含む，締り強い

SK-18
1．灰黄褐色土(10YR4/2)，LR・LB中を多量，黒色土(10YR2/1)を少量含む
2．明黄褐色土(10YR6/6)，LR・LB大主体，灰黄褐色土(10YR5/2)を中量含む
3．にぶい黄褐色土(10YR5/4)，灰黄褐色土(10YR5/2)を中量，LR・LB小を少量含む
4．褐灰色土(10YR4/1)，LRを小量含む

SK-19
1．黄褐色土(10YR4/6)，LR・LB大を多量に含む
2．にぶい黄褐色土(10YR4/3)，LR・LB小を中量，黒褐色土(10YR2/1)を少量含む
3．明黄褐色土(10YR6/6)，にぶい黄褐色土(10YR4/3)を中量含む

SK-20
1．黒褐色土(10YR2/2)，LR・LB中を中量，IP・SPを微量含む
2．黒褐色土(10YR2/2)，LR・LB大を中量，IP・SPを微量含む
3．黒褐色土(10YR2/2)，２に比べLR・LB少ない
4．にぶい黄褐色土(10YR5/3)，LB大を少量，SPを微量含む

SK-21
1．黒褐色土(10YR3/1)，にぶい黄褐色土(10YR6/4)R・B小を中量，IP・SPを微量，上位に炭化物R・Bを多量含む

竪坑は開口部が２×0.6ｍの長方形、底面は1.53×0.4ｍのほぼ同形で、長軸方位はN -63° -Eを示す。深さは85～95㎝で、壁はほぼ直立する。底面はローム層中にあり、一旦同種の土で横坑の高さまで埋戻して埋葬したと推察され、非常に堅く締まっていた。竪坑が深くて狭い為、横坑の掘削に利用した空間を埋戻した可能性が考えられる。横坑は1.8×0.57ｍの楕円形で、高さ23㎝、底面は竪坑より約10㎝高く、ほぼ平らであった。

埋積土は４層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

(16) SK-21

遺構（第33図、図版19）　調査区の北端中央部に所在する。本跡は５号墳周溝の北側内壁に接して設けられていた。遺構の形状や所在する位置などから他の遺構と同一に扱うことは憚られるが、次項の１群とは時代が異なる為本項に含めた。

平面は1.05×0.8ｍのほぼ円形、底面は0.7×0.45ｍでほぼ同形、長軸方位はＮ-31°-Eを示す。深さは25～50㎝で、壁は外傾して立ち上げる。底面はローム層中にあり、ほぼ平らであった。

埋積土は１層で、埋積土中に炭化材が遺存していた。焼土や焼面が見られなかったことから、他から持ち込まれたと推察される。周溝の埋没途中に掘り込まれたもので、自然埋没と考えられる。

炭化物以外に出土遺物は無かった。また、前述の如く、他の遺構（壙穴）とは異なる性格の施設の可能性が高い。

６．その他の遺構

各古墳の墳丘下や周溝内及び空間地より、古墳に先行する時代の遺構が確認された。その内訳は土坑７基、集石遺構１基、性格不明遺構２基などである。なお、本項に掲げた遺構は確認層位や埋積土から縄文時代と考えられるが、唯一SX-01は断定し難いところもある。

（１）SK-04

遺構（第36図、図版19）　調査区の中央部東寄り、6CGrに所在する。４号墳の北東約0.7ｍに位置するが、該期の遺構は東約３ｍにSK-15、北東約17ｍにSK-16、南西約７ｍにSX-02、南約８ｍにSK-22などがある。

開口部は1.6×1.5ｍのほぼ円形、底面は0.95×0.5～0.75ｍの不整方形。深さは１～1.2ｍで、壁の下位は直立ぎみに立ち上がるが、上位は外傾する。南西壁の中程に径30㎝程の小穴が見られたが、性格は不明。　底面はローム層中にありほぼ平らであった。

埋積土は４層に分けられ、自然埋没であった。所謂「陥穴」と考えられる。

遺物の出土は無かった。

（２）SK-15

遺構（第36図、図版19）　調査区の中央部東端、6CGrに所在する。西はSK-14と重複しこれに切られていた。４号墳の北東約２ｍに位置し、西約３ｍにSK-04が隣接する。

開口部は径約0.7ｍの円形、底面は0.5×0.3ｍの楕円形。深さは0.5ｍで、壁はほぼ直立し、底面はローム層中にあり、ほぼ平坦であった。

埋積土は４層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

（３）SK-16

遺構（第36図、図版20）　調査区の中央部東端、8CGrに所在する。５号墳の周溝南東部に位置し、北西側は墳丘に接する。北西約7.5ｍにSK-17、南約17～18ｍにSK-04・15がある。

開口部は周溝に切られ変形するが、1.4×1.1ｍの不整楕円形、底面は北西と北東に張り出し1.3×0.7

～1.3ｍの不整形。深さは西が2.07ｍ、東は周溝底面から1.4ｍで、壁の下部はややオーバーハングし、上部は緩やかに外傾する。なお、北西部と北東隅は前記の如く大きく張り出す。底面は鹿沼軽石層中にあり、ほぼ平らであった。北側の張り出しは鹿沼軽石層を壁としていることが関連するやもしれない。

埋積土は12層に分けられ、上部は自然埋没と見られるが下位は人為的埋没の可能性が高い。所謂「陥穴」と考えられる。

遺物の出土は無かった。

（4）SK-17

遺構（第36図、図版20）　調査区の北部中程、8BGrに所在する。５号墳の墳丘下に位置し、南東約７ｍにSK-16が隣接する。

開口部は1.05×１ｍの不整円形、底面は径70㎝でほぼ円形。深さは60㎝で、壁は東側の下部が僅かにオーバーハングする他はやや外傾する程度である。底面はローム層中にあり、ほぼ平坦であった。

埋積土は４層に分けられ、自然埋没と考えられる。小型の袋状土坑と推定される。

遺物の出土は無かった。

（5）SK-22

遺構（第36図、図版20）　調査区の中央部、4BGrに所在する。４号墳の墳丘下に位置し、南約2.5ｍにSK-23、西約1.5ｍにSX-02、北約８ｍにSK-04などが隣接する。

開口部は1.85×1.45ｍの楕円形、底面は径1.2×0.85ｍの長方形、長軸方位はＮ-11°-Ｗを示す。深さは1.5～1.55ｍで、壁は下位がほぼ直立（一部オーバーハング）し、上位は外傾する。底面はローム層中にあり、ほぼ平らであった。

埋積土は10層に分けられ、自然埋没と考えられる。所謂「陥穴」と考えられる。

遺物の出土は無かった。

（6）SK-23

遺構（第36図、図版20）　調査区の中央部、4BGrに所在する。４号墳の墳丘下に位置し、西は石室の掘方に切られていた。北約2.5ｍにSK-22、SX-02、北西約8.5ｍにSK-24、南南西約３ｍにSS-01が隣接する。前記の事情から本来の規模・形状は明確にし難いが、南北長1.92ｍ、現存東西長約1.7ｍ、円形もしくは楕円形と推定される。深さは15～30㎝で、壁は外傾する。底面はローム層中にありほぼ平らであった。

埋積土は２層に分けられ、自然埋没と考えられる。

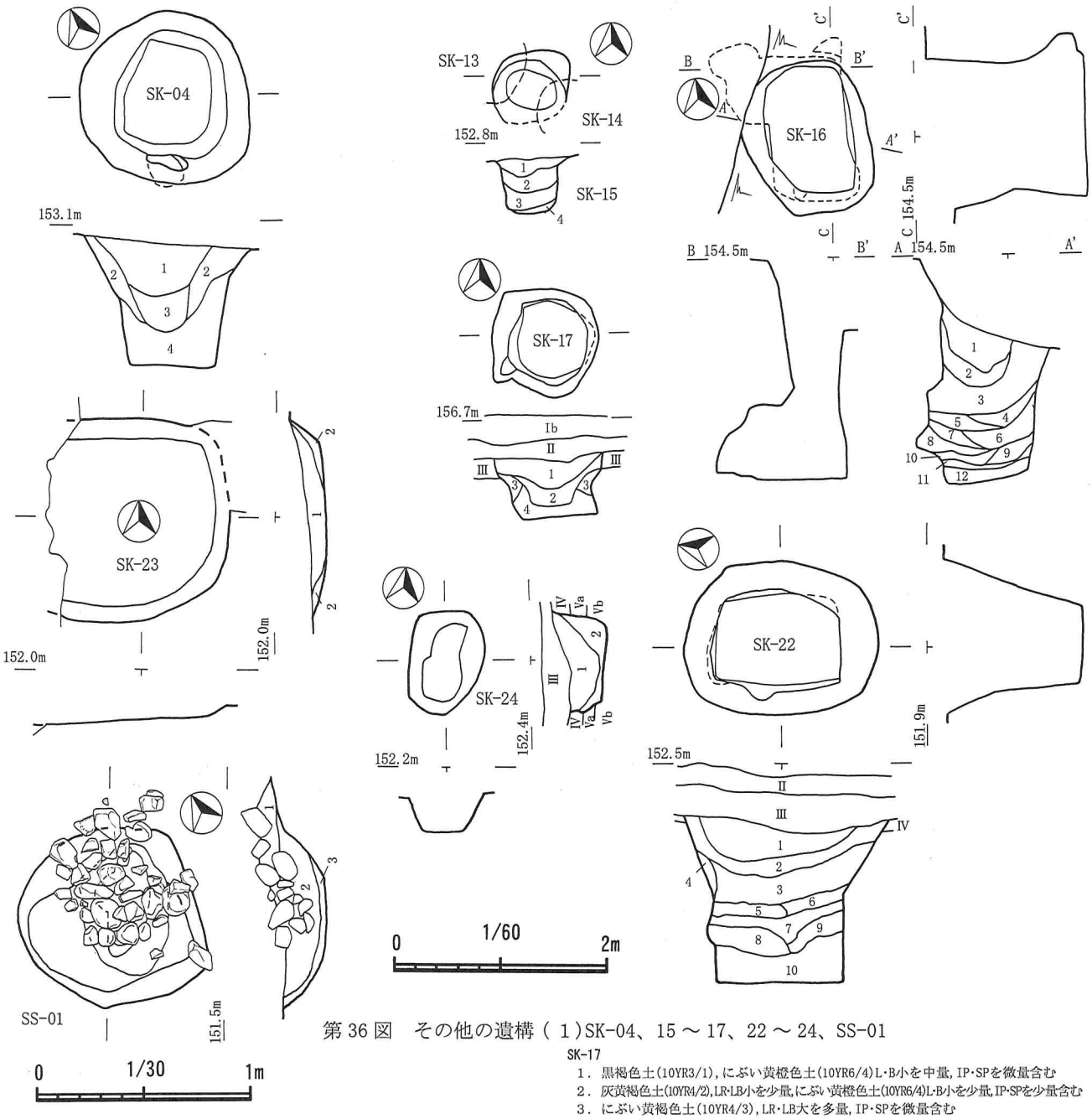
遺物の出土は無かった。

（7）SK-24

遺構（第36図、図版20）　調査区の中央部西端6BGrに所在する。４号墳の墳丘下に位置し、東約2.5ｍにSX-02、南東約8.5ｍにSK-23などが隣接する。

開口部は１×0.7ｍの不整楕円形、底面も径0.75×0.25～0.4ｍの不整楕円形であった。深さは30～50㎝で、壁はやや外傾し、底面はローム層中にあり、ほぼ平らであった。

埋積土は２層に分けられ、自然埋没と考えられる。遺物の出土は無かった。



第36図　その他の遺構（１）SK-04、15～17、22～24、SS-01

SK-04
1．灰黄褐色土(10YR4/2)，LR･LB大を中量，IP･SPを微量含む
2．にぶい黄褐色土(10YR4/3)，LR･LB大を中量，黒色土(10YR2/1)，褐灰色土(10YR4/1)を少量含む
3．にぶい黄褐色土(10YR4/3)，LR･LB大を中量，黒褐色土(10YR3/1)，KPB中を少量含む
4．にぶい黄褐色土(10YR4/3)，LR･LB小を中量含む

SK-15
1．灰黄褐色土(10YR4/2)，LR･LB小を少量，にぶい黄色土(10YR5/3)を中量含む
2．にぶい黄橙色土(10YR6/3)，灰黄褐色土(10YR5/2)を中量，LR･IPを少量含む
3．灰黄褐色土(10YR4/2)，黒褐色土(10YR3/1)を中量，IP･SPを少量含む
4．明黄褐色土(10YR6/6)，にぶい黄橙色土(10YR6/3)を中量含む
1～4締り非常に強い，粘性あり

SK-16
1．黒色土(10YR2/3)，にぶい黄褐色土(10YR6/6)を中量，IP･SPを少量含む
2．にぶい黄褐色土(10YR5/4)，LR主体，黒褐色土(10YR2/3)･IP･SPを少量含む
3．明黄褐色土(10YR6/6)，LR主体，黒褐色土(10YR3/2)を少量，IP･SPを微量含む
4．にぶい黄褐色土(10YR5/4)，LR主体，灰黄褐色土(10YR5/2)を中量含む
5．灰黄褐色土(10YR5/2)，褐灰色土(10YR5/1)を中量含む
6．にぶい黄褐色土(10YR5/4)，褐灰色土(10YR5/1)を中量含む
7．褐灰色土(10YR4/1)，LR･LB小を中量，KPを中量含む
8．灰黄褐色土(10YR5/2)，LR主体，KPB中を中量含む
9．灰黄褐色土(10YR6/2)，LR主体，黒褐色土(10YR3/1)，KPを少量含む
10．灰黄褐色土(10YR4/2)，黒褐色土(10YR3/1)を多量，KPを少量含む
11．明黄褐色土(10YR6/8)，KP主体，灰黄褐色土(10YR6/2)を中量含む
12．灰黄褐色土(10YR5/2)，黒褐色土(10YR3/1)，KPを少量含む
1～3締り強い

SK-17
1．黒褐色土(10YR3/1)，にぶい黄橙色土(10YR6/4)L･B小を中量，IP･SPを微量含む
2．灰黄褐色土(10YR4/2)，LR･LB小を少量，にぶい黄橙色土(10YR6/4)L･B小を少量，IP･SPを少量含む
3．にぶい黄褐色土(10YR4/3)，LR･LB大を多量，IP･SPを微量含む
4．にぶい黄褐色土(10YR4/3)，LR･LB小を中量，IP･SPを少量含む
1～4締り強い

SK-22
1．黒褐色土(10YR3/1)，LR･IP･SPを少量含む
2．黒褐色土(10YR3/1)，LR･IP･SPを少量含む。締りあり
3．黒褐色土(10YR2/3)，LR･LB小を中量，IP･SPを少量含む
4．にぶい黄褐色土(10YR5/4)，黒褐色土(10YR3/2)を中量含む
5．明黄褐色土(10YR6/6)，LR･LB大主体，黒褐色土(10YR3/2)を中量含む
6．黒褐色土(10YR3/1)，LR･LB小を中量，灰黄褐色土(10YR4/2)を中量含む
7．黒褐色土(10YR3/1)，LR･LB小を中量，灰黄褐色土(10YR4/2)を中量，IP･SPを少量含む
8．にぶい黄褐色土(10YR5/4)，LR主体，黒褐色土(10YR2/3)を中量含む
9．にぶい黄褐色土(10YR5/4)，LR･LB大主体，黒褐色土(10YR3/1)を中量含む
10．暗褐色土(10YR3/3)，黒褐色土(10YR3/2)，にぶい黄褐色土(10YR5/4)，明黄褐色土(10YR6/6)R･B小を少量含む

SK-23
1．黒褐色土(10YR3/1)，IP･SPを少量含む
2．暗褐色土(10YR3/3)，IP･SPを少量含む
1・2締り強い

SK-24
1．黒褐色土(10YR2/2)，IP･SPを少量含む
2．暗褐色土(10YR3/3)，IP･SPを少量，炭化物R微量含む
1・2締り強い

SS-01
1．黒色土(10YR2/1)，LRを少量含む
2．黒褐色土(10YR3/1)，LR，黄褐色土(10YR5/6)Rを少量含む
3．黒褐色土(10YR2/3)，黄褐色土(10YR5/6)R･B小を多量，炭化物Rを微量含む
2・3締り強い

（８）SS-01

遺構（第36図、図版20）　調査区の中央部西寄り4BGrに所在する。４号墳の墳丘下に位置し、上部は古墳の構築時及び盗掘に際して影響を受けたと見られる。北北西約３ｍにSK-23、北約７ｍにSX-02、北西約10ｍにSK-24などが隣接する。

径約0.8×１ｍ程の範囲に、火熱を受けたと見られる径６～16㎝の礫が集石されていた。集石の下には、径80×90㎝のほぼ円形で、深さ20㎝の掘り込みがあり、壁は外傾し、底面はほぼ平らであった。

埋積土は３層に分けられ、最下層には炭化物粒が認められた。礫は１・２層に含まれ、残存数は62個であった。

遺物の出土は無かった。

（９）SX-01

遺構（第37図、図版20）　調査区の中央部、3BGrに所在する。３号墳の周溝北東部と重複しこれに切られていた。確認当初は、黒色土中に長さ32㎝、径24×13㎝程の河原石が認められた為、石の周囲を精査し確認した。しかし、本跡の埋積土と３号墳の周溝は比較的近似しており、不明遺構として本項で報告するが、必ずしも縄文時代の遺構として断定したものでは無い。

平面形、規模は前記の如く西側は３号墳の周溝との重複で切られ判然としないが、東端での南北長約2.8ｍ、現存東西長は北が2.2ｍ、南が0.5ｍであった。平面は南北に長い楕円形もしくは不整円形と推定される。深さは20～25㎝で、壁はやや外傾し、底面はほぼ平らであった。柱穴や火処などの付随施設は認められなかった。本跡確認の契機となった河原石は底面上約10㎝に位置し、その下にも掘り込みなどは確認できなかった。

埋積土は３層に分けられ、３号周溝に近似するものの、本跡の方がIPの混入が顕著であった。

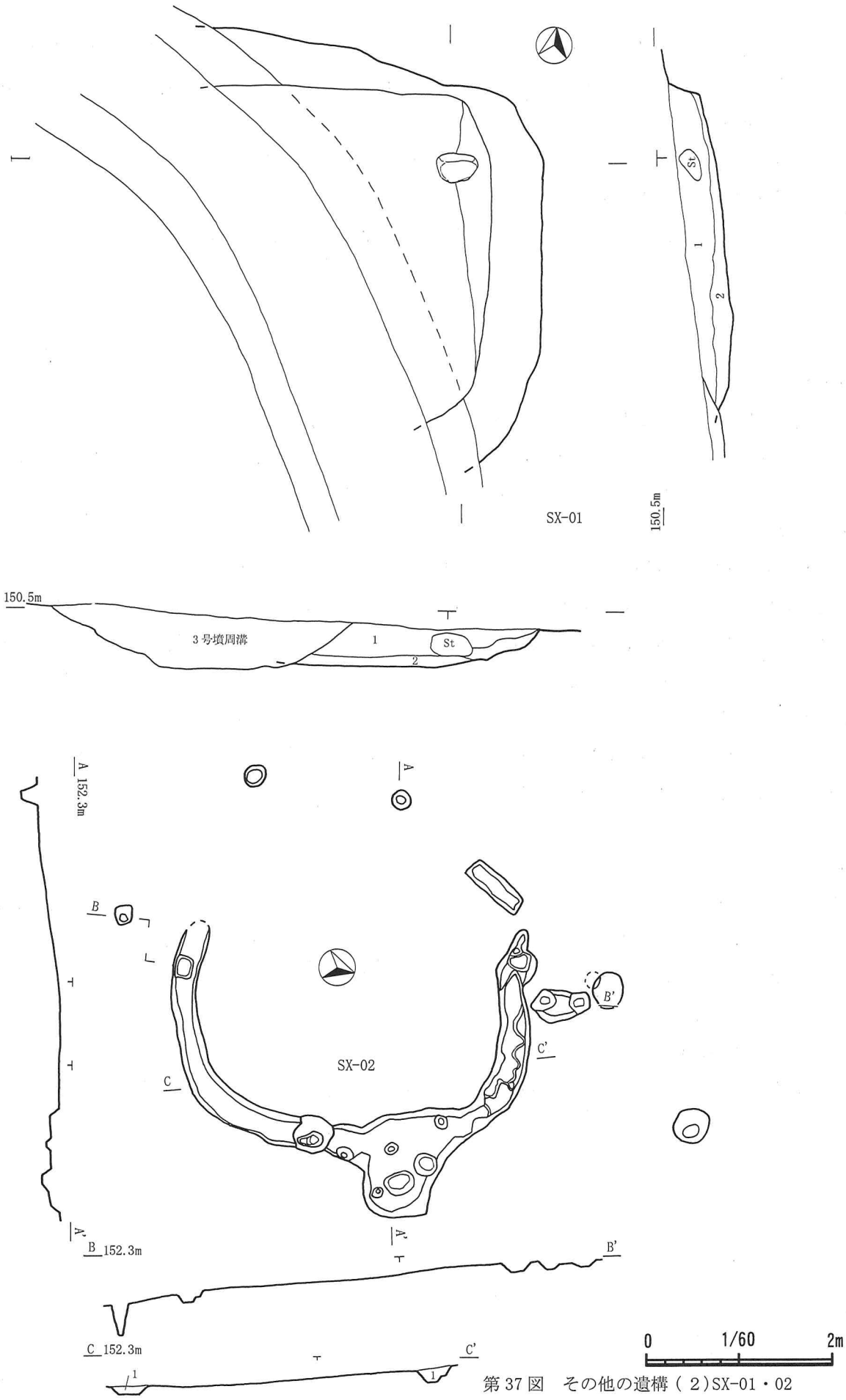
出土遺物（第38図、図版25、第８表）　遺物は前記の河原石の他に縄文時代前期黒浜式期の深鉢片（第38図４）が出土したが、本跡の時代を示すものとは断定し難い。

(10) SX-02

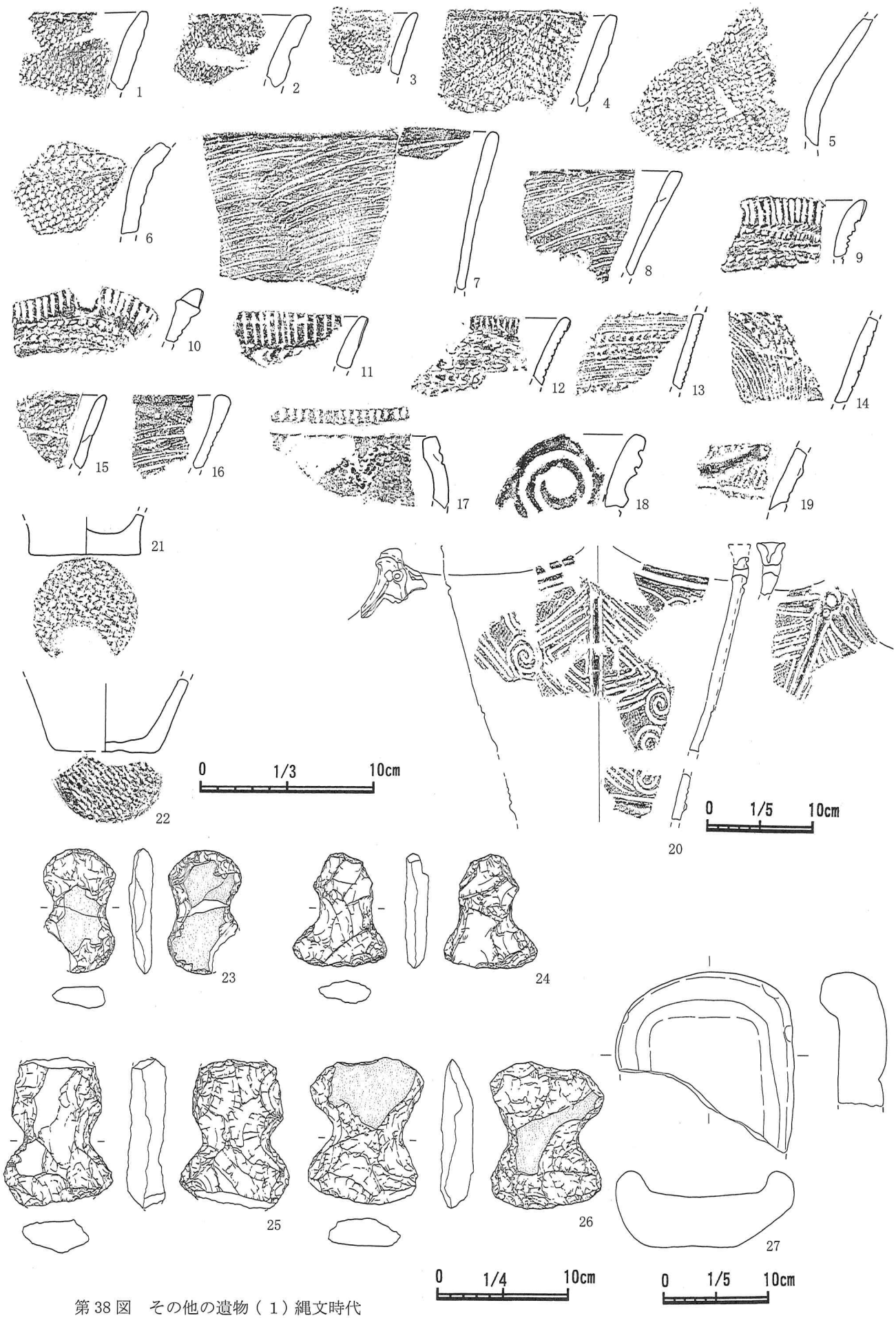
遺構（第37図、図版20）　調査区の中央部西寄り、5・6BGrに所在する。４号墳の墳丘下に位置し、東約1.5ｍにSK-22、南約3.5ｍにSK-23、西約2.5ｍにSK-24、北東約7.5ｍにSK-04などが隣接する。

平面は、南北約3.8ｍ、現存東西長約2.6ｍの隅丸円形に幅30～35㎝、深さ８～15㎝程の溝が廻るもので、東に0.7×0.7ｍの張り出しがあり南西部は確認できなかった。付近に小穴などは見られるが、本跡に伴うものと判断し得る小穴や床面、火処などは認められなかった。

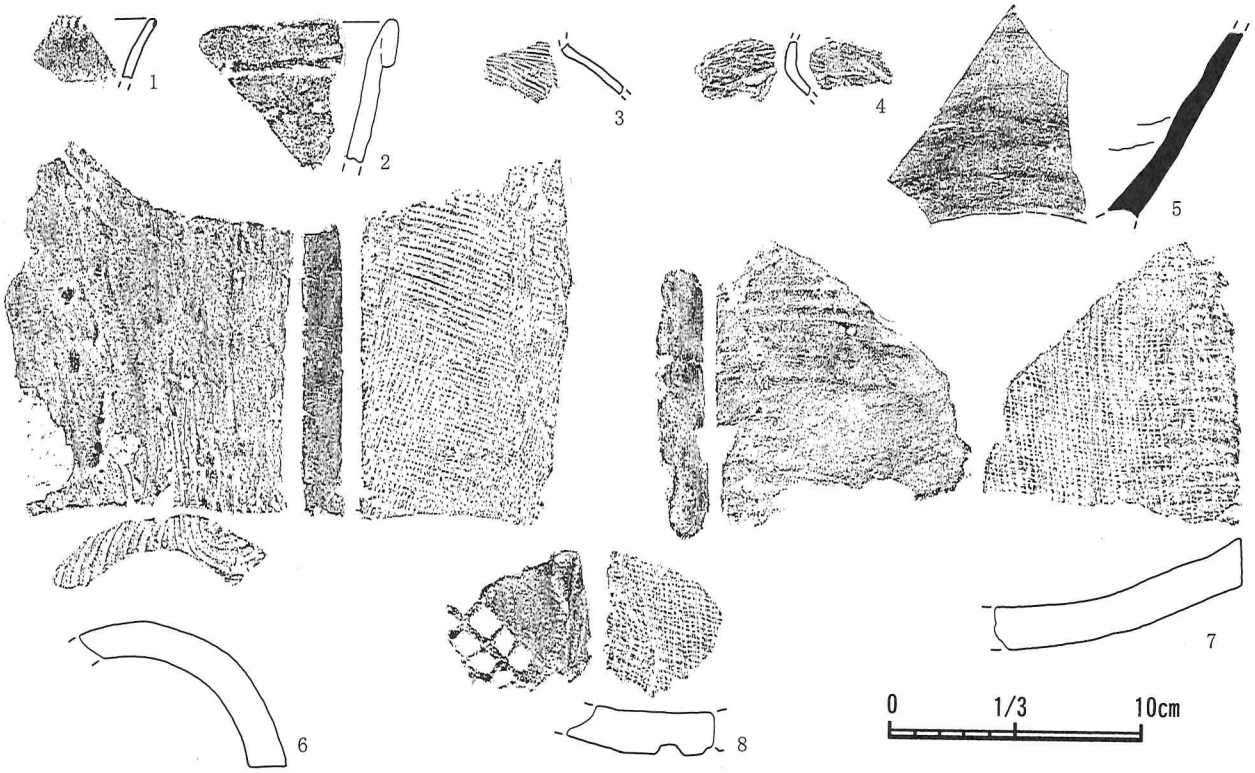
遺物の出土は無く、確認面や溝部分の埋積土から該期の遺構と判断したが、性格は不明といわざる得ない。



第37図　その他の遺構（2）SX-01・02



第38図　その他の遺物（1）縄文時代



第 39 図　その他の遺物（２）古墳時代以降

７．その他の出土遺物（第 38・39 図、図版 25、第８～ 10 表）

調査区内の表土、古墳の周溝や封土中より縄文時代前期から奈良時代にわたる土器や石器が少量出土した。縄文土器は、前記の黒浜式、浮島式、興津式、中期の阿玉台式、加曾利Ｅ式、後期の堀之内式の土器、打製石斧、石皿などが出土した。これらは調査区全域にわたって散在したが、後期堀之内Ｉ式の大型の破片（第 38 図 20）は斜面下方の３号墳の墳丘下より出土し、付近に関連する遺構が存在した可能性も否めない。

また、古式土師器（第 39 図１～４）片も僅かながら認められた。さらに、東海系と見られる須恵器壺（第 39 図５）や古瓦（同６～８）も出土している。殊に古瓦は調査区の東方約 60 ｍに上戸祭大塚瓦窯跡が確認されており、瓦窯跡との関連が注目される。

第７表　壙穴・１号墓出土遺物観察表

（　）推定値［　］現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
1 SK06-1	土師器 坏	口径　15.0 口径　6.6 底径　—	90%	紐作り、口辺部内外面横ナデ、内面ナデ後ミガキ、底部外面削り後ミガキ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 黒色・浅黄橙色	整地土
2 SK10-1	須恵器 蓋	口径　15.8 器高　4.3 底径　—	完形	ロクロ整形、甲は削り、ツマミ周囲はナデ	胎土　粒混 焼成　良 色調　内外 灰色	前面 体部外面にヘラ記号
3 SK10-2	須恵器 坏	口径　13.8 器高　4.4 底径　8.0	80%	ロクロ整形、底部外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 灰色	前面 外面にヘラ記号
4 SK18-1	土師器 甕	口径　(15.8) 器高　28.4 底径　(7.6)	80%	輪積み、口辺部内外面横ナデ、体部外面削り、内面ナデ、底部外面磨滅	胎土　砂粒・粗砂粒混 焼成　不良 色調　内外 浅黄橙色	前面 内外面にカーボン付着、体部下半被熱
1号墓 1	土師器 坏	口径　(13.6) 器高　— 底径　—	30%	紐作り、口辺部内外面横ナデ後ミガキ、底部外面削り、内面ナデ後ミガキで黒色処理	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒色、外 黒色・灰白色	旧 SK-01 埋積土

第８表　その他の出土土器（縄文）観察表

（　）推定値［　］現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
1	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	縄文	胎土　白色粒混・繊維混 焼成　良 色調　内外 にぶい赤褐色	1号墓拡張部包含層 前期黒浜式
2	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	縄文	胎土　砂粒混、繊維混 焼成　良 色調　内外 灰黄褐色	SZ-3周溝北東埋土 前期黒浜式
3	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	縄文	胎土　微砂粒混・繊維混 焼成　良 色調　内 にぶい橙色、外 明褐色	SZ-3墳丘包含層 前期黒浜式
4	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	縄文	胎土　微砂粒混・繊維混 焼成　良 色調　内外 明黄褐色	SX-01-1 埋土下層 前期黒浜式
5	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	羽状縄文	胎土　白色粒混、繊維混 焼成　やや良 色調　内外 灰白色	SZ-4墳丘封土 前期黒浜式
6	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	縄文	胎土　微砂粒混・繊維混 焼成　良 色調　内外 にぶい黄橙色	SZ-3墳丘東裾包含層 前期黒浜式
7	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	半截竹管による平行沈線文	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 浅黄橙色・褐灰色、外 橙色・褐灰色	SZ-3墳丘南表土 前期浮島式
8	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	半截竹管による平行沈線文	胎土　微砂粒混 焼成　良 色調　内 橙色、外 褐灰色	SZ-5墳丘南西封土 前期浮島式
9	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	刻み目の波状口辺に押引き文	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 橙色	SZ-3周溝北東埋土 前期興津Ⅰ式
10	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	刻み目の波状口辺に押引き文	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 橙色	SZ-3周溝北東埋土 前期興津Ⅰ式
11	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	短沈線と半截竹管文	胎土　微砂粒混 焼成　良 色調　内外 橙色	SZ-3墳丘東裾包含層 前期興津Ⅰ式
12	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	刻み目と半截竹管文	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 にぶい橙色　外　灰黄褐色	SZ-3周溝東埋土 前期興津Ⅰ式
13	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	半截竹管による平行沈線と押引文	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 浅黄橙色、外 にぶい黄褐色	SZ-3南東表土 前期興津Ⅰ式
14	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	半截竹管竹簡による平行沈線と押引文	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 橙色、外 灰黄褐色	SZ-3南東表土 前期興津Ⅰ式
15	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	縄文	胎土　白色砂粒混 焼成　良 色調　内 浅黄橙色、外 黒色	SZ-3墳丘包含層 前期
16	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	集合沈線に縄文	胎土　砂粒混 焼成　やや良 色調　内 橙色、外 褐灰色	SZ-5墳丘南東封土 前期
17	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	半截竹管文	胎土　砂粒混・雲母混 焼成　やや良 色調　内 灰白色、外 明黄橙色	SZ-3墳丘包含層 中期阿玉台式
18	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	隆帯と沈線による渦巻き文	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内外 にぶい橙色	SZ-3周溝東埋土 中期加曽利Ｅ式

第８表　その他の出土土器（縄文）観察表

（　）推定値［　］現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
19	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	断片	縄文に隆帯文	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 灰白色、外 黄橙色	SZ-3 墳丘包含層 中期加曾利Ｅ式
20	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　—	大型破片	波頂部から垂下する隆帯の間を沈線文により連結し、全体に縄文を施文	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 浅黄橙色、外 明黄褐色	SZ-3 墳丘包含層 後期堀之内Ｉ式
21	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　6.4	断片	底部外面編目痕	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 橙色	SZ-5 墳丘包含層 後期
22	縄文土器 深鉢	口径　— 器高　— 底径　(5.8)	断片	底部外面編目痕	胎土　粗砂粒混 焼成　良 色調　内 白灰色、外 橙色	1 号墓墳丘表土 後期

第９表　その他の出土遺物（石器）観察表

（　）推定値［　］現存値

No.	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	遺存度	石　質	出土位置	備　考
23	打製石斧１	9.4	5.6	1.7	100	80%	砂岩	1 号墓墳丘下一括	
24	打製石斧２	8.6	7.2	1.7	94	100%	砂岩系安山岩	SZ-3 包含層	
25	打製石斧３	11.0	8.4	3.4	258	100%	砂岩系安山岩	SZ-5 墳丘封土一括	
26	打製石斧４	[10.9]	8.3	2.8	324	80%	ホルンフェルス	SZ-5 墳丘封土一括	
27	石皿	—	17.2	7.5	1705	50%	安山岩	SZ-4 包含層	

第 10 表　その他の出土遺物（土師器・須恵器・瓦）観察表

（　）推定値［　］現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
1	土師器 甕	口径　— 器高　— 底径　—	断片	口辺部内外面ナデ、口唇に刻み目	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 にぶい黄橙色、外 橙色	南東表土
2	土師器 壺	口径　— 器高　— 底径　—	断片	内外面ナデ、折り返し口辺	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 橙色、外 褐灰色	SZ-5 墳丘南東封土
3	土師器 壺	口径　— 器高　— 底径　—	断片	輪積み、体部外面ハケ目、内面ナデ	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内外 にぶい黄橙色	SZ-3 南東表土
4	土師器 壺	口径　— 器高　— 底径　—	断片	口辺部外面横ナデ後ミガキ、体部内外面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　内 黒褐色、外 褐色	墳丘北西封土
5	須恵器 壺	口径　— 器高　— 底径　—	断片	ロクロ整形、体部外面の下位横の削り	胎土　黒色粒混 焼成　良 色調　内外 灰白色	調査区表土一括
6	瓦 男瓦	口径　— 器高　— 底径　—	断片	凹面に布目、凸面はナデ、小口面に糸切痕、側端部は１面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　凹凸 橙色・黒褐色	SK-06 埋土上層
7	瓦 女瓦	口径　— 器高　— 底径　—	断片	凹面に布目、凸面はナデ、側端部は１面削り	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　凸 明黄褐色、凹 灰白色	SZ-3 東方表土
8	瓦 女瓦	口径　— 器高　— 底径　—	断片	凹面に布目、凸面に格子目叩き	胎土　砂粒混 焼成　良 色調　凸 灰白色、凹 明黄褐色	SZ-4 墳丘表土

Ⅲ　総括

1．土地利用の変遷

今次調査は本報告書の書名の如く、古墳群にその主眼を置いたものであるが、調査の過程で得られた知見を基に、当地の土地利用の変遷を以下に記す。遺跡名の後（　）の数字は第３図、第１表と共通する。

縄文時代　今次調査区では、土坑６基、集石遺構１、性格不明遺構２基を調査し、前期～後期にわたる土器の他、打製石斧や石皿などの石器が出土した。土坑のうちSK-04・16・22は規模・形状から所謂「陥穴」と呼ばれるもので、斜面上方の16から04・22とほぼ直線に並び、それぞれの間隔は17ｍと7.5ｍであったことから16と04の間にさらに１基の存在を想定して精査したが確認されなかった。これらは、遺物の出土は無いが形状などから縄文時代早期の所産と推察される。また、当地は遺物の出土量や確認した遺構の状況から定住の地では無く、生産活動の場として利用されていたと考えられる。

なお、近隣の縄文時代の遺跡を見ると、東方約400ｍに松ヶ丘遺跡（20）、同約1.4㎞に田向遺跡（23）、西方約１㎞に北の前遺跡（21）、北西方約1.2㎞に北原遺跡（16）、上戸祭中島遺跡（17）、北東約0.8㎞に百穴裏遺跡（14）などの存在が知られるものの、調査例に乏しくその実態は明確でない。

古墳時代　該期の集落跡は西方約400ｍの前田遺跡（22）、同500ｍの北の前遺跡（21）、北西方約1.2㎞の北原遺跡（16）、上戸祭中島遺跡（17）、北方約0.8㎞の百穴裏遺跡などがある。このうち、大規模な調査が行われた前田遺跡では161軒（文献10）、北の前遺跡では３次にわたる調査で110軒（文献16・27）の古墳時代後期～平安時代の住居跡が調査された。その結果、本格的に集落が形成されるのは北の前遺跡が６世紀末葉、前田遺跡は７世紀中葉以降とされる。両遺跡は推定面積の２分の１程が調査されており、残りの部分で上記の状況が大きく変わることはないと思われる。とするならば、本古墳群の２～５号墳が６世紀中葉～後半代と考えられることから古墳を築造した人々の集落をどこに求めるべきか今後の課題といえよう。

また、宇都宮丘陵の古墳に目を向けると第Ⅰ章第２項に記した如く多数の古墳群が所在し、その多くは古墳時代後期～終末期にかけて築造されたことが知られる。墳形は前方後円墳と円墳があり、円墳が大多数を占める。しかし、その中で本古墳群の大塚古墳は、全長62ｍと推定される前方後円墳の御蔵山古墳（31）を除けば円墳ながら他の前方後円墳の規模を上まわり特異な存在である。なお、周辺の古墳群ではその群の盟主的な存在の古墳は概ね埴輪の樹立が見られるのに対し、大塚古墳にはそれが見られない。

また、単独の大型円墳と誤認されたり、墳丘の築成法や石室の形態を加味し、７世紀代の築造と見るむきもある（文献15・24）。これまでは、本古墳群内の他の古墳が調査されておらず違和感を覚えなかったが、周辺の古墳がいずれも６世紀代の築造と推定されるのに、その中心の最高所に占地する大塚古墳がこれらより数十年遅れて築かれたと見るのは疑問に思われる（注）。

古墳の周溝内及びその周辺より壙穴と考えられる土坑を16基確認した。遺物が出土したものは極僅かで時期は限定し難いが、その多くは所謂「側壁抉込土坑」であり、古墳の築造後～奈良時代にかけての所産と見られる。

奈良時代　この時代の遺構としては、１号墓とSK-10が上げられる。１号墓については前章で記した如く「墓」とするには今一つ決め手を欠く。しかし、逆にこれは何かと問われても答える術が無いのが現状であり不明遺構とすべきかもしれない。類例の増加を期待して今後の課題とした。次に、周溝内埋葬の壙穴であるSK-10は、周溝の埋没途中に抉り込まれたもので、その前面より打欠いて散布したと見られる状態で須恵

器の蓋と坏が出土している。本跡はこれらの土器から８世紀代の所産と判断され、散見される同種の遺構の中には該期のものが存在する可能性が高いが、遺物を伴わずそれを抽出することは出来なかった。

さらに、調査区内からは遺構に伴わないものの古代瓦が数片（SK-10 の前面からも細片）出土している。おそらくは、調査区の東方約 60 ｍの上戸祭大塚瓦窯跡（19）の製品と考えられる。この窯の製品は下野薬師寺に供給されたもので、前記の前田遺跡からも多数出土したことから、この窯の操業に関わった人々の集落と考えられている（文献 10）。

中・近世　今次調査区内では遺構・遺物とも確認されなかった。しかし、調査区の東方約 30 ｍに所在する２号墳ではかわらけや渡来銭が出土しており、かわらけが墳頂部付近にまとまって出土したことから、この古墳を信仰の対象としていた可能性を指摘する。北方約 800 ｍに所在する県指定史跡の横穴墓「長岡百穴古墳」（13）では玄室の奥壁に仏像が彫られ信仰の対象とされていたものがある（文献２）。他の古墳群でも転用は多く見られる。しかし逆に、破壊して石材を取り出す例も多く見受けられる。その代表例として壬生町の桃花原古墳が上げられる。直径約 63 ｍの三段築成の円墳で、周溝を含めた直径は 90 ｍを超えると推定される。この古墳の石室は凝灰岩の巨石を使用していたが、後世の人々がこれを破壊して石材を取り出し、石塔類に加工したことが発掘調査によって明らかとなった。事実石室内には半製品の石塔類が多数残されていた（文献 20）。筆者がかつて担当した、上三川町西赤堀狐塚古墳においても後円部に構築された石室の上部が破壊されていた。側壁は河原石小口積みであるが、奥壁は凝灰岩で天井石も凝灰岩と推察され、天井石は全て無く、奥壁も上部は持ち出されていた。さらに奥壁下部も割って取り出そうとして中央に切り込みが入れられてあった（文献８）。類似の痕跡が５号墳の奥壁にも残されており、この古墳も石材盗掘の為に大規模に破壊されたと考えられる。その時期を知り得る遺物などは遺存せず明確にし難いが、中世末～近世の行為と推考する。

２．古墳群・古墳について

古墳群　今次調査区は、大塚古墳群Ｂ区として３～５号墳について報告するものである。Ａ区は、平成 20 年に東方約 30 ｍの地点で個人住宅の建設に伴って実施された、大塚古墳の南裾部と２号墳の調査である。

なお、大塚古墳は径 53.4 ｍ、高さ 6.2 ｍと県内でも指折りの大型円墳であることから昭和 32 年に県指定史跡となった。昭和 40 年に盗掘騒ぎがあり緊急調査が行われた。この成果は昭和 51 年刊行の『栃木県史』（文献１）に収録されている。その中に「周辺に 15 基程の小円墳が散在している」との記載があり、このうち８基は現在「大ジノ古墳群」（18）として登録される一群を指すと考えられる。残り７基のうち現在把握できているのは２～５号墳の４基である。大ジノ古墳群は現在も雑木林の中に当時と同じ状態で残るが、大塚古墳群は周辺の開発が進み大塚古墳を除きすべて失われてしまった。

昭和 58 年刊の『宇都宮の遺跡』（文献３）では「大塚古墳」は単独で、「大ジノ古墳群」は８基の円墳からなる古墳群として記載、平成９年刊行の『宇都宮市遺跡地図』（文献 14）もこれを踏襲する。しかし、昭和 58 年刊の『針ヶ谷新田古墳群』には「表６宇都宮市における主な後期古墳群」として「４．大塚古墳群、総数 12、～ 20 ｍ６、20 ～ 30 ｍ５、30 ｍ～１、円墳数基消滅」とある。さらに同書「表９宇都宮市における主な横式石室」には「11. 大塚古墳」の次に「12. 大ジノ６号墳、中略、開口大塚古墳群中」と記す（文献４）。当時は開口していたものも存在したようであるが、現在は８基の存在は確認できるものの、石室を見られるものは無い。県史の刊行から、７年後のことであり、この間に４基程消滅したものと思われる。

また、古墳群の立地を見ると（第２図）大塚古墳群は丘陵の南縁に占地し、最高所に大塚古墳があり、２

～５号墳は南斜面に連なる。大ジノ古墳群は大塚古墳の後（北）方のやや奥まった丘陵頂部からその南側傾斜地に所在する。本古墳群が６世紀代と考えられるのに対し、大ジノ古墳群には切石積の石室があったとされ、後出の古墳群と見ることが出来よう。大塚古墳のような大型円墳を擁する古墳群が僅か５基で構成されていたとは考え難く、立地から見て大ジノ古墳群も一体の古墳群と考えたい。

古墳　３基の古墳を調査したが、斜面上方の５号墳が径 27.5 m、中位の４号墳が 19 m、下位の３号墳が推定径 18 mと下がるに従い規模が小さくなる。ちなみに、過去に調査された２号墳は径 12.9 mとさらに小型であった。

いずれも斜面を巧みに利用した山寄式の形態を取り、墳頂部との比高が南と北で大きく異なる。
また、埋葬主体部は旧地表面より深く掘り込んだ掘方内に築かれた横穴式石室で、旧地表面上には天井石が露出する程度であった。このような構築方法から、封土の厚さも墳頂部で１m程と省力化され、周溝も幅２～３m、深さ 0.4 ～１mと狭くて浅い簡素なものであった。石室が失われていた３号墳も前述の通り近隣住民の話しから同様のものであったと考えられる。石室は玄室、羨道とも一体の掘方内に築かれていて、両者の床面の高低差は少ないが、墓道床面よりは大きく下がる。

石室はいずれも砂質凝灰岩を使用し、玄室奥壁は１枚石の鏡石を据え、側壁は加工度の高い割石（削石）を積み上げる。５号墳は全て凝灰岩であったが、４号墳は河原石が少量使用されていた。天井石は、４号墳が羨道１、玄室４の計５石が完存、玄門に楣石を設けない。５号墳は、玄室に原位置を離れたものが１石残存したのみで、羨道の天井石と見られるものが墓道脇、楣石と見られるものが墓道内に遺存していた。
これらから推定すると、羨道１、玄室５石の計６石と考えられる。ちなみに、大塚古墳は、長さ 5.17 mの玄室が３枚の巨石で覆われているという。石室の規模は、５号墳が全長 5.7 m、玄室が長さ 4.4 m、幅 0.97 ～ 1.4 m、羨道が長さ 0.6 m、幅 0.75 m、４号墳は全長 4.3 m、玄室が長さ 3.7 m、幅 0.95 ～ 1.25 m、羨道が長さ 0.9 m、幅 1.07 mである。平面形はともに両袖型で、玄門に柱状の石材を用い、その間に板状に加工した間仕切石（閾石）を据える。５号墳はその上に楣石を載せていたと考えられるが、４号墳は無かった。また、５号墳の門柱石は上部まで通しで用いられていたが、４号墳は短く下半部のみで、上半部は壁材をせり出して積みこれに替えていた。なお、４号墳は玄室の奥壁と接する付近の側壁をしぼり、胴張形を意識していると思われるが、５号墳はほぼ直角に接している。

側壁の石材は６面全体もしくは４～５面に加工が施されていることから、加工後に積み上げたことが判る。石材は硬度の違いによるものか、数種の加工痕跡が見られた。また、石材の積み方を見ると、４号墳の西壁根石のように大型の石材を用いる場合は平面を内側に向け掘方との隙間は裏込め材で固定する。また、直方体の石材を横置きにする場合と小口積みするものとがある。掘方の壁との間隔が近い場合には長い石材を小口積みすることは不可能であり横長に積み、持ち送りによって壁材と掘方の壁の間隔が出来ると用材を小口積みにしてその末端に裏込め材を載せて固定していた。さらに、裏込め材が長すぎる場合は、掘方の壁面を抉り込んで納めてあった。側壁の持ち送りが強い５号墳では側壁の中・上位にこの積み方を多く見られたが、調査時には壁材が中程で割れていて裏込めが用を成さない状態であった。また、割石積みの場合、乱石積みという表現を目にするが、４・５号墳では水平に走る目地が複数認められることから、一定の高さに揃えつつ積み上げた通目積みをしており乱石積みにはあたらないと考えられる。

埋葬面は、４号墳は径４～ 15 cm程の礫を敷詰めてあったが、５号墳は掘方の底面上に 15 cm程の厚さで凝灰岩片混じりの黄褐色が見られたものの、礫敷やタイル状の敷石は一石も認められなかった。敷石が破壊されたのであろうか。

羨道は前記のように短いもので、主に閉塞に利用されていた。５号墳は玄門の間仕切石の上にそれよりやや小振りの板状の石を積み上げて閉塞し、その外側に河原石と凝灰岩のブロックを積み上げて閉塞材を抑えていた。なお、５号墳では羨門付近に多数の人頭大の河原石が散在していたが、壁に河原石を使用していなかったことからこれらはすべて閉塞材であったと推定される。４号墳では羨門からその奥に河原石を積み上げて閉塞してあったが、追葬などによってその上部だけが開けられていた。その後はこの外側に長さ1.5ｍ、径0.5ｍの大振りな凝灰岩を据えて、その両脇と上に河原石を積み上げてあったが、この上部も開けられていた。

今回の調査では遺構の遺存状態の割に副葬品の出土量が少なく、４号墳よりガラス小玉５点、耳環５点、刀子１点であった。しかし、墳丘下や周溝内より土師器がまとまって出土した。３号墳では墳丘東裾の封土下層より坏が80点以上、４号墳は墳丘南西部より高坏４点、坏３点、５号墳で周溝南東の底面より坏が30点まとまって出土した。このうち、４号墳については通常の墓前祭的行為の所産と思われるが、３・５号墳の場合は古墳の築造に関する儀礼に伴うものと考えられる。特に３号墳の場合は80個以上と多量であり、それが周溝や前庭部に廃（投）棄されたのでは無く封土下に埋め込まれていたという点では市内でも希有な事例であろう。５号墳周溝の30個は１人１個で30人程が関わったのかと単純に推定するが、３号墳の場合は80人以上の人が参加して集まったのか、１人２個で計40人、１人３個で27人程であったのか興味深い。なお、４号墳出土のものは一般に集落跡から出土するような通常の仕上げで使い減り感のあるものであったが、３・５号墳のものはやや粗製のものである。他の古墳でも前庭部などからまとまって出土する坏類に同様の傾向が見られ、現在の紙コップ、往時のかわらけ的な存在と考えられる。

以上から、今回の３基では５号墳が古く、その後４号墳が築造されるが、３号墳は封土中の土器から４号墳より前に築造の可能性をもつ。６世紀後半の中頃～後葉の築造と考えられ、大塚古墳はこれらに先行するが２号墳はこれらに近い時期と推定される。

３．１号墓及び壙穴群について

１号墓　径5.6×７ｍの不整円形に廻る溝の西端に0.9×２ｍの長方形の土坑が付随する遺構で、西側の土坑（壙）を埋葬部と推定した。この土坑は内部に多数の炭化材が遺存するとともに、壁面には火熱による赤化が見られ、内部で火が使用されたと判断される。また、溝部の埋積土に炭化物粒が混じり、溝の北側の底面に炭化材の遺存が認められたことから、両者は一体の遺構と考えた。なお、溝の区画内には何らの遺構も確認できなかった。土坑内からは炭化材以外に出土したのは土師器坏が１点（約２分の１）のみである。しかし、火葬墓・火葬場とした場合は若干なりとも白色化した火葬骨片が遺存すると思われるが本跡ではそれが皆無であった。

その点が本跡の名称を用いることに幾分の躊を感じるところである。

壙穴群　後期古墳群の調査を行うと、古墳の周溝内やその周辺より各種の土坑（壙）が確認される。副葬品と判断される遺物が伴う場合も希にあるが、大多数は遺構のみであり、形状や分布状態から古墳時代～奈良時代にわたる埋葬施設と考えられている。

今次調査区では計16基の土坑が確認されたが、SK-21は周溝外壁では無く墳丘裾に掘り込まれている点や形状から異なる性格の可能性をもつ。残り15基のうち、SK-10・11は４号墳、SK-06・12・18・19は５号墳の周溝外壁に直接あるいは接して掘り込まれた「周溝内埋葬」である。３号墳の残存部には認められなかったが、Ａ区の２号墳では周溝北壁に１基設けられていた。古墳の被葬者と密接な関係にあった者の奥津城と

考えられる。他の９基は古墳と古墳の空間地に設けられたものであるが、これらも近接する古墳の被葬もしくは造営した集団と濃密な関係にあった者と推察される。

その形状を見ると、SK-06、１号墓（旧 SK-01）のように抉り込みを持たないもの（Ⅰ）と、抉り込みのあるもの（Ⅱ）に分類され、後者が大部分を占める。また、後者は SK-02・14 のように深さ 40 ～ 50 cmと非常に浅いものや、SK-05・07・20 のように深さ１～ 1.2 mと深く確り掘り込まれたものもある。さらに、（A）竪坑の底面が深くこれより浅い位置に横坑を設けたもの（SK-07・20）、（B）竪坑と横坑の底面が同じ高さのもの（SK-03・04・08）、（C）竪坑より横坑の底面が深いもの（SK-02・04・09 ～ 14・18・19）に大別される。周溝内のもののうち、SK-10 ～ 12・18 は横口の開口部より横坑の底面が深いため（C）に含めた。

市内の調査事例を見ると、多数調査されているものの、やはり副葬品を伴うものは少ないようであるが、管見に触れたものを以下に記す。（遺構の名称は各報告書順ずる。）

1．東谷・中島地区遺跡群　琴平塚古墳群では 14 基の古墳と土壙墓６基が調査され、５号墳墓壙２より耳環１点、６号墳墓壙２と８号墳墓壙１の縁辺より須恵器坏や高坏が出土（文献 19）。

2．聖山公園遺跡　将軍塚古墳では周溝内の土坑１内より臼玉１点、土坑８の付近より土師器坏２、短頸壺１点、臼玉１点出土。聖山公園６号墳土坑１より刀子１、鍔１、轡１、直刀２振が出土（文献５・７）。

3．本村古墳群（平成 18 年度、３・５・６号墳調査）　10 数基の土坑が調査され、３号墳周溝内の SK-17 より耳環１点、５号墳周溝内の SK-12 の横坑部より土師器坏が１点出土（文献 21）。

4．西刑部町、根本西台古墳群　３次にわたる調査で古墳 23 基、土壙墓 40 基以上を調査。５号墳周溝内の SZ-08 よりガラス小玉が５点出土（文献 22・23・25）。

単独の場合に比べ周溝内の施設に副葬品が多いように見られる。なお、南に隣接する上三川町多功南原遺跡の側壁抉込土坑 SK-727 では人骨が出土し、その出土状態から再葬の可能性が指摘される（文献 18）。このことから、琴平古墳群の報告者は５号墳墓壙２より出土の耳環が本来２個１対であるべきところが１点のみであり、多功南原遺跡の例を加味し、再葬の可能性を指摘する。本村古墳群の場合も横坑内から１点だけの出土で同様の見方ができよう。また、南西に隣接する壬生町新郭古墳群では古墳の周溝のみならず先行する竪穴住居跡内に設けられ、SK-202 からは刀子１、鉄鏃１、土師器坏２点などが出土している。この調査では複数の土坑の埋積土についてリン・カルシウム分析を行ったが、積極的に墓壙とみなす結果は得られなかったようである（文献 17）。

確かに一括して壙穴と呼んではいるが、遺骸を納める横坑部分の規模を比較すると約 0.25 ㎡～ 1.4 ㎡と様々で 0.6 ～ 1.2 ㎡のものが多い。中・近世の横臥屈葬の土葬墓で棺に納めないものでは 0.6 × 0.9 mの 0.54 ㎡位のものが多いが、横坑に納める場合はもう少し余裕が必要となろう。とすれば多くは一応の条件は満たしていることになるが、現段階では単純埋葬、再葬の双方の存在を考えたい。

今回の調査事例で特筆すべきものとして、周溝内に設けられた SK-06・10・18 がある。SK-06 は抉り込み土坑では無く、1.63 × 3.07 mの楕円形で深さ 0.8 mの大型の土坑で、５号墳の周溝北東部の外壁を切って設けられていた。周溝の調査時に、埋積中よりローム土主体の層が確認され、いかなる事情によるものか判断に苦慮した。調査の進捗に伴い SK-06 が確認され、その掘削残土を周溝内に敷詰めた事が判明した。この土坑内より遺物の出土は無かったが、周溝内のローム土中より完形の土師器坏が１点出土した。ローム土上面では無く、層中にあった点は疑問が残るが、古墳に伴うものでは無く、本跡に伴うものと考えられる。

次に、SK-10 は４号墳の周溝の北東外壁に設けられたもので、06 号と同様に埋積土中程にローム土主体の

層があり、そこから須恵器蓋、坏の破片が散乱状態で出土した。須恵器は蓋、坏各１点づつの破片が散在したものであることが判明した。これもSK-10の前面にあたり、本跡の遺物と判断した。

最後にSK-18は、５号墳の周溝東側底面よりほぼ完形の土師器甕が出土し付近を精査して確認された。前記の二者は周溝に埋積土が存在する状態でローム土の整地が行われていたが本跡は周溝底面に土器を供えてあった。横坑もそこから東下方に向って抉り込まれており、古墳の完成後あまり時間を経ずに設けられたと判断された。出土遺物から、SK-06・18は６世紀後葉、SK-10は８世紀前葉と考えられる。従って、遺物の出土しなかった他の土坑についても同様の時間幅をもって構築されたと推察される。

本書の上梓にあたり、調査に対してご理解を賜りました事業主のオフィス永瀬有限会社 代表取締役永瀬昌弘氏をはじめ、調査・報告書作成についてご助力とご指導を賜りました関係各位及び機関に感謝申し上げるとともに、当地にねむる古代人の霊の安らかなることを念じ擱筆する。

※注　本書の脱稿後市橋一郎博士より、大塚古墳及び３～５号墳の年代観についてご教示を賜った。現地の視察の結果、５号墳は６世紀後半の中葉、４・３はこれより後続、大塚古墳はこれらに先行すると見るのが妥当であろうとのご意見を賜った。

参考・引用文献

1．1976 『栃木県史』資料編・考古一　栃木県

2．1979 『宇都宮市史』第１巻　宇都宮市

3．1983 『宇都宮の遺跡』 宇都宮市埋蔵文化財報告第10集　宇都宮市教育委員会

4．梁木　誠他　1983 『針ヶ谷新田古墳群』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第11集　宇都宮市教育委員会

5．梁木　誠他　1985 『聖山公園遺跡Ⅲ』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第18集　宇都宮市教育委員会

6．塙　静夫他　1986 『瓦塚古墳群・日満遺跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第19集　宇都宮市教育委員会

7．梁木　誠他　1986 『聖山公園遺跡Ⅳ』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第21集　宇都宮市教育委員会

8．大川　清他　1987 『西赤堀狐塚古墳』 ㈱日本窯業史研究所

9．仲山英樹　1990 「研究ノート　地下式土坑墓の一様相」『栃木県考古学会誌』第12集　栃木県考古学会

10．梁木　誠他　1991 『前田遺跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第29集　宇都宮市教育委員会

11．仲山英樹　1992 「古代東国における墳墓の展開とその背景」『研究紀要』１　㈶栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

12．梁木　誠・今平利幸　1995 『久部愛宕塚古墳　谷口山古墳　御蔵山古墳』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第37集　宇都宮市教育委員会

13．安藤美保・篠原睦美　1995 「方形周溝と側壁抉込土坑の概観」『第５回東日本埋蔵文化財研究会　東日本における奈良・平安時代の墓制－墓制をめぐる諸問題－＜第Ⅳ分冊　問題点の整理－総括討議に向けて＞』 東日本埋蔵文化財研究会栃木大会準備委員会

14．1997 『宇都宮市遺跡地図』 宇都宮市教育委員会

15．大橋泰夫　1997 「下野の横穴石室と前方後円墳」『第２回東北・関東前方後円墳研究大会　シンポジウム横穴石室と前方後円墳　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会

16．今平昌子　1998 『北の前遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第252集　栃木県教育委員会、㈶とちぎ生涯学習文化財団

17．内山敏行他　1998 『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第214集　栃木県教育委員会、㈶栃木県文化振興事業団

18．山口耕一他　1999 『多功南原遺跡Ⅰ～Ⅲ』 栃木県埋蔵文化財調査報告第222集　栃木県教育委員会、㈶栃木県文化振興事業団

19．中村享史　2004 『東谷・中島地区遺跡群　琴平塚古墳群　西刑部西原遺跡１・２・６地区　４』 栃木県埋蔵文化財調査報告第283集　栃木県教育委員会、㈶とちぎ生涯学習文化財団

20．君島利行　2006 『桃花原古墳』 壬生町教育委員会

21．三輪孝幸他　2007 『本村古墳群・本村遺跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第58集　宇都宮市教育委員会

22．水野順敏他　2008 『みずほの台遺跡群』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第68集　宇都宮市教育委員会

23．水野順敏他　2008 『みずほの台遺跡群Ⅱ』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第69集　宇都宮市教育委員会

24．市橋一郎　2008 「栃木県における横穴式石室の研究」『専修総合科学研究』第16号

25．水野順敏他　2009 『みずほの台遺跡群Ⅲ』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第73集　宇都宮市教育委員会

26．大塚雅幸・今平利幸　2011 『八幡山古墳群１号墳・大塚古墳群』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第77集　宇都宮市教育委員会

27．水野順敏　2013 『北の前遺跡（Ｂ区）』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第82集　宇都宮市教育委員会

Ａ．調査区全景（北空中より）

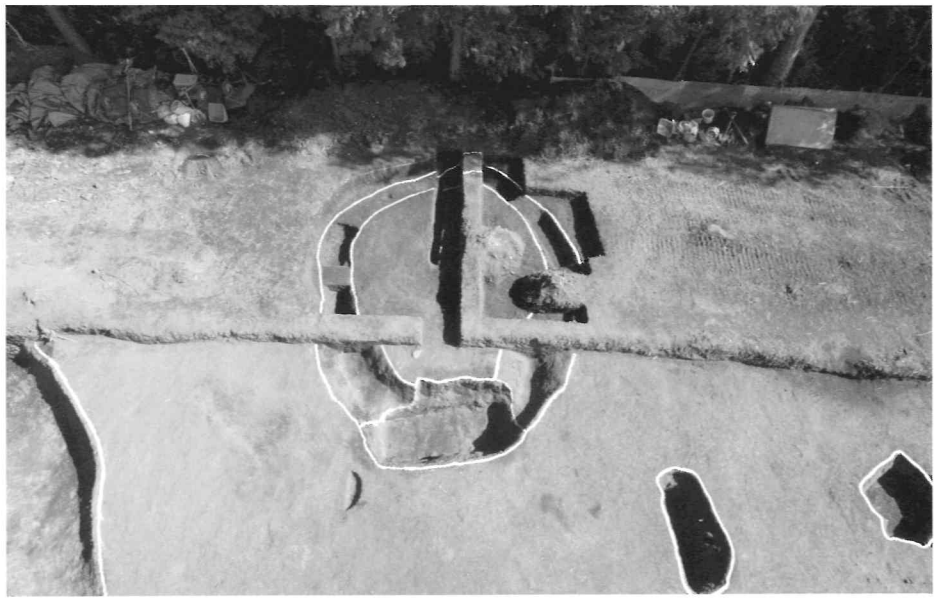
Ｂ．調査区全景（真上空中より）

図版２

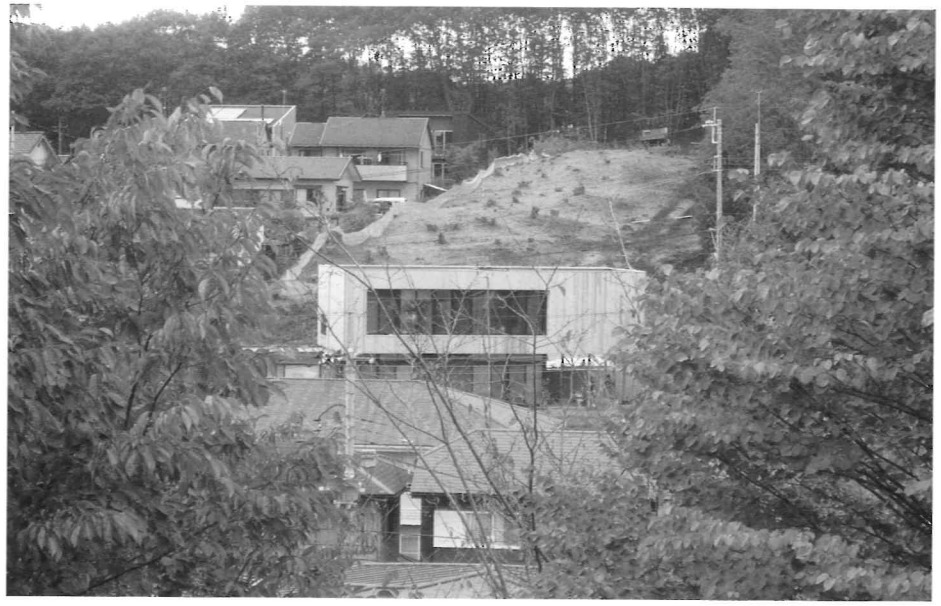
Ａ．３号墳全景（東空中より）

Ｂ．４号墳全景（南空中より）

Ｃ．５号墳全景（南空中より）



Ｄ．１号墓全景（西空中より）



Ａ．調査前遠景（南東より）

Ｂ．調査前全景（北東より）

Ｃ．調査区遠景（南東より）

Ｄ．調査区近景（南より）

図版３

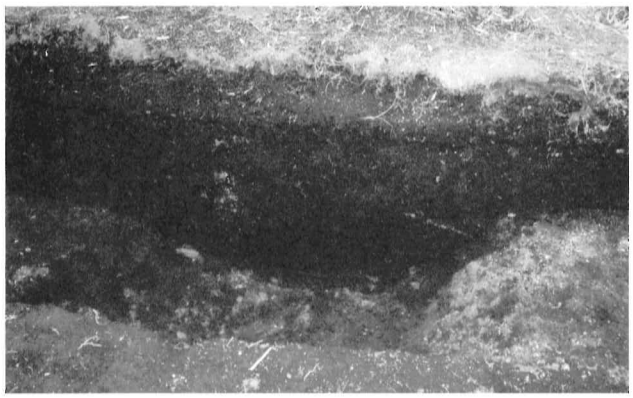
図版４

Ａ．３号墳調査前全景（東より）

Ｂ．同前全景（北東より）

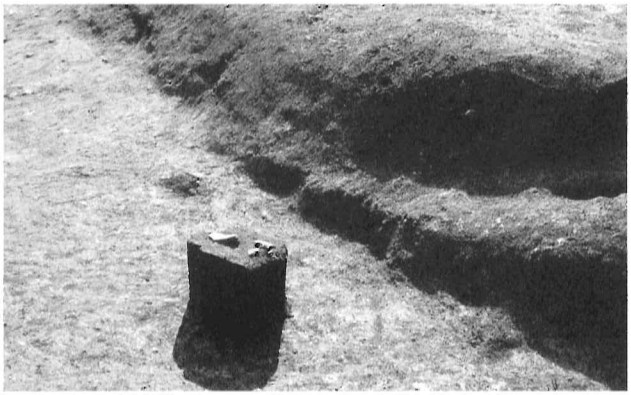
Ｃ．同前周溝南（北東より）

Ｄ．同前周溝北（東より）

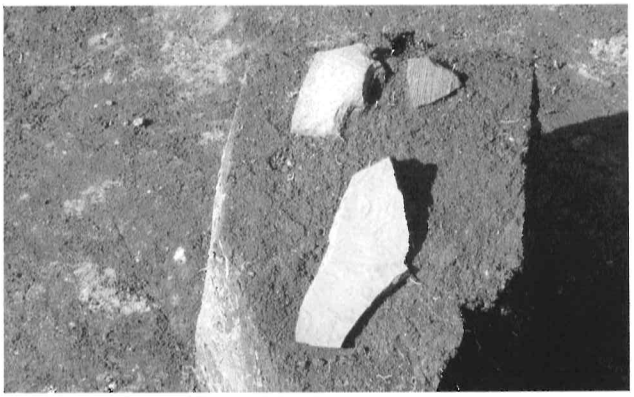


Ｅ．同前北周溝西土層（東より）

Ｆ．同前周溝東土層（南より）

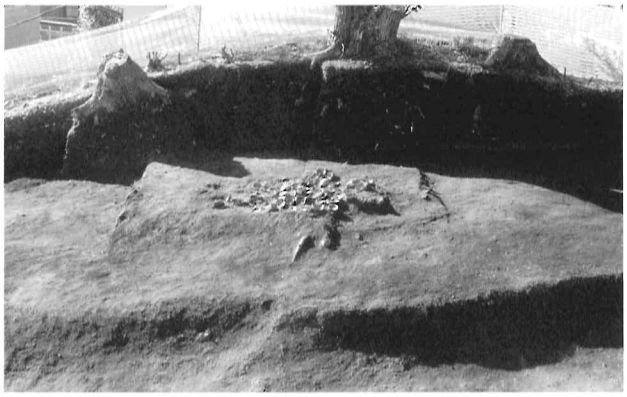


Ｇ．同前周溝内土器（北より）



Ｈ．同前近接（南より）

Ａ．３号墳封土東西土層（南より）



Ｂ．同前墳丘東封土中の土器群（東より）

Ｃ．同前（東より）

Ｄ．同前（北より）

Ｅ．同前土器群下層土層（東より）

Ｆ．同前旧地表面（東より）

Ｇ．同前縄文時代 確認面（西より）

Ｈ．同前墳丘下出土遺物（北より）

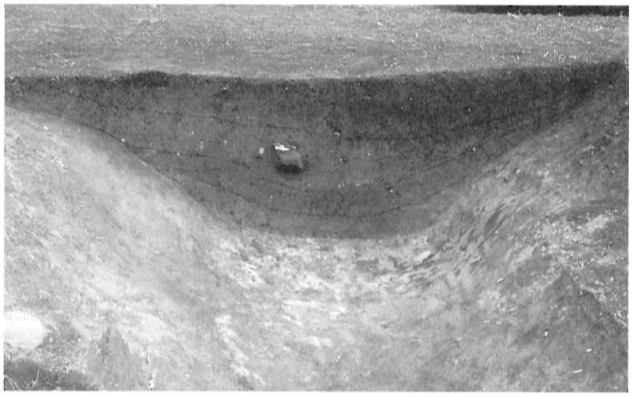
図版６

Ａ．４号墳調査前全景（南東より）

Ｂ．同前全景（南より）

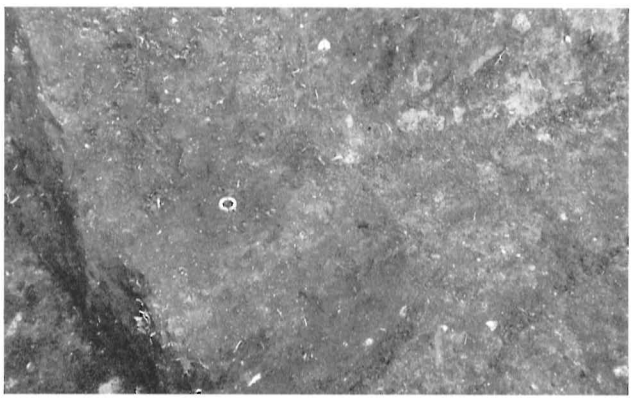
Ｃ．同前周溝北土層（東より）

Ｄ．同前周溝東土層（南より）

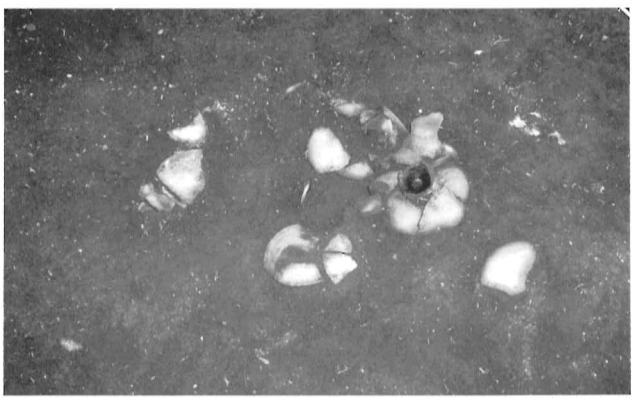


Ｅ．同前周溝北東土層（北西より）

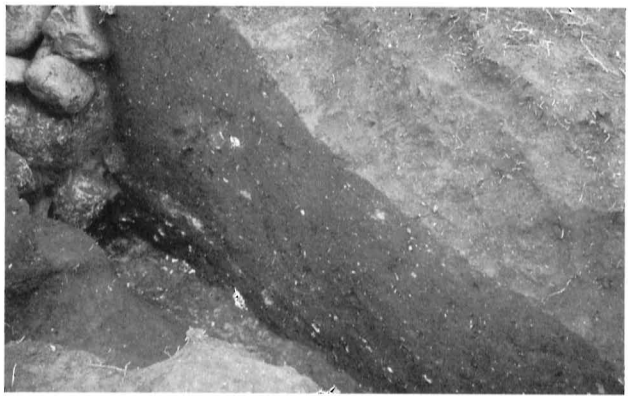
Ｆ．同前周溝南土層（東より）



Ｇ．同前周溝南　耳環出土状態（南より）



Ｈ．同前南側土器出土状態



Ａ．４号墳墓道南北土層（南西より）

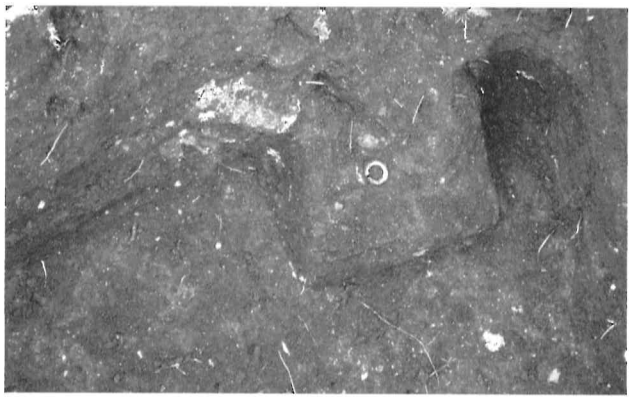
Ｂ．同前石室外側の閉塞状況（南より）

Ｃ．同前内側の閉塞状況（南より）

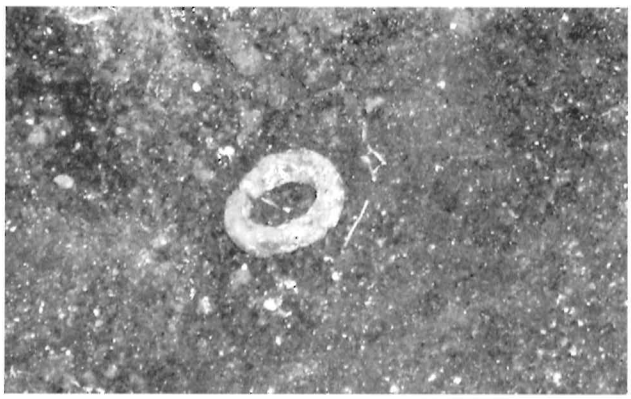
Ｄ．同前（西より）

Ｅ．同前羨門東脇の刀子出土状態（南より）

Ｆ．同前（南西より）



Ｇ．同前墓道の耳環出土状態（南より）



Ｈ．同前墓道西上部の耳環出土状態

図版８

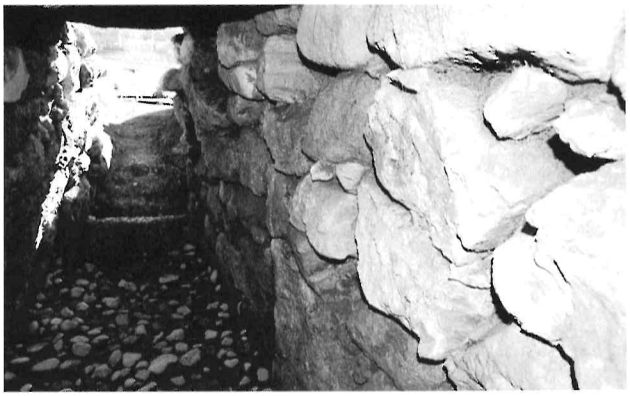
Ａ．４号墳石室近景（南東より）

Ｂ．同前石室北半部（南より）

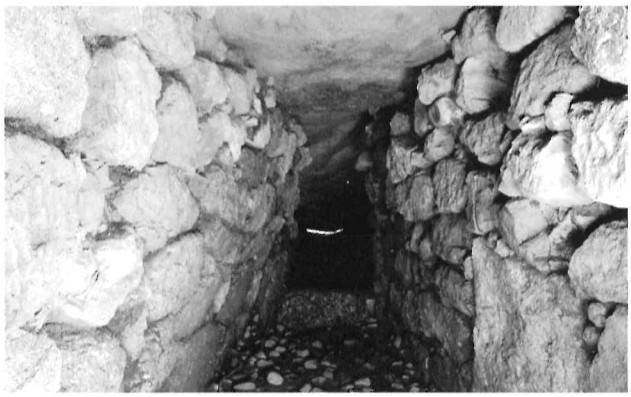
Ｃ．同前西壁（南東より）

Ｄ．同前東壁（南西より）

Ｅ．同前石室南半部（北より）



Ｆ．同前（北東より）



Ｇ．同前（北より）

Ｈ．同前天井石（北下方より）

Ａ．４号墳石室羨門（南より）

Ｂ．同前石室北半部（南より）

Ｃ．同前奥壁（南より）

Ｄ．同前天井石（南下方より）

Ｅ．同前天井・奥壁（南下方より）

Ｆ．同前奥壁（南より）

Ｇ．同前南半部（北下方より）

Ｈ．同前天井石（北下方より）

図版 10

A．４号墳墳丘東西封土土層（南より）

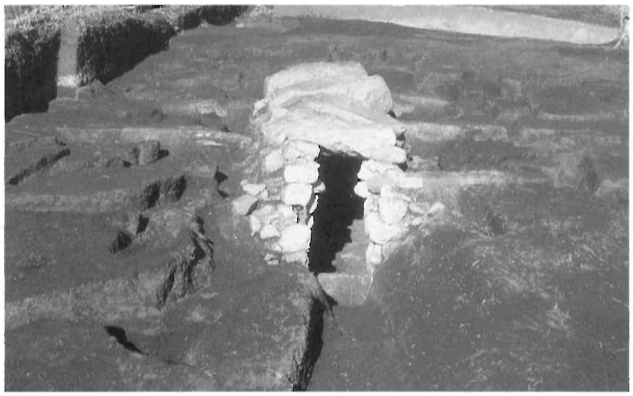
B．同前中央部土層（南東より）

C．同前封土南北土層（南西より）

D．同前封土東西土層（南東より）

E．同前封土南北土層北半部（東より）

F．同前石室天井石と旧地表面の掘込（北より）



G．同前封土除去後の石室（南より）

H．同前（東より）

Ａ．４号墳石室羨道東壁（西より）

Ｂ．同前石室羨道西壁（東より）

Ｃ．同前玄門（南より）

Ｄ．同前玄門 横断面（南より）

Ｅ．同前石室根石（南より）

Ｆ．同前玄室横断面（南西より）

Ｇ．同前石室根石（北より）

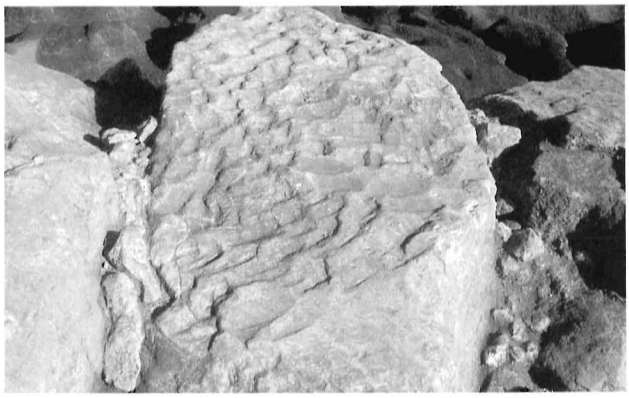
Ｈ．同前玄室 横断面（南より）

図版 12

A．４号墳石室掘方（南より）

B．同前（北より）

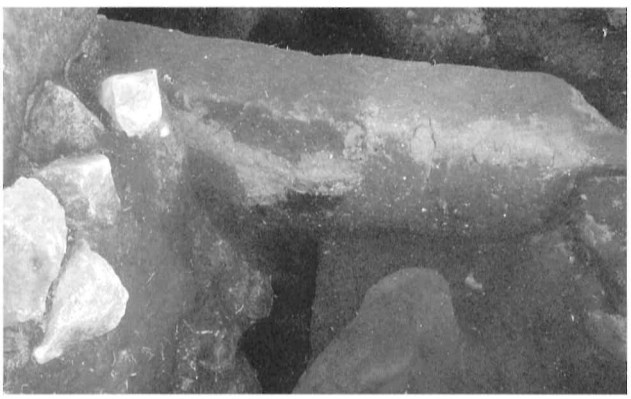
C．同前東壁北半の抉込み（西より）



D．同前石室天井石上部の加工痕（西より）

E．同前天井石の加工痕（東より）

F．同前近接（東より）



G．同前石室上部の裏込め（東より）

H．同前（南より）

A．５号墳調査前全景（南より）

B．同前全景（南より）

C．同前周溝南側土層（西より）

D．同前周溝北側土層（東より）

E．同前周溝南東部土器出土状態 (1)（東より）

F．同前周溝南東部土器出土状態 (2)（南東より）

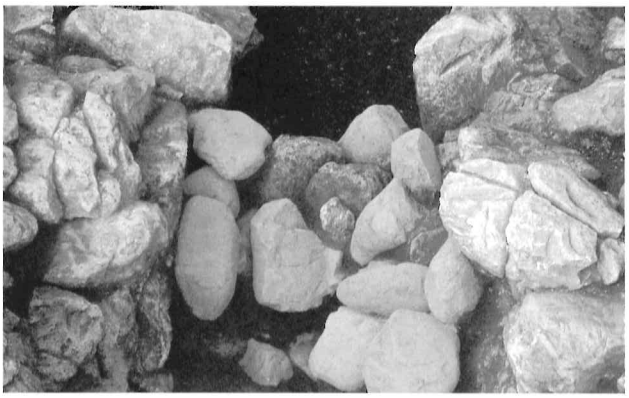
G．同前石室南側の河原石出土状態（南より）

H．同前石室確認状況（南より）

図版 14

A．５号墳石室全景（南より）

B．同前（北より）



C．同前閉塞（南より）

D．同前玄門部（北より）

E．同前石室（北東より）

F．同前玄門部（北より）

G．同前羨道東壁（西より）

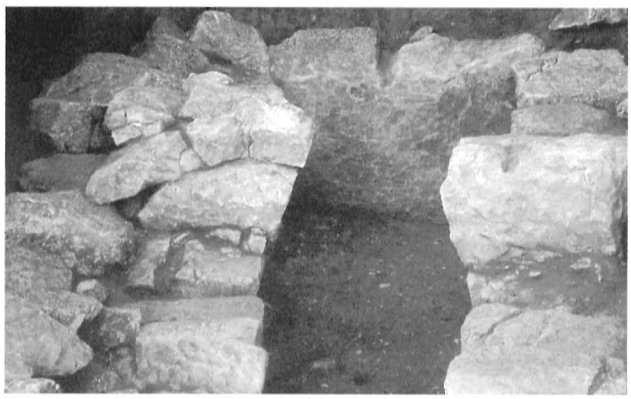
H．同前羨道西壁（東より）

Ａ．５号墳羨道追葬時床面（南より）

Ｂ．同前羨道追葬時床面（南面）

Ｃ．同前羨道部掘方底面（南より）

Ｄ．同前玄門部断面（南より）



Ｅ．同前奥壁（南より）

Ｆ．同前玄室 横断面（南より）

Ｇ．同前墳丘封土東側土層（南より）

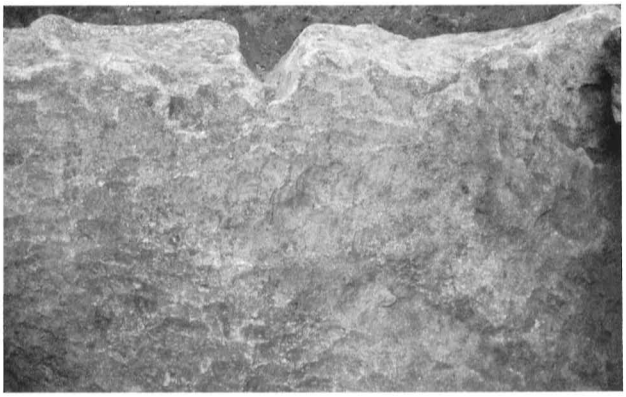
Ｈ．同前墳丘封土北側土層（東より）

図版 16

A．５号墳石室根石（南より）

B．同前石室根石（北より）

C．同前石室奥壁（南より）



D．同前二次加工痕（南より）

E．同前石室奥壁縦断面（西より）

F．同前石室掘方（南より）

G．同前石室掘方（北より）

H．同前東壁の抉込み（北西より）

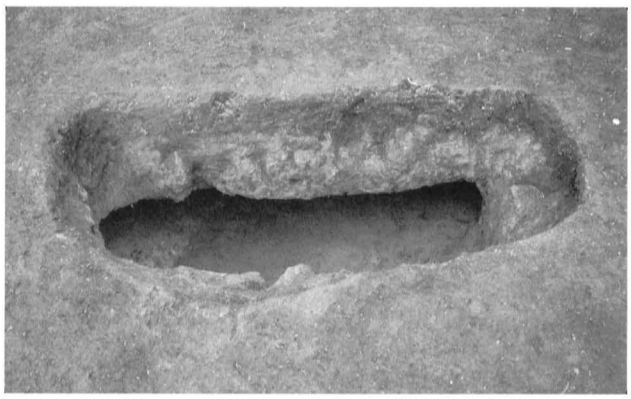
Ａ．１号墓全景（南より）

Ｂ．同前西側の土壙完掘（南より）

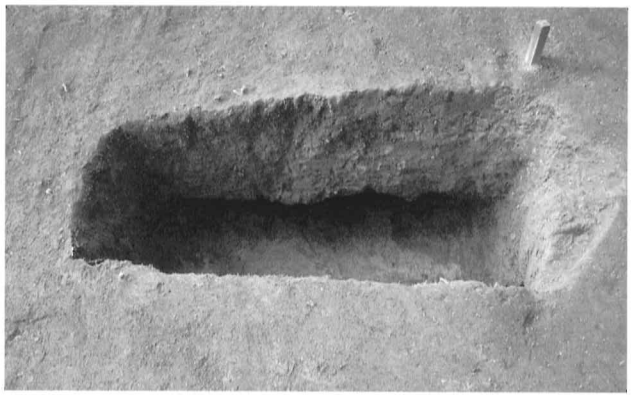
Ｃ．同前土壙北端の炭化物（南東より）

Ｄ．4 号墳北東の土壙群（南西より）

Ｅ．SK-02 完掘（南より）



Ｆ．SK-03 完掘（南より）



Ｇ．SK-05 完掘（東より）

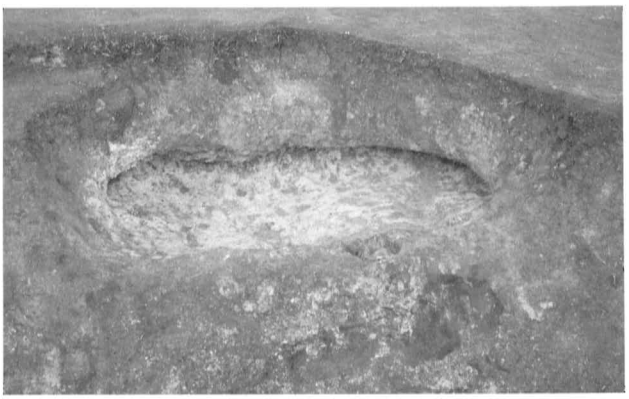
Ｈ．SK-06 完掘（南西より）

図版 18

A．SK-06 手前のローム土中土器出土状態（東より）

B．SK-07 完掘（南より）

C．SK-08・09 完掘（南東より）

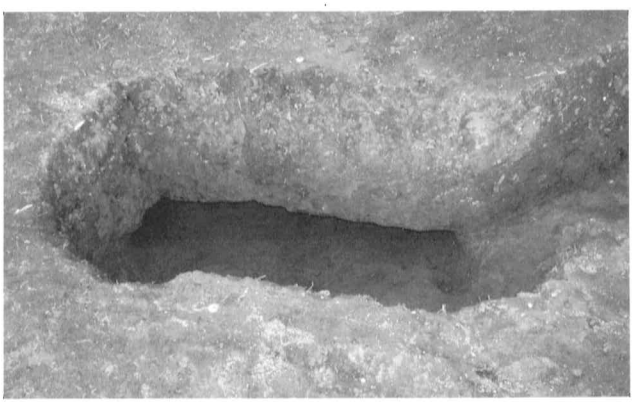


D．SK-10 完掘（南より）

E．同前手前の土器出土状態（南より）

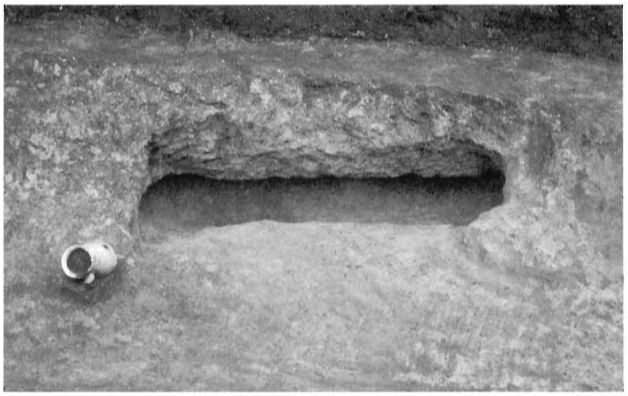
F．SK-11 完掘（南より）

G．SK-12 完掘（南より）



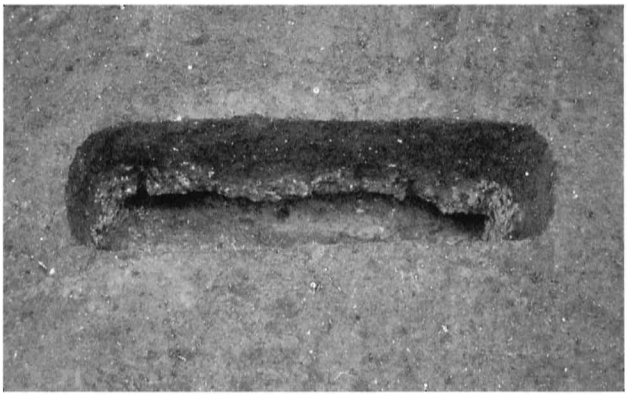
H．SK-13 完掘（南西より）

A．SK-14 完掘（南より）



B．SK-18 完掘（西より）

C．SK-19 完掘（南西より）



D．SK-20 完掘（南より）

E．SK-21 完掘（南東より）

F．４号墳丘下の遺構（南東より）

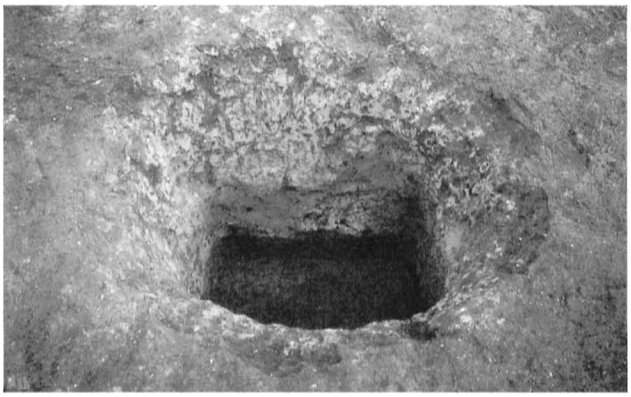
G．SK-04 完掘（南東より）

H．SK-15 完掘（南より）

図版 20

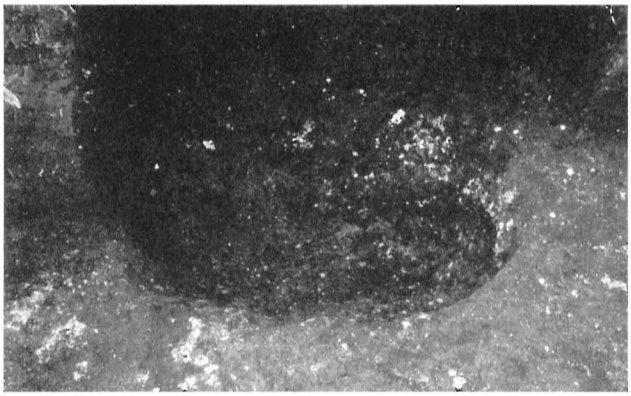
A．SK-16 完掘（南西より）

B．SK-17 完掘（南より）



C．SK-22 完掘（西より）

D．SK-23 完掘（東より）

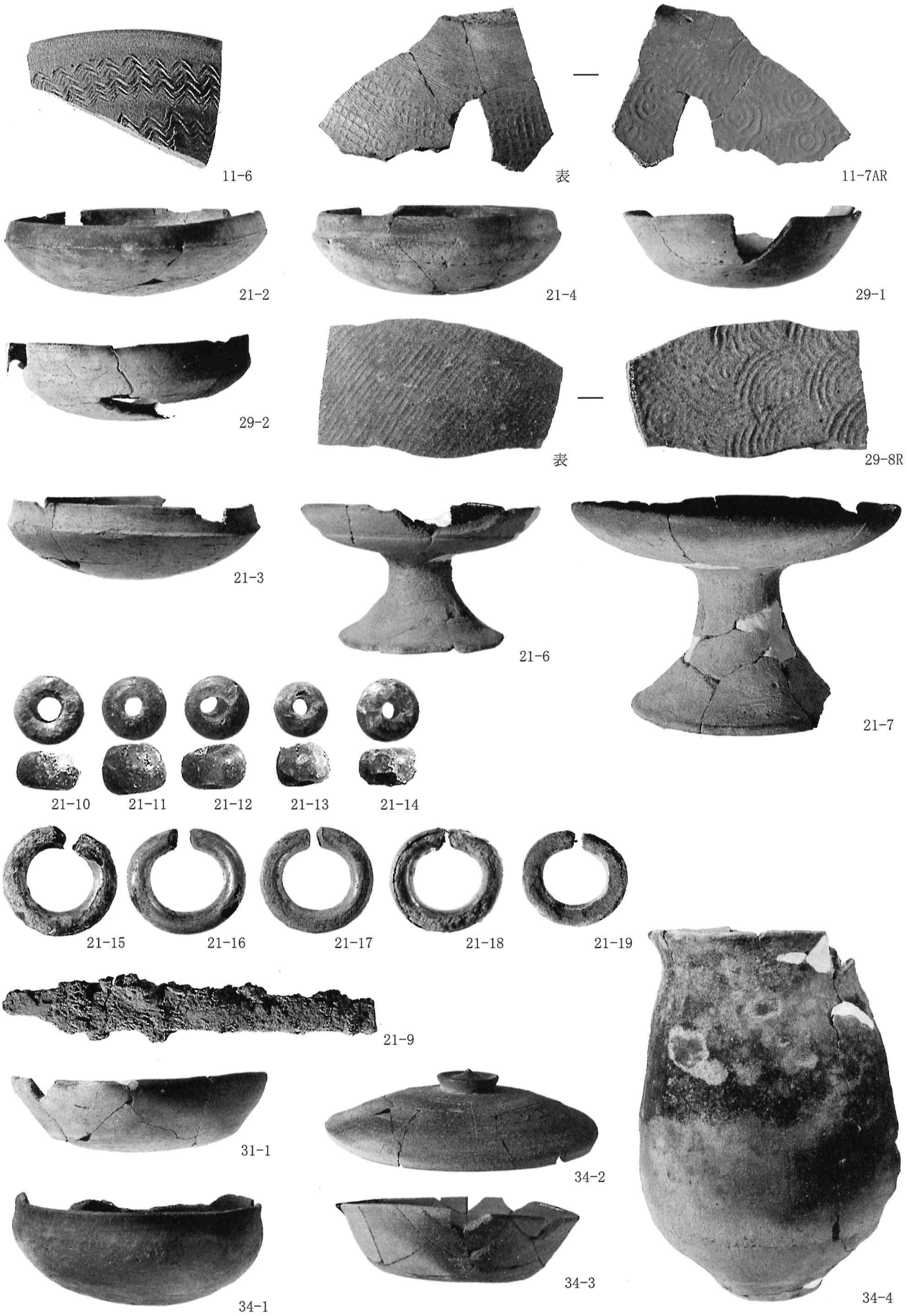


E．SK-24 完掘（東より）

F．SS-1 完掘（南より）

G．SX-01 完掘（東より）

H．SX-02 完掘（西より）

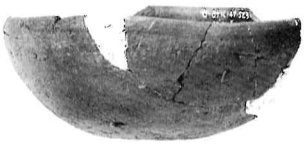


3～5号墳、1号墓、SK-06・10・18出土遺物

12-1

12-2

12-3


12-5

12-4

12-6

12-8

12-9

12-12

12-14

12-15

12-11

12-16

12-13

12-17

12-18

12-19

12-20

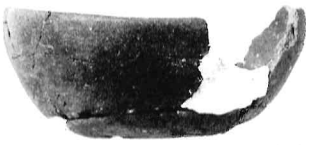
12-21

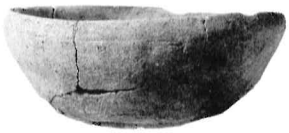
12-22

12-23

12-24

12-25


12-26


12-27

12-28

12-29

12-30

3号墳土器集中区出土土器（1）

13-31

13-32

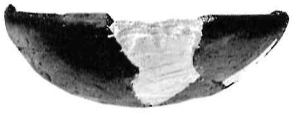
13-34

13-35

13-36

13-37

13-39


13-40

13-41

13-42

13-43

13-44

13-45

13-46

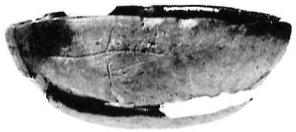
13-47

13-48

13-49

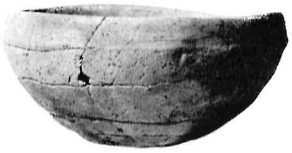
13-51

13-52


13-53

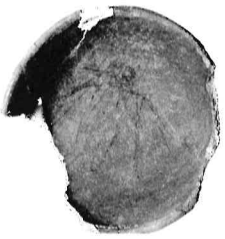
13-54

13-55


13-56

13-57

12-3 内

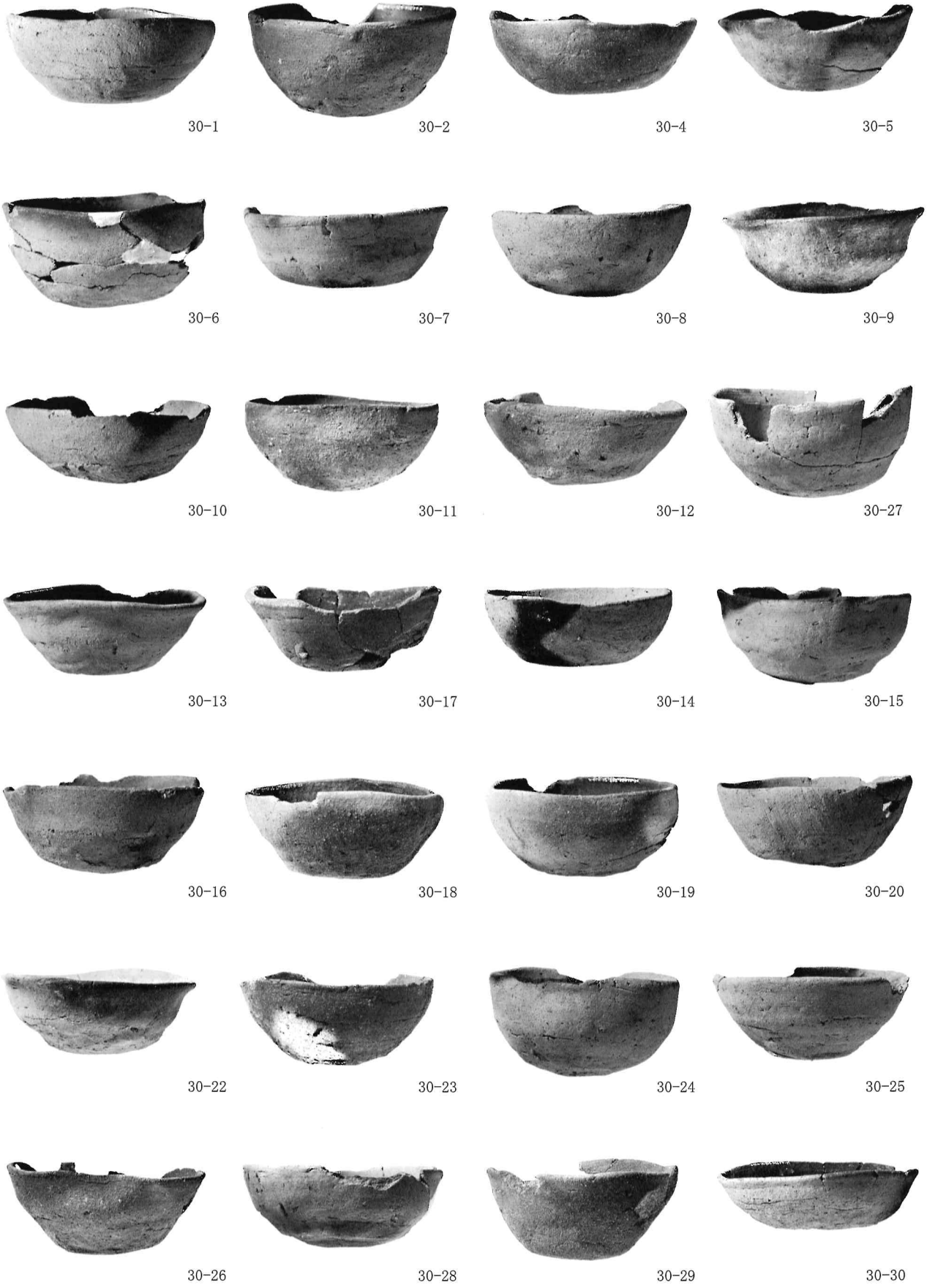

12-5 内

12-28 内

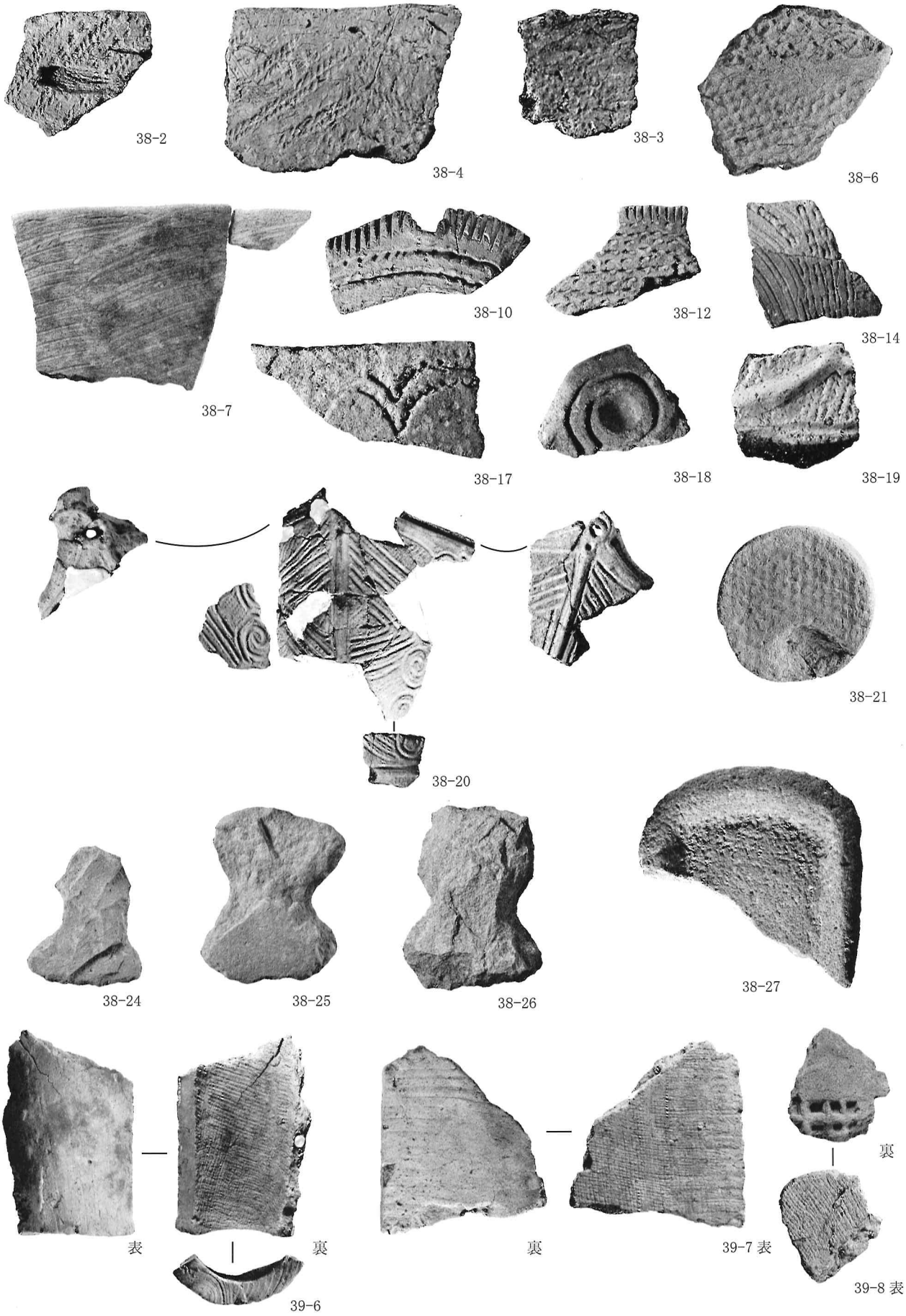
13-57 内

13-57R

3 号墳土器集中区出土土器（2）



5号墳周溝南東部出土土器



その他の出土遺物（縄文土器、石器、瓦）

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおつかこふんぐん びいく
書名	大塚古墳群（Ｂ区）
副書名	
巻次	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第87集
編著者名	石川和弘・水野順敏・柏崎広伸・新井　潔
編集機関	株式会社　日本窯業史研究所
所在地	〒324-0611　栃木県那須郡那珂川町小砂3112　　ＴＥＬ 0287-93-0711
発行機関	宇都宮市教育委員会
所在地	〒320-8540　栃木県宇都宮市旭1-1-5　　ＴＥＬ 028-632-2764
発行年月日	西暦2014（平成26）年7月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおつかこふんぐん 大塚古墳群 （Ｂ区）	うつのみやしかみとまつりちょう 宇都宮市上戸祭町 あざおおつか 字大塚	9201	2359	36° 35′ 25″	139° 52′ 24″	20130910 ～ 20140125	約1,900㎡	民間宅地開発に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大塚古墳群	古墳群 散布地	・古墳時代 ・奈良時代 ・縄文時代	・円墳　3基 ・壙穴　16基 ・墓跡、壙穴　各1基 ・土坑　7基 ・不明遺構　2基 ・集石遺構　1基	・土師器、須恵器、耳環ガラス小玉、刀子 ・土師器、須恵器 ・縄文土器（前期～後期）、石器（打製石斧・石皿）	

要約	・３基の円墳のうち２基に石室が遺存し、１基は天井石まで残存していた。副葬品は少ないものの、３号墳は封土中より約80個体、５号墳は周溝内より30個体の土師器坏がまとまって出土した。

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第87集

大塚古墳群（Ｂ区）

発行年月日　2014（平成26）年7月31日
編　　集　株式会社　日本窯業史研究所
〒324-0611　栃木県那須郡那珂川町小砂3112
TEL 0287-93-0711
発　　行　宇都宮市教育委員会文化課
〒320-8540　栃木県宇都宮市旭1-1-5
TEL 028-632-2764
印　　刷　下野印刷　株式会社
〒320-0061　栃木県宇都宮市宝木町1-28-11
TEL 028-622-6953